

福岡市  
神松寺遺跡

—弥生時代住居址と前方後円墳の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集



1 9 7 8

福岡市教育委員会

福岡市

# 神松寺遺跡

—弥生時代住居址と前方後円墳の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集



1 9 7 8

福岡市教育委員会

## 序 文

近年、土地開発事業による埋蔵文化財の調査が、後をたたない状態です。我々の祖先が残した貴重な文化財は、子孫に継承していかねばなりませんが、現実では、開発の要請と保護との調整が極めて困難であります。

この神松寺遺跡も地区公民館の新築工事のため調査することになり、国庫補助事業で実施しました。

発掘調査の成果につきましては、報告書に見られるように多くの成果をあげることができました。これも地元作業員を始め、多くの人達の埋蔵文化財への深いご理解とご協力によるものであり、深甚の敬意を表するものであります。

本書が、市民各位の文化財保護思想の育成に活用されますと共に、学術研究の分野において、役立つことを願うものであります。

昭和53年 3月31日

福岡市教育委員会

教育長 戸田成一

## 例　　言

1. 本書は福岡市西区片江、神松寺地区の公民館建設に伴い、福岡市教育委員会文化課が昭和52年度の国庫補助を受け、昭和52年5月～6月に行った神松寺遺跡の報告書である。
2. 本書の執筆には山崎純男、沢臣、山口謙治、横山邦継、前田義人、原俊一があたり、各分担は文末に記した。
3. 本書に使用した図の作製には、山崎、沢、山口、横山、前田、原、奈良崎があたった。製図は前田、原、奈良崎によるところが多い。
4. 本書の写真は沢、山崎の撮影によるものである。
5. 本遺跡出土の炭化種子は未同定であるが、おって報告する予定である。
6. 本書の編集は山崎がおこなった。
7. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。

(承認番号) 昭53九復、第29号

# 神松寺遺跡

## 本文目次

第1章 序説	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	2
3. 周辺の遺跡	2
(付) 先土器時代の遺物	7
第2章 神松寺御陵古墳の調査	9
1. 位置と現状	9
2. 墳丘	9
3. 横穴式石室	12
4. 遺物	16
第3章 住居址の調査	27
1. 住居址の分布と構造	27
2. 住居址	28
3. 遺物	36
第4章 まとめ	52
1. 神松寺御陵古墳	52
(1) 神松寺御陵古墳の平面図形の検討	52
(2) 被葬者の性格と古墳の年代	56
2. 神松寺遺跡(第2地区)	58
(1) 住居址	58
(2) 神松寺遺跡出土の石器をめぐって	59
付、淨泉寺出土の須恵器	63

## 図版目次

### 本文対照頁

P.L. 1 (1) 遺跡遠景(西南より)	9
(2) 神松寺御陵古墳の現状	9
P.L. 2 (1) 神松寺御陵古墳Bトレンチ断面	14
(2) 神松寺御陵古墳Aトレンチ断面	14
(3) 神松寺御陵古墳に対する祭壇状遺構	9

P L. 3	(1) 神松寺御陵古墳の石室と地山整形.....	11
	(2) 神松寺御陵古墳の地山整形溝.....	11
P L. 4	(1) 神松寺御陵古墳の石室と墳丘遺存状況.....	13
	(2) 神松寺御陵古墳の墓壙と石室.....	11
P L. 5	(1) 神松寺御陵古墳の石室と供獻土器.....	12
	(2) 神松寺御陵古墳石室閉塞状況.....	14
P L. 6	(1) 神松寺御陵古墳石室（玄室より前室をみる）.....	14
	(2) 神松寺御陵古墳石室（羨道より）.....	14
P L. 7	(1) 神松寺御陵古墳石室（南より）.....	14
	(2) 神松寺御陵古墳石室（北より）.....	14
P L. 8	(1) 神松寺御陵古墳石室奥壁.....	15
	(2) 神松寺御陵古墳石室の壁体.....	15
P L. 9	(1) 神松寺御陵古墳の石室と墓壙.....	15
	(2) 神松寺御陵古墳の石室腰石と墓壙.....	15
P L. 10	(1) 神松寺遺跡第1群住居址.....	30
	(2) 神松寺遺跡10号住居址.....	32
P L. 11	(1) 神松寺遺跡住居址全景.....	27
	(2) 神松寺遺跡第3群住居址.....	28
P L. 12	(1) 神松寺遺跡1号住居址（南より）.....	28
	(2) 神松寺遺跡1号住居址（北より）.....	28
P L. 13	(1) 神松寺遺跡16号住居址遺物出土状況.....	34
	(2) 神松寺遺跡20号住居址遺物出土状況.....	35
P L. 14	神松寺遺跡出土遺物（石器）.....	47
P L. 15	神松寺遺跡出土遺物（右肩丁）.....	47
P L. 16	神松寺遺跡出土遺物（鉄器）.....	50
P L. 17	神松寺御陵古墳・神松寺遺跡出土遺物.....	47

## 挿 図 目 次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 .....	3
Fig. 2	神松寺丘陵の遺跡分布 .....	4
Fig. 3	先土器時代遺物実測図 .....	7
Fig. 4	尖頭器実測図 .....	8

Fig. 5	神松寺御陵古墳墳丘測量図	10
Fig. 6	神松寺御陵古墳地山整形図	11
Fig. 7	神松寺御陵古墳墳丘遺存図	13
Fig. 8	神松寺御陵古墳閉塞部実測図	14
Fig. 9	神松寺御陵古墳墳丘断面図	14~15
Fig. 10	神松寺御陵古墳石室実測図	14~15
Fig. 11	神松寺御陵古墳石室基底面実測図	15
Fig. 12	神松寺御陵古墳遺物出土状況図	16
Fig. 13	神松寺御陵古墳遺物実測図Ⅰ	17
Fig. 14	神松寺御陵古墳遺物実測図Ⅱ	18
Fig. 15	神松寺御陵古墳遺物実測図Ⅲ	19
Fig. 16	神松寺御陵古墳遺物実測図Ⅳ	20
Fig. 17	神松寺御陵古墳遺物実測図Ⅴ	21
Fig. 18	神松寺御陵古墳遺物実測図Ⅵ	21
Fig. 19	神松寺御陵古墳遺物実測図Ⅶ	23
Fig. 20	神松寺御陵古墳遺物実測図Ⅷ	24
Fig. 21	神松寺遺跡の住居址分布図	27
Fig. 22	第3群住居址	29
Fig. 23	第1群住居址	31
Fig. 24	第4群住居址	33
Fig. 25	第5群住居址	35
Fig. 26	弥生式土器実測図Ⅰ	37
Fig. 27	弥生式土器実測図Ⅱ	38
Fig. 28	弥生式土器実測図Ⅲ	41
Fig. 29	弥生式土器実測図Ⅳ	44
Fig. 30	弥生式土器実測図Ⅴ	45
Fig. 31	弥生式土器実測図Ⅵ	46
Fig. 32	石器実測図Ⅰ	48
Fig. 33	石器実測図Ⅱ	49
Fig. 34	鉄器実測図	51
Fig. 35	神松寺御陵古墳石室の方眼による操作結果	53
Fig. 36	神松寺御陵古墳墳丘の方眼による操作結果	54
Fig. 37	熊本県長塚古墳の方眼操作結果	55

- Fig. 38 石庖丁の計測位置 ..... 60  
Fig. 39 浄泉寺出土の須恵器実測図 ..... 63

## 付 表 目 次

- 第1表 福岡市における先土器時代遺跡一覧表 ..... 8  
第2表 神松寺御陵古墳出土玉類計測表 ..... 25  
第3表 神松寺御陵古墳出土土器計測表 ..... 26  
第4表 神松寺遺跡出土の石庖丁計測値 ..... 50  
第5表 神松寺遺跡住居址一覧 ..... 59

## 第1章 序 説

### 1. 調査に至る経過

本遺跡は『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表(総集編)』においてNo.554 神松寺古墳 円墳(径15m) 壓穴式石室(?)として確認された周知の遺跡である。昭和49年、近在する西区田島三丁目所在の京ノ限遺跡発掘調査の折、穂井川流域の古式古墳の関連遺跡として神松寺古墳の現況地形測量図と石室(玄室)の清掃、実測図の作成を行った。

その結果は前記地名表の記載事項を若干訂正するものであった。墳丘は地形の変化が著しく、即断はできなかったが、前方後円墳の可能性が強くまた石室は從来いわれてきた壓穴式石室ではなく、6世紀代の横穴式石室であることが判明した。

その後、神松寺古墳周辺の宅地化が一段と進展し、もともと、古墳東側は老松神社によって墳丘の一部が削られ、北側は土取り工事によって墳丘南より急崖をなしていたのに加え、西側が宅地造成工事により墳裾ぎりぎりに削られ、墳丘のみが取り残された状態となり崩壊の危険にさらされるにいたった。時を同じくして、地元神松寺地区の公民館建設の計画が具体化し、その建設用地として地区所有である神松寺古墳の地があてられ、地元より市教育委員会文化課に対し古墳の調査依頼があった。これを受けた文化課では同古墳の重要性を考慮し再三にわたり保存の方向で地元との交渉を行ったが、墳丘そのものが崩壊の危険性が強いことや、地元の公民館建設に対する強い要望によって、やむなく現地保存を断念し記録保存としての発掘調査を実施することになった。調査は昭和52年度の国庫補助を受けて昭和52年5月24日より6月30日の約1ヶ月間にわたって実施した。その結果は、先の調査(第一次)を補足するもので、複室の横穴式石室を内部主体とする前方後円墳であること確認し、さらに、墳丘下に弥生時代後期の住居址20軒を確認、調査した(第二次)。

遺跡は今回の発掘調査や宅地造成によって自然地形を残す部分はわずかになってしまったが、なお数軒の住居地の存在が考えられ、その保存処置が要望される。

なお、神松寺古墳は地元では御陵と呼ばれ、古墳の下の通称名としても御陵がつかわれているので、神松寺遺跡との混同をさけるため神松寺御陵古墳と改める。また、墳丘下、周辺の住居址(集落)は、神松寺遺跡(埋葬遺跡)と性格が異なるが、同一丘陵に存在するので、そのまま遺跡にふくめ、神松寺遺跡の第2地区とする。

神松寺御陵古墳については先に報告したが本報告と若干異なる部分があるが、本報告を正式なものとし、先の報告を訂正する。

注(1) 福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表(総集編)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第12号  
1971年

(2) 山崎純男「神松寺古墳」『京ノ限遺跡』(段谷地所株式会社)所収 1976年

## 2. 調査体制

調査地区 福岡市西区片江字神松寺  
 調査期間 第一次 昭和50年5月17日～5月20日  
               第二次 昭和52年5月24日～6月30日  
 調査主体 福岡市教育委員会文化課

### 調査関係者

福岡市教育委員会 教育長	戸田成一
社会教育部長	青木 崇
主幹	志鶴 幸弘
文化課長	清水義彦
庶務、会計 埋蔵文化財係長	二宅安吉 国武勝利
発掘調査	山崎純男 沢 皇臣
	横山邦難 山口譲治
調査補助員 前田義人	原俊一 奈良崎和典
曾根田論	久保達三 市橋和夫
整理補助員 毛利真弓	有川信子

### 地元協力者

大穂恒季	大穂金作 天野富美子 篠原智津子
大穂芳子	野上ワチノ 青木ナオニ 大穂朝子
大穂玉枝	大穂アキ子

## 3. 周辺の遺跡

今回発掘調査を実施した神松寺遺跡、御陵古墳は、福岡平野と早良平野を二分する平尾丘陵が油山に源を発する穂井川、一本松川、駄ヶ原川、片江川によって開析され狭小な沖積平野を形成する。いわゆる穂井川流域に位置している。この地域は和名類聚抄に記される早良郡毗伊郷に比定されることは諸氏の認めるところである。この地域は最近市街化が進み遺跡の調査件数も多くその内容が明らかになりつつある。弥生時代の代表的な遺跡として知られる宝台遺跡<sup>註10</sup>や丸尾台遺跡<sup>註11</sup>もこの流域に占地している。穂井川流域の遺跡、歴史的環境についてはすでに多くの報告書において解説されているので本稿では今回調査した神松寺遺跡をのせる丘陵における遺跡のあり方を概観してみよう。

この丘陵は金山（標高54.8m）より派生した支脈で長さ約500m、幅100m、標高20～30mの細長い台地で所々に小さな谷が開析され、いくつもの頂部をつくり出し複雑な地形を生み出

註10) 高倉洋彰編『宝台遺跡』日本住友公司 1970年



Fig. 1 周辺遺跡分布図 1. 京ノ隈遺跡 2. カルメル修道院内遺跡 3. 神松寺遺跡  
4. 丸尾台遺跡 5. 宝台遺跡



Fig. 2 神松寺丘陵の遺跡分布  
①カルメル修道院内遺跡  
②淨泉寺遺跡  
③神松寺遺跡（第1地区）  
④神松寺御陵古墳  
⑤神松寺遺跡（斐梧, 第2地区）  
⑥神松寺遺跡（石棺, 第3地区）  
⑦甕棺破片採集地  
⑧須恵器出土地

ている。台地の大部分は宅地化によって削平され自然地形を残すところは少い。この丘陵上には古くより神松寺壺棺遺跡が知られていたが、最近の宅地造成に伴う調査で高い密度で遺跡が存在することが判明した。<sup>(註2)</sup> 台地西からカルメル修道院内遺跡、淨泉寺遺跡、神松寺遺跡など<sup>(註3)</sup> 並び、また、淨泉寺遺跡の北側丘陵はその状況より遺跡の存在する可能性が高く、西側の造成終了の地では金海式の壺棺の破片が採集されている<sup>(註4)</sup> ので宅地造成工事によって壺棺遺跡が消滅した可能性が高い。この丘陵の遺跡群は時期的には先土器時代から古墳時代にかけてのものであるが、その主体を占めるのは弥生時代の遺跡である。先土器時代の遺跡としては確実な包含層を把握できるものはないが、カルメル修道院内遺跡の木棺墓掘り方の埋土より尖頭器1点と今回調査した神松寺遺跡より尖頭器1点の出土があった。章末にその解説を付記する。

カルメル修道院内遺跡は弥生時代の墓地で二次にわたって小範囲の調査を実施した。第一次調査は遺跡の発見時で金海式の成人用壺棺と小児用壺棺各1基の調査で終了したが周囲に多くの遺構の存在を確認した。その後、修道院の移転改築に伴い第二次調査として墓地の範囲確認とその一部を調査し、新に木棺墓5基と小児用壺棺墓1基を調査した。小児用の木棺墓1基からは銅鏡3個が出土した。墓地は一部、修道院建設により削平されているが、丘陵南斜面に標高にそって列をなしてならんでいる。主体を占めるのは木棺墓で壺棺墓は木棺の上に埋置されたものである。弥生時代前期～中期初頭に形成された墓地である。

淨泉寺遺跡は、昭和47年、宅地造成工事に先立って福岡市文化課が発掘調査を実施した遺跡である。遺跡はほぼこの丘陵の中央部に位置し、遺跡は3ヶ所の頂部をもっている。調査では弥生時代前半～中期初頭にわたる袋状竪穴46基と不整形ピット5基、中期の円形住居址2軒、後期の方形住居址3軒、古墳時代の方形住居址2軒を確認した。住居址は丘陵全域に散在した状態で、なおかつ削平消滅により集落構成は把握できない。袋状竪穴は掘り込みも深く遺存状態が良好で削平消滅したものはないと考えられその分析は可能である。地形的あるいは分布状態から3群に分けられ、1群はそれぞれ10数基の袋状竪穴よりなりたつ。遺物には土器類、石器、石器未製品などがあり、注目すべきものとして第6号住居址（弥生後期）より鐵鎌1点の出土がある。また、40号、47号、52号、53号袋状竪穴からはヒメタニシ、アサリ、マガキを主体とする貝層が検出され、同層からはアワビガイ製の貝冠丁や歯骨類も出土している。これらは当時の食料残滓であり、石冠丁等の生産具とともに弥生時代の生産活動の一端を示している。

神松寺遺跡は古く水野精一、島田貞彦氏によって調査され、弥生時代前半～中期にかけての壺棺墓地であったことが判明している。遺跡の大部分は宅造成工事によって壊滅しているが、今回の調査時まで崖面に壺棺の一部が残存していた。地元の人の聞き書きによれば丘陵部は

(註2) 中原志外類・石井 忠・下條信行「五辻合遺跡報告」「宝谷遺跡」所収 1970年

(註3) 山崎純男「福岡市カルメル修道院内遺跡調査報告」「京ノ原遺跡」所収 1976年

(註4) 村岡利雄、松村道博、他『淨泉寺遺跡』1974年

(註5) 水野精一、島田貞彦「北九州における壺棺調査報告」「人類学雑誌」第43巻第10、11号 1928年

(註6) 市文化課横山邦興氏の表示による。

### 3 周辺の遺跡

県道を超えてさらに東に延び片江川に面するところまで網長く延びており、県道の付設工事あるいは宅地造成によっておびただしい斂棺と石棺が出土したという。今回我々が調査した地区は、水野、島田両氏の調査地区より南に片寄った丘陵端であるが、後期の住居址の埋土中には若干ではあるが前期末～中期初頭の土器片が混入しており神松寺遺跡の斂棺墓地を残した人々の居住地区もあまり離れたところではなく周辺部に求められる。石棺群は今回調査した住居址との関係が求められ、古墳に使用された石棺材はこの石棺群より持つてこられた可能性が高い。

以上のように狭い範囲の同一丘陵において同一時期の遺跡が多いことは、この遺跡間に何らかの関係が成り立ち、当時の社会構造の一端をつかむことができるものと考えている。前述した浄泉寺遺跡はこの丘陵のはば中央に位置していて、確認された袋状堅穴群が3群に分かれることはこの関係を具体的に示すものであろう。この丘陵の大部分は宅地造成が進み遺跡の全体像は把握しがたいが、カルメル修道院内遺跡、神松寺斂棺遺跡あるいは浄泉寺遺跡西側の斂棺墓地の消滅した可能性のあるところは、浄泉寺遺跡の袋状堅穴の3群にそれぞれ対応するものと考えられる。前期末～中期初頭の住居址の発見はないが、墓地と袋状堅穴の対応関係より類推し、この丘陵上における遺跡の相互関係は三ヶ所の集団が浄泉寺遺跡における袋状堅穴（貯蔵形態と末製石器にみる作業場）を共有し、墓地は各集団が個別に形成したことが推測される。しかし、この関係は時間の経過と共に移り変わる。墓地の形成時期からみてみよう。カルメル修道院内遺跡では前期の木棺墓にはじまり、墓地の形成の最終時は金海式ないしは中期初頭の斂棺墓である。浄泉寺遺跡西側の斂棺破片は金海式のもので、他の破片はない。神松寺遺跡は金海式の斂棺墓にはじまり中期まで存続し、その数はかなりの量になることは地元の人の聞書きで明らかである。先に示した遺跡相互間の関係は前期末～中期初頭の段階であり、中期の墓地形成は神松寺遺跡のみに限定される。このことは、前段階で集団ごとに形成された墓地が一ヶ所に統合された結果と理解できよう。しかし、浄泉寺遺跡には中期の住居址があり、また神松寺遺跡には先に指摘したように中期の住居が想定でき、住居は前時代は継承しているとみることができる。このように複数の集団が墓地を共有する典型として宝台遺跡があげられる。<sup>註7)</sup> 後期は今回調査した神松寺遺跡の住居址や浄泉寺遺跡の住居址にみることができるが、資料的に不足しているためその変遷はつかみがたいが、単一の集落が拡大強化されていくことが想定できる。このような集落構造の変遷は生産地である沖積地の開発と密接な関係を有し、また社会的労働編成の変動の反映とみることができる。

古墳時代に至っては浄泉寺遺跡の住居址と今回調査した御陵古墳を知るのみである。古墳の築造はその多くは油山山麓において展開し、種井川流域の入口にあたる丘陵先端の頂部に立地する古墳は神松寺御陵古墳と京ノ隈古墳を知るのみで、その墳形は前方後円墳と前方後方墳である。油山山麓の群集墳とは隔絶され、その立地条件や墳形からみてこれらの古墳の被葬者が種井川流域を代表するものであることは容易に推測できる。

(山崎)

註7) 下條信行・高倉洋彰「集落について」『宝台遺跡』所収 1970年

8) 山崎純男「京ノ隈古墳」1976年

## (付) 先土器時代の遺物

1はカルメル修道院内遺跡の第二次調査中、第2号木棺墓の埋土中より出土した三稜尖頭器である。古銅輝石安山岩製の厚い横剥ぎ剝片を素材として、打面及び剝片先端に角度のある二次加工を加えて、断面三角形に形づくっている。長さ6.4cm、最大幅1.5cm、最大厚1.5cm。

2は今回の神松寺遺跡調査中に、花崗岩煤乱土から出土した三稜尖頭器である。良質の黒輝石製の横剥ぎ剝片を素材として裏面から角度のある二次加工を加え断面三角形に形づくっている。基部は末加工で表皮が残っているが、先端部は裏面に一条の瘤状剝離が加えられ貌くなっている。長さ3.6cm、最大幅1.4cm、最大厚0.95cm。

1、2の三稜尖頭器の2点とも、弥生時代の遺構調査中に出土したものであるが、製作技法、及び三稜尖頭器を出土した大分県岩戸・百枝遺跡等の発掘調査によって先土器時代包含層中でナイフ形石器と共に共伴していること、また三稜尖頭器の土器共伴例がないこと等から、先土器時代ナイフ形石器文化期の所産と考えられる。二遺跡とも穗井川流域に位置しているが、他に先土器時代の遺跡として、五ヶ村池遺跡がありナイフ形石器が採集されている。いずれも偶然発見されたものであるが、北部九州では三稜尖頭器の発掘による出土例がなく、またこの地域は、花崗岩の岩盤上に、新規ロームが堆積しているところから、今後の調査に期待がもてる。

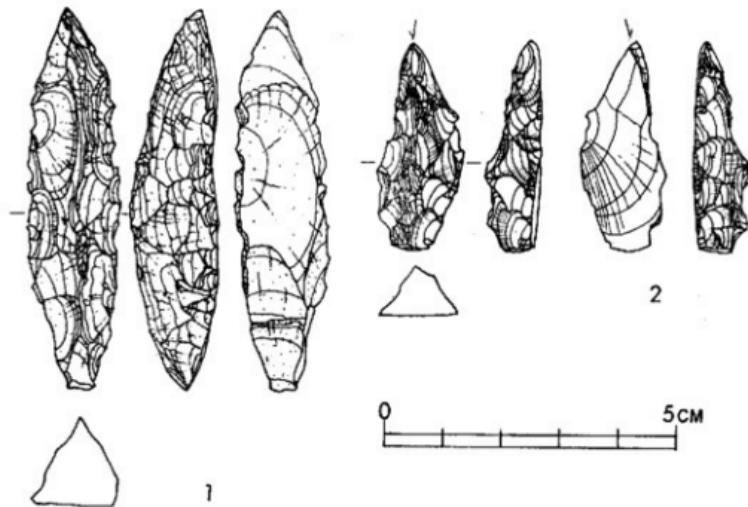


Fig. 3 先土器時代遺物実測図

## 3 周辺の遺跡

第1表

福岡市における先土器時代遺跡一覧表

番	遺跡名	所在地	出土遺物	備考	文献
1	高崎遺跡	西区大字六町字高崎	兩器		④
2	森納遺跡	西区大字六町字森納	細石刃核	継和子氏採集	②
3	馬立山遺跡	西区内野	ナイフ形石器	継和子氏採集	
4	羽原戸原遺跡	西区大字戸原	尖頭器、ナイフ形石器、細石刃	中原志外御氏、名越美也氏採集	
5	萩原遺跡	東区大字金式字萩原	石刃	大津高松氏	
6	瓦	西区七隈字馬鹿形五・村池	ナイフ形石器	中原志外御氏採集	
7	小田部遺跡	西区小田部	台形石器、細長剣片・石核	1977年福岡市教委員会調査	
8	小田部南畠遺跡	西区人字小田部字高畠	ナイフ形石器	1977年福岡市教委員会調査	
9	有山遺跡31街区	西区有山	ナイフ形石器	1977年福岡市教委員会調査	
10	カルメル修道院内	西区片丘	三棱尖頭器		
11	神松寺遺跡	西区大字片江字神松寺	台形石器、削片	先土器時代調査実施	⑥⑩⑪
12	五十川高木遺跡B	南区大字五十川高木町	ナイフ形石器		⑩
13	弥永遺跡A	昭和区大字弥永町1丁目	台形石器		⑨
14	弥永遺跡B	南区大字弥永町4・5丁目	ナイフ形石器		⑨
15	日佐原遺跡	南区大字日佐原	ナイフ形石器		⑨
16	諸道遺跡	博多区大字諸道字岡の前	ナイフ形石器		⑩
17	板付遺跡	博多区板付	鋸齒器、削片、石核	先土器時代調査実施	⑤⑩⑪
18	瀬田遺跡A	東区瀬田字北熊582	ナイフ形石器、台形石器、細石核		③⑩
19	瀬田遺跡B	東区瀬田字堀留	ナイフ形石器		⑤⑥⑦
20	瀬田遺跡D	東区瀬田字北熊	ナイフ形石器		③⑩
21	瀬田遺跡E	東区瀬田字北熊	ナイフ形石器		⑩
22	下和白遺跡	東区下和白	三棱尖頭器		①
23	雁巣砂丘遺跡	東区雁巣砂丘	ナイフ形石器	中原志外御氏採集	⑧⑩

## 参考文献

- (1) 佐藤正典・国平千鶴子・飯尾精一・橋本成史・鳥津義昭『昭和古墳辞典』1971年  
(2) 上野耕一『出土遺物』「今宮一・八木信山遺跡文化財調査報告書」第4集1976年  
(3) 井平良一・井上義之『福岡市吉木山遺跡出土の石器』『考古学ジャーナル』460 1972年  
(4) 井原和也・高崎洋輔・高崎洋一『福岡・八木山遺跡文化財調査報告書』第3集1973年  
(5) 佐藤正典・井上義之『福岡市吉木山遺跡文化財調査報告書』1976年  
(6) 佐藤正典・山口清治・原慶一『福岡市吉木山遺跡文化財調査報告書』1977年  
(7) 井原和也・井出光雄編『佐賀・新潟50万年前新石器時代とともにどう遺産報告書』1977年  
(8) 中村吉郎監修『西北の歴史をめぐらす』古文社1966年  
(9) 宮本利司『出土遺物と石器』『西陽新幹線沿線地域文化財調査報告書』1973年  
(10) 齋藤精一・椎山和夫・二宮忠一・力武利一編『福岡県出土の古物』1975年  
(11) 福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名実施報告』1971年  
(12) 松岡史・増本正雅・中原志外御・継和子氏『北九州の無字古文書文化学編』『九州考古学』7・8 1959年  
(13) 山口謙介『先土器時代』『板付西邊遺跡調査報告』(1977年)  
(14) 山口謙介『先土器時代』『板付西邊遺跡調査報告』(2)1978年  
(15) 山口謙介『福岡遺跡』『日本の旧石器文化』第3章1976年  
(16) 橋本光輔『諸道遺跡』『板付東邊調査報告』(3)1976年

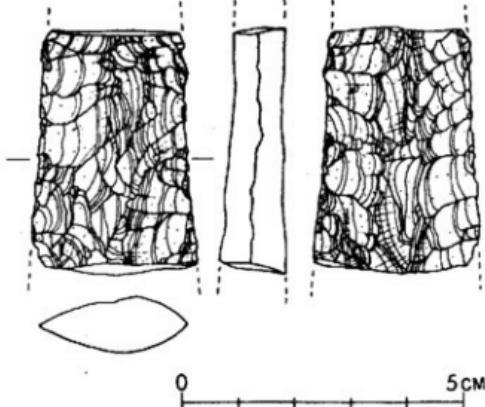


Fig. 4 尖頭器実測図

## 尖頭器

神松寺遺跡出土と伝えられている尖頭器である。古銅輝石安山岩を素材として、表裏とも入念に押圧剥離が加えられ、断面がレンズ状になるよう仕上げられている。先端・基部とも欠損しているため原形は分らないが、20cm前後の中舌尖頭器と思われる。

福岡大学歴史研究部の保管する遺物である。

(山口)

## 第2章 神松寺御陵古墳の調査

### 1. 位置と現状

福岡市西区大字片江字神松寺に位置する。樋井川流域の出口に近く、金山（標高51.8m）より伸びた低丘陵の東南端頂部に立地し、この丘陵下において樋井川と片江川が合流する。墳丘は東側と北側が墳裾で大きく削り取られ崖面となり、旧状をとどめているのは南側と西側である。特に東側は老松神社の建立に際して墳丘が大きく削除されている。老松神社に奉納されている駿馬には江戸時代末期のものがみられ、墳丘の削除されたのは江戸時代までさかのぼるものであろう。その時の墳丘削除に伴い古墳の存在が認識されたと考えられる。それを証明するものとして、今回の調査で確認した祭壇状の遺構がある。古墳の発見に伴い石室の横に祭壇が設置され、古墳が老松神社の御神体の一部になったことがうかがえる。境内には石棺材と思われる石材も散在する。墳丘は盛土の流失や敷度に及ぶ盗掘によって大きく変形され、旧状をとどめていた西側も今回墳裾いっぱいに削除され、墳丘のみを残して急崖となっている。現状で長径26.5m、短径12m、高さ3.5mの長椭円形をなすが、頂部が2ヶ所に存在し、前方後円墳か円墳が2基あるようにみえ墳形の断定は不可能である。南側頂部よりやや片寄って石室が構築されているが天井部が崩落し壁体の一部が観察できる状態であった。調査以前は堅穴式石室ではないかとされていたが、第一次の調査で横穴式石室であることを確認した。

### 2. 墳丘

**地山整形 (Fig. 6)** 本墳は丘陵先端部の最頂部を利用して構築されたものである。当然のことながら墳丘の基底をなす地山整形は自然地形をうまく組み入れて行なわれていることが予測できた。現状で墳丘の約半分を失っているが、発掘調査の結果は地山整形のあり方がよく観察できた。周溝の存在は確認できなかったが、もともと本墳には周溝はめぐっていなかったと考えられる。古墳構築のための地山整形は墳丘基底面の整地と古墳外形の削り出しの二つの作業工程よりなる。

地山整形の作業工程の第1段階として、丘陵頂部を削平して古墳の規模に適した平坦面の確保が要求されたと考えられる。A～Cトレチの断面観察ではかなりの広さにわたってこの作業が行われていることが判明する。墳丘下の旧地表面はもちろんのこと、弥生時代の住居地の壁の高さが本来の高さより著しく低くなり浅い住居址では壁の高さは10cm程度になるまでに削平されている。この平垣地の標高は25.25mをはかる。

墳丘外形の削り出し作業はしっかりした設計のもとに行われたことが推測できる。地山整形時における後円部と前方部の間に掘削された弧状の溝（溝巾2.3m、深さ0.5m、断面形は逆台

1 位置と現状

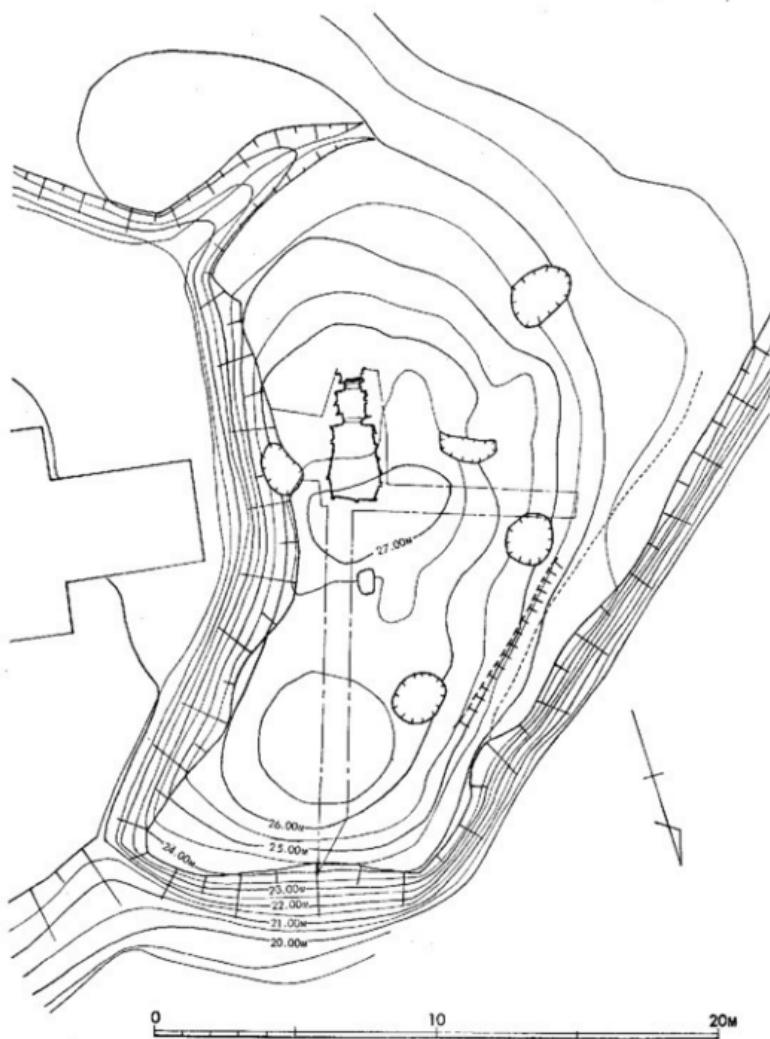


Fig. 5 神松寺御陵古墳填丘測量図

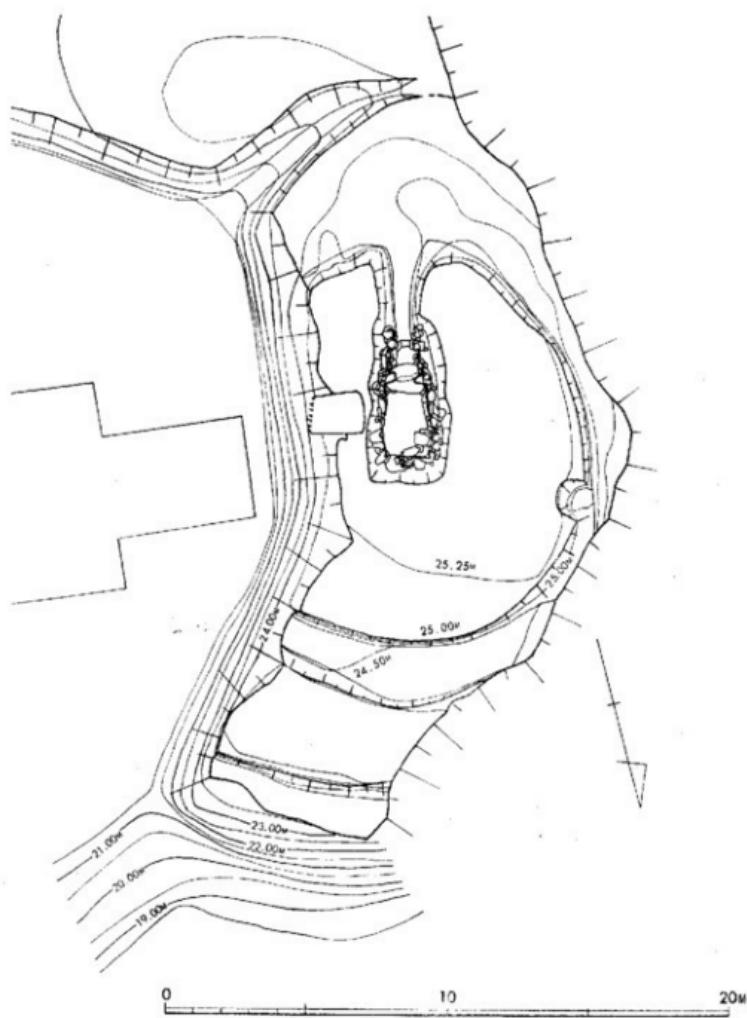


Fig. 6 神松寺御陵古墳地山地形図

形をなす)はそれを証明するものであろう。墳丘外形の削り出し作業を復原的に記述すれば次のようにになる。先ず、後円部に相当する部分に径15.6mの円形にめぐる溝(巾2.3m、深さ0.5mの逆台形)を掘削し、その溝と一部を共有し方形にめぐる溝を掘削し、あらかたの前方後円の外形を設定した後、古墳基底面に相当する外側を溝底の高さに自然地形の傾斜変換線まで削平し古墳基底面の周囲に平垣面を形成する。平垣面の標高は24.75mである。この平垣面の存在は、墳丘の区画をはっきりさせると共に、古墳の見せかけの規模を増大する効果をもつていたと考える。このようにして削り出された古墳基底面は全長20m、後円部径14.4m、前方部長4.9m、くびれ巾10m、高さ0.5mの前方後円形の台状をなす。

**墳丘 (Fig. 7)** 墳丘は台状に削り出された地山整形の整形面を基底面として盛土を行っている。墳丘の形成過程は大きく3段階に分けることができる。第1段階は石室構築の壁石の裏ごめ的なもの、第2段階は天井部の被覆と後円部の墳形を整えるもの、第3段階は地山整形段階で生じた溝の埋めもどしと前方部の付設である。

第1段階ではまず墓壇内の腰石の安置後、壁体の中位程度までの壁石の積みあげに平行して花崗岩のバイラン土をたたきしめながら墓壇を埋める。この作業はまだ盛土とはいはず、石室の基礎構築ともいべき段階で墳丘も地山整形面とはほとんどかわらない状態である。それより上位の壁体は腰石の積みあげに平行して赤褐色土、黄褐色土、暗褐色土を交互にたたきしめて石室の上端まで行うが、この段階の盛土は石室の構築のためのものであり丁寧である。墓壇端より3m内外の範囲に認められ墳丘基底全域には広がらない。この段階の盛土の状態はAトレーナーにおいてよく観察された。

第2段階の盛土は第1段階の盛土に比べて硬くしめられてなく雑である。天井石を架構した後に第2段階の盛土を厚く覆い、さらに後円部墳丘を整形したものであるが、この段階の盛土は主に後円部の後半部に集中している。第3段階は前方部の盛土である。第2段階の盛土同様に第1段階の盛土ほど硬くしめていないが、花崗岩バイラン土、黒色土層を交互に叩きしめた状態が観察され、この段階で墳丘の全面にわたって墳形を整えている。本墳の盛土の状態は周辺に存在する群集墳の盛土と比較して丁寧であることが指摘できる。

墳形は断面観察および遺存窓から前方後円形になるが、前述したように後円部の約 $\frac{2}{3}$ と前方部の約半分を失っている。西側のくびれ部が残存しているので全形の復原は可能である。本墳の各部の計測値は次のようになる。全長20m、後円部径15m、くびれ部幅(10)m、前方部長7m、前方部幅(15)mである。後円部高は2.25m、前方部高も2.25mであるが墳丘根の標高に約50cmの差があり後円部は前方部より約50cm高い。後円部に比して前長部の短い墳形を有する。後章において墳形について考察を加える。

### 3. 横穴式石室 (Fig. 10)

本墳の埋葬施設は主軸をN-14°-Eにとり、南側に向って開口する複室の両袖型横穴式である。石室はすでに玄室の天井部、左側壁の壁体の上半部を失い、右壁は腰石部を残すのみ

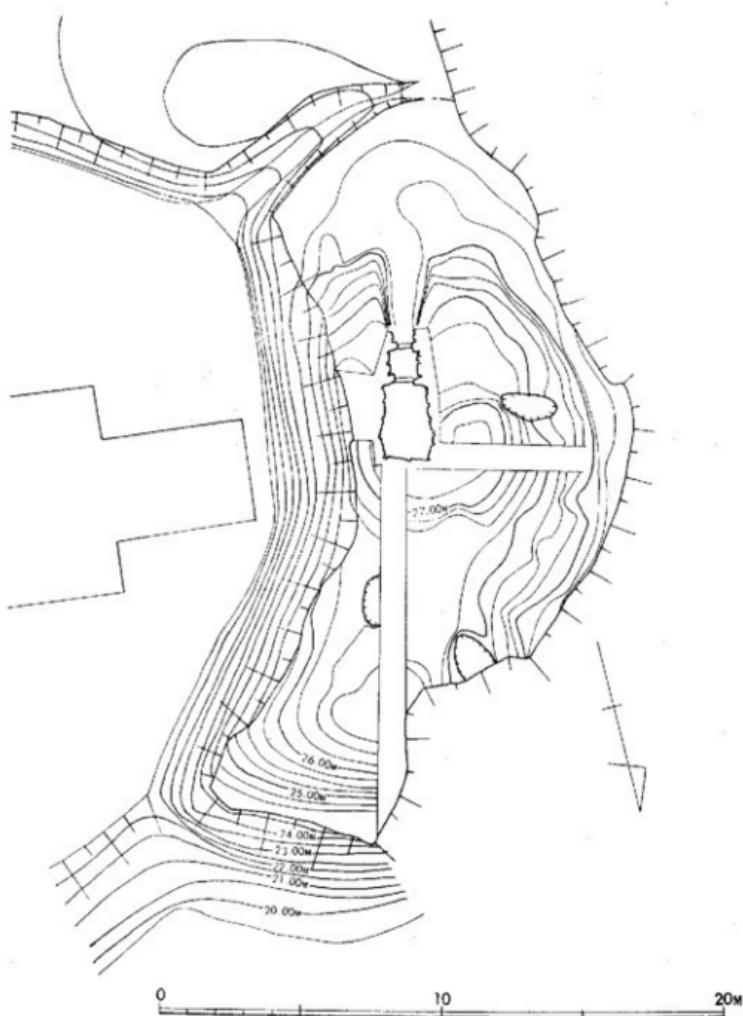


Fig. 7 神松寺御陵古墳横丘溝存図

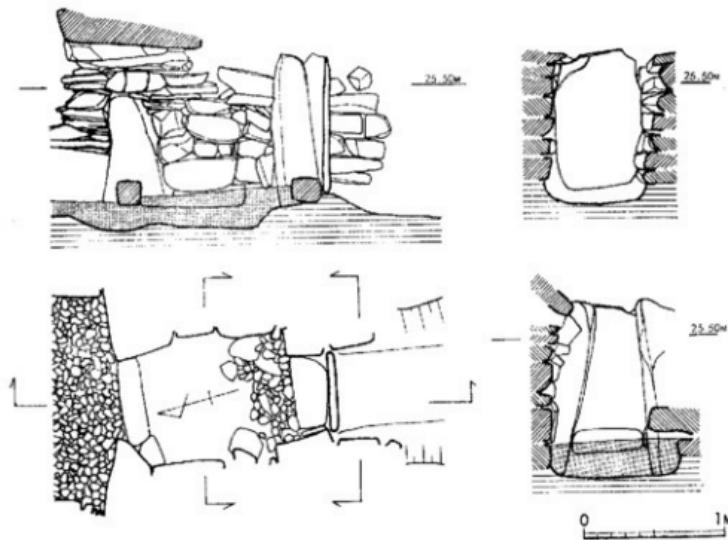


Fig. 8 神松寺御陵古墳閉塞部大詫圖

であった。石室内は天井部、壁体の崩落や流土によって埋没し、数度におよぶ盗掘攢乱を受けている。しかし、玄室の大部分は崩落した天井石によって盗掘攢乱をまぬがれ床面は当初の状況を比較的良好に残していた。玄室前半部、前室は盜掘により床面に敷れた玉砂利の下まで盗掘攢乱されていた。

石室はやや胴張りの長方形プランを有する玄室に小形の方形プランの前室を付設し、短い羨道を接続したものである。前室玄門部に板石をたて閉塞とする。石室全長は右壁で4.4m、左壁で4.7mを計る。石室を構築する石材は花崗岩が最も多く、砂岩、粘板岩が使用される。砂岩、粘板岩には赤色顔料の塗布が認められ、その塗布の時期は古墳石室構築以前であることは、塗布面が腰石の裏面であるとか、壁体の横積み面にあることから容易に推測できる。この石材が箱式石棺材の再利用であることはいうまでもない。本石室には数基分の石棺材が使用されており注目される。

**閉塞施設** (Fig. 8) 閉塞施設は前室玄門の桶石の外側に板石1枚をはめ込んだいわゆる石扉であるが、閉塞石をたてたのみで特別の配慮はみられない。天井石、玄門との間は完全に密封される。閉塞石には長さ100cm、幅62cm、厚さ5~10cmの長方形をなす粘板岩の板石を利用しているが、この石材も箱式石棺の棺材の再利用である。

**石室掘り方** 石室掘り方は後円部地山整形の中心を起点として南に向って掘り込まれる。南北長6m、東西幅3mの長方形をなし、墓道との境界で一段くびれて軸をせばめる。壁面は垂直に近い角度で掘り込まれ、深さは75cmを計る。石室腰石はほぼ掘り方にいっぱいに配置され

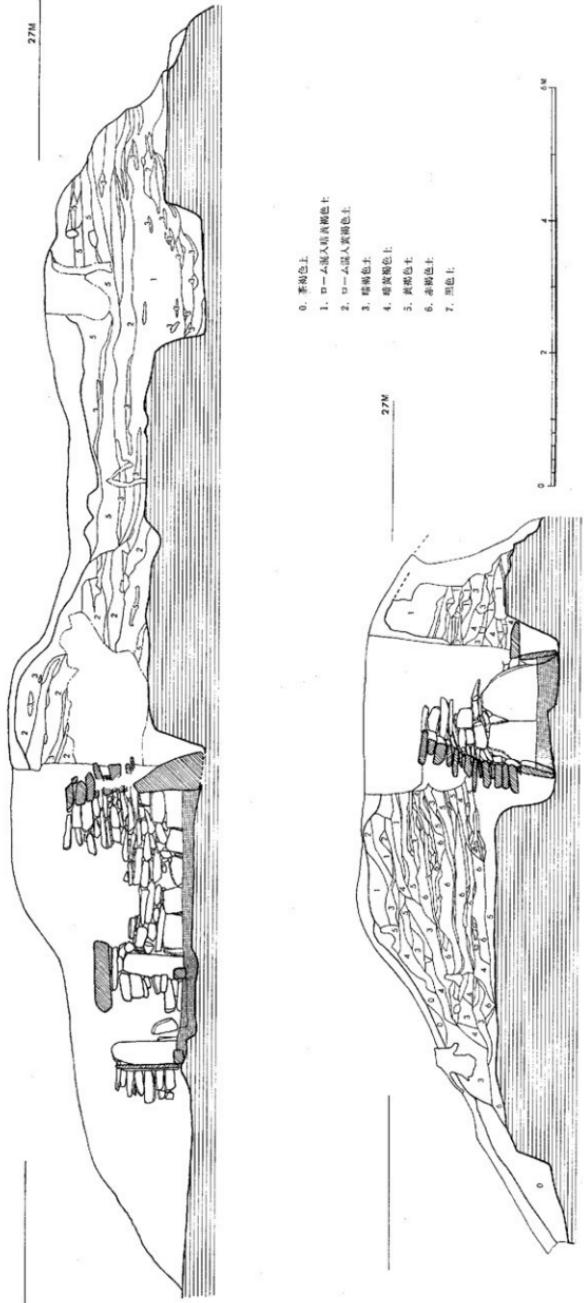


Fig. 9 恐龙寺故土海螺丘化石图

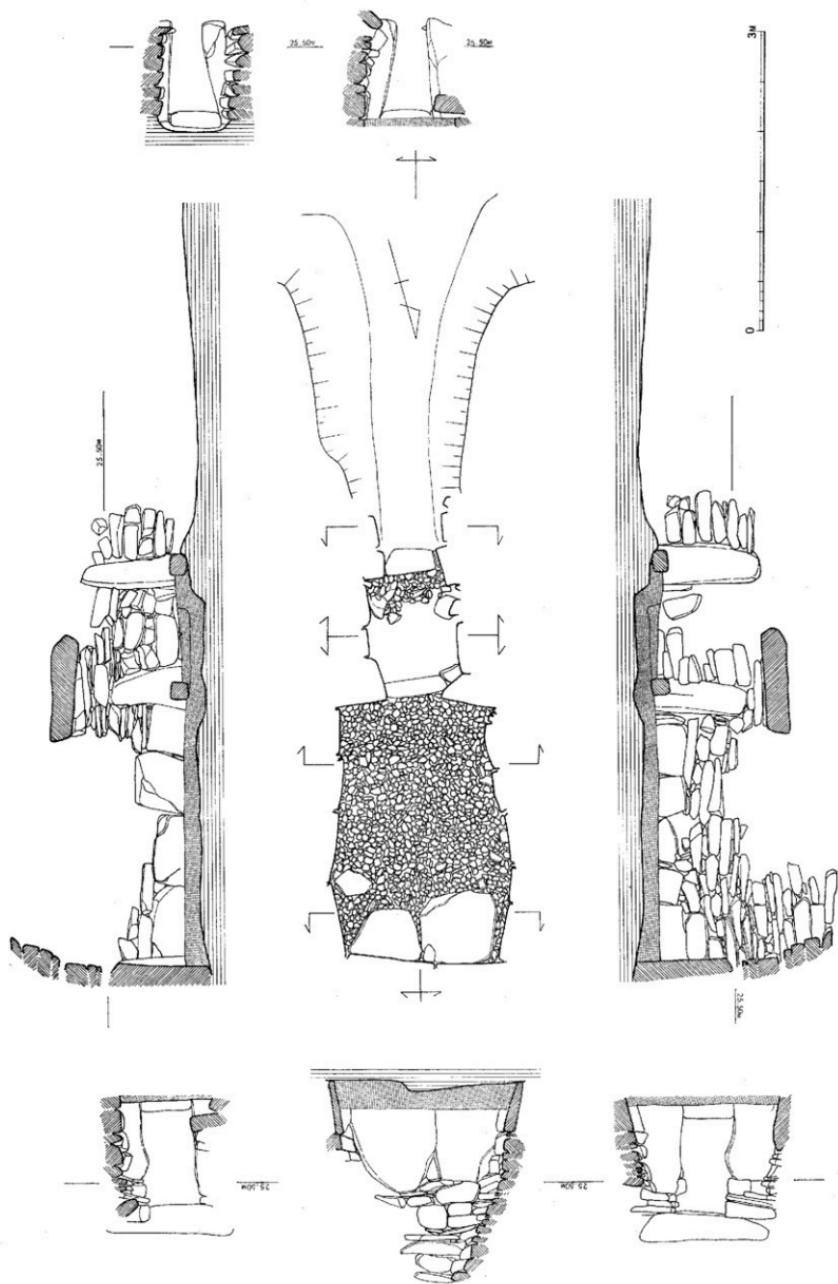


FIG. 10 神长寺和壁石室剖面图

る。

**玄室** 奥壁幅152cm、前壁幅150cm、最大幅178cm、右側壁長250cm、左側壁長256cmを計り、胴張りの長方形プランをなす。壁体の構築法は各壁体とも共通した技法を用いる。奥壁は85cm×110cmと80cm×90cmの大ぶりの石材（西側の石材は板石）2個を縦位に配して腰石とし、その上に水平方向に目路が通るように花崗岩、粘板岩の板石、割石を横積みに持ち送りながら9段積み上げ壁体とする。東側の約半部の壁体は崩落して遺存しない。右側壁は60cm×70cm×10cm程度の板石4枚を縦位に配し腰石としている。腰石より上は奥壁近くに2段に横積みされた以外は全部抜き取られる。右側壁の破壊は老松神社の建立時にもとめられよう。右側壁は幅35~60cm、高さ40~60cmの板石6個を配し腰石とする。腰石より上部は花崗岩の割石や粘板岩、砂岩を水平方向に目路が通るように横積みに10数段積まれる。壁体は腰石の傾斜にそって持ち送られる。奥壁と側壁の隅角部では腰石より上部は三角持ち送りの技法（力石）の使用がみられる。玄門部は素型の両袖で特別の施設はない。袖幅は右袖45cm、左袖47cmを計り左右ほぼ同じ幅である。玄門幅は55cmで20cm×60cmの断面形方形の棒状の石材を配し樋石とする。袖石には未加工の自然石をたてるが、左右で高さが異なるのでさらに数段石積みをなし袖石の高さをそろえて天井石を架構する。樋石から天井部までの高さは95cmを計る。天井部はすでにないが通常の例として奥壁の現存部の最上部がさらに数段積み上げた上に天井石を架構したものと考えられる。床面からの高さは180~200cm程度となろう。天井部は100cm×150cm×30cm程度の大石三枚を構築したもので石室内に崩落していた。床面は奥壁にそって2枚の板石（70cm×50cmと70cm×75cm）を並列して石枕状に配し、他は全面に玉砂利を敷き詰めている。床面の標高は22.3mである。

**前室** 奥幅87cm、前幅90cm、右側壁長76cm、左側壁長89cmを計る。ややひざんでいるが方形プランをなす。左側壁は壁体の崩落が著しく壁体の一部を残すのみである。やや大ぶりの花崗岩の割石を横位に配し腰石とする。その上は玄室同様に花崗岩割石や砂岩、粘板岩を横積みに5~6段積みあげているが、玄室の壁体とちがい持ち送りはみられない。前室玄門部は素型の両袖で特別の施設はない。袖幅は右袖20cm、左袖10cmを計る。玄門幅は50cmで2石を配し樋石とする。天井石は2枚の大石を使用する。床面は約4%が攪乱されていて当初の姿を残しているのは前半部のみである。玄室同様に玉砂利を敷

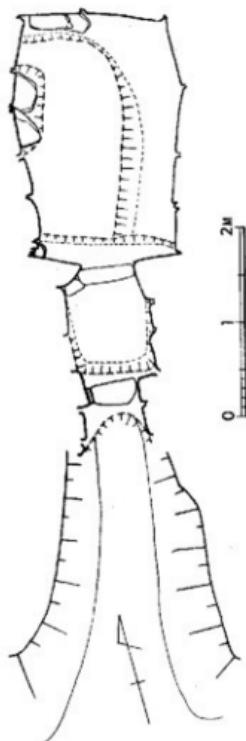


Fig.11 神松寺御陵古墳石室基底実測図

き詰めている。

**墓道** 形ばかりの短い墓道をとりつけている。右壁長330cm、左壁長500cm、墓道幅64cmを計る。壁体は花崗岩割石を横積みにしたもので7段積みあげてある。腰石はなく、貼石的である。床面は前室玄門部柄石より一段さがり墓道へと続く。

**墓道** 墓道部より墳丘底までの長さ330cmが認められる。幅52~150cmで外側に向ってやや広くなる。断面形はU字形をなす。墓道内は墳丘の流土によって埋められていた。墳丘外にははっきりした墓道の続きを認められなかったが、地形からみれば墓道は墳丘を出て東へまがっていた可能性がある。

#### 4. 遺 物

**遺物出土状況 (Fig. 12)** 石室内は壁体の崩落あるいは数度におよぶ盜掘によってかなりの搅乱がみられたが、玄室内は前半部は除いて比較的良好な状態と示していた。前室は石室の壁体の崩落で遺物は散乱し現位置を保つものは少い。玄室の遺物の配置は玄室主軸の左右の群に大別される。東側の一群は奥壁に近く勾玉1、碧玉製丸玉1、ガラス製丸玉45、ガラス製小玉29、石製小玉1の計77個（完形で取り上げたもの）の玉類が散布し、一部はつないだ状態であった。玉の散布の東によって耳環1、西によって鹿角装刀子等4点と金銅製飾金具1によって構成される。西側の一群はやはり奥壁近くに玉の1群が散布し（完形で取り上げたものはガラス製丸玉21、十製錬玉21、ガラス製小玉18の計60個）被葬者の右腰部近くの西壁にそって直刀二振と、鉄鎌が二本の組みになって並べられている。足部に刀子1点と玄室左袖隅角に須恵器蓋1が配置される。玄室の遺物出土状況から推察して本墳に埋葬されたのは二人であったと推測される。前室は前述したように石室壁体の崩落によって須恵器等の遺物は破片となり原位置を動いているが、一部、西壁にそって出土した馬具類は原位置のままと考えられる。石室外では墓道と、墳裾とのコーナーに墓前祭に使用されたと考えられる須恵器の一群がある。この土器は墓道が一部埋った後におかれたもので、墓道の底より約30cmういた状態で供獻されていた。この古墳の最終時間Axisを示すものである。また墳丘よりも若干の須恵器が出土

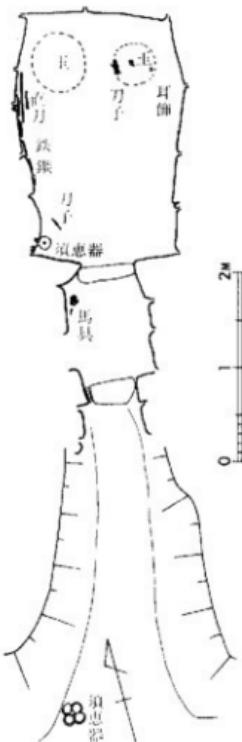


Fig.12 神松寺御陵古墳遺物出土状況図

したが、特別の状態で出土したものはない。

出土遺物は以下のとおりである。

石室（玄室）

装身具	耳環
	玉類
	不明金銅製金具

武具	直刀
----	----

	鉄劍
--	----

工具	刀子
----	----

	不明品
--	-----

容器	須恵器
----	-----

(前室)

馬具	兵庫鏡
----	-----

	不明品
--	-----

容器	須恵器
----	-----

石室外（墓道 墳丘）

容器	須恵器
----	-----

祭祀具	有孔円盤
-----	------

遺物

装身具 (Fig. 13)

金環(1) 径2.2cmの鉄芯金張りの金環で、切れ目間0.2cm、断面は径0.3cmの円形をなす。金

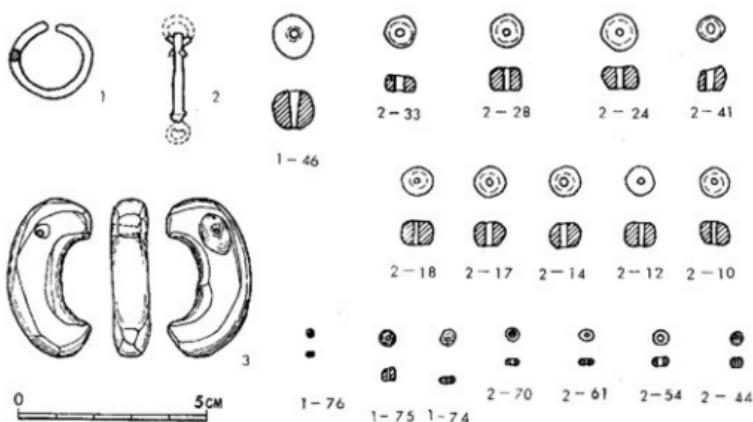


Fig. 13 神松寺跡古墳遺物実測図 I

箔はほとんど残存していない。

**不明金銅製品(2)** 現存長2.4cmを計る小形品である。幅0.3cm、厚さ0.5mmの金銅板を二つ折りにして両端に環をつくりだし、その環に小さな環を連結したものである。刀装具あるいは装身具と考えられる。

**勾玉(2)** 東群の玉類中に存在したものである。メノウ製で、の字形をなす。長さ4.2cm孔は両側より穿たれるが片面を大きく椭円形にくぼめた状態である。

**丸玉、小玉** 素材は碧玉、ガラス、土製練玉がみられる。多いのはガラスと土製練玉でガラス玉の色はコバルトブルー、スカイブルー、黄色、黄緑色を呈する。計測値は第3表に示した。

#### 武器 (Fig. 14・15)

**直刀** (Fig. 14) 1、4の二板は玄室西側壁にそって二本並べられた状態で出土した。2、3は玄室攪乱部よりの出土である。2と4は同一個体と考えられる、3は刀身の幅が1、4とは異なり別個体と考えられ、直刀は少くとも三振はあったものと思われる。

1は刀身の一部を欠損するが、全長67cm程度の直刀と考えられる。平造りの角棟を有し、関は片関である。刀身の切先部に木質の付着が認められる。刀身は推定長50.5cm、幅3cm、棟の厚さ0.7cmをはかり、切先部はフクラつく。茎は長さ16.5cm、幅2.2cm、厚さ0.7cmの断面長方形を呈する。目釘孔は不明。

2と4は同一個体と考えられる。平造りで角棟を有し、関は片関である。茎は長さ12.4cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmの断面長方形をなす。目釘孔は不明。刀身の幅3cm、棟の厚さ0.7cmを計るが全長については明らかにしたい。

3は他のものとは別個体で、刀身部破片である。平造りで、現存長6.7cm、幅3.4cm、棟の厚さ0.7cmを計る。

**鉄鎌** (Fig. 15) 総数39点の出土がある。主に玄室西側壁に接して2～3本を一組として並んでいた。一部は攪乱よりの出土である。ほぼ全形がわかるものは1～12の12点である。実際の点数としては20本前後とみることができよう。大別して広根形と細根形の二種類に区別できる。

1は一部茎を欠損するが、現存長9.5cmの広根形の鉄鎌で

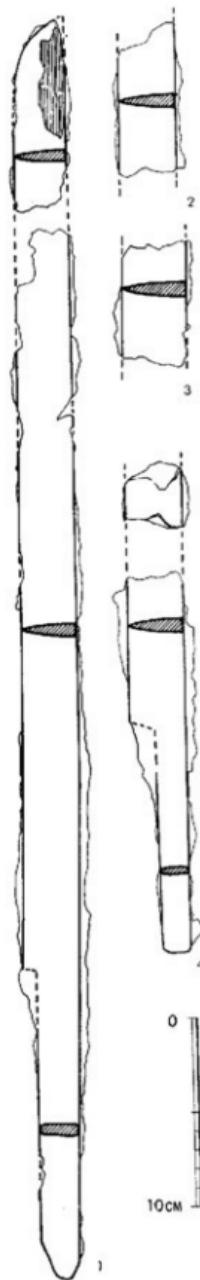


Fig.14 神松寺街陵古墳遺物実測  
図II

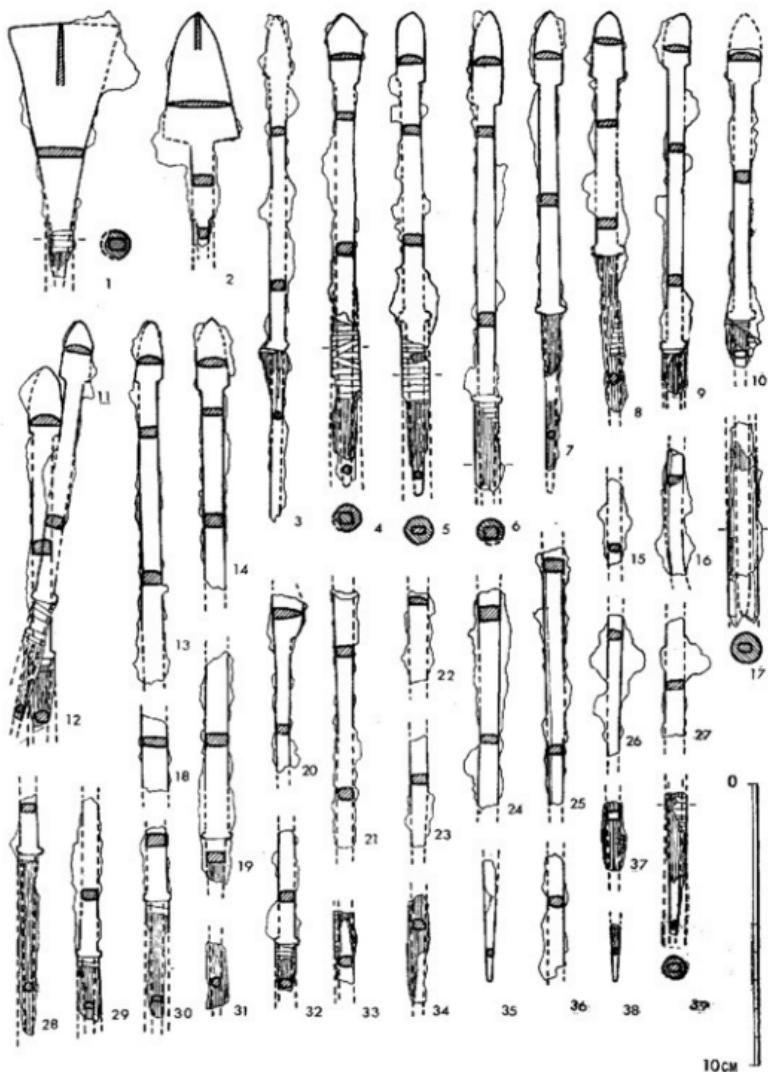


Fig.15 神松寺御陵古墳遺物実測図

ある。鋒は斧形をなす。最大幅4cm、厚さ0.3cm、茎部には木質が残存し、その上には桜の樹皮がまかれている。茎部の断面は長方形をなす。

2は茎の一部を欠損する広根形の鉄鎌である。鋒は三角形をなし、最大幅2.8cm、厚さ0.2cm、長さ4.7cmの両刃造りで、茎は断面長方形をなす。現存長は8.4cmを計る。

3は細根形の鉄鎌で茎の一端を欠損する。現存長18.1cmを計る。鋒は三角形をなす。棒状部と茎の境には棘がある。棒状部は断面長方形、茎は断面円形をなす。茎には木質の残存がみられる。

4は細根形の鉄鎌で完形である。全長16.8cm、鋒は五角形をなす。断面は両丸形をなす。棒状部は断面長方形で、茎部は断面円形をなす。茎には矢柄との着装状態（木質の上に幅0.2cmの桜の樹皮をまく）が良好に残存している。矢柄の断面は径1cmの円形をなす。

5～7、10～13は細根形の鉄鎌で鋒部は柳葉形をなし断面は半月形である。鋒部は最大長3.3cm～最小長2.2cmとばらつきがある。棒状部と茎との境には棘がある。棒状部は断面長方形で、茎は断面円形である。5は完形で全長17.2cmを計るが、それぞれ棒状部の長さに違いがあり、全長においてもそれぞれの違いがみとめられる。5、6は茎と矢柄の着装状態が良好な状態で残存する。矢柄の径は1cmと0.9cmを計る。

8、9、14はやはり細根形の鉄鎌で、鋒部は柳葉形をなすが断面が両丸形をなすものである。棒状部は断面長方形、茎部は断面円形をなす。棒状部と茎との境には棘がある。茎には木質の残存がある。

20は細根形の鉄鎌で、鋒は片刃式であるが先端を欠く。棒状部の断面は長方形である。

15～19・21～39は細根形鉄鎌の棒状部と茎部の破片である。17、28～30、32には棒状部と茎の境の棘がみられる。

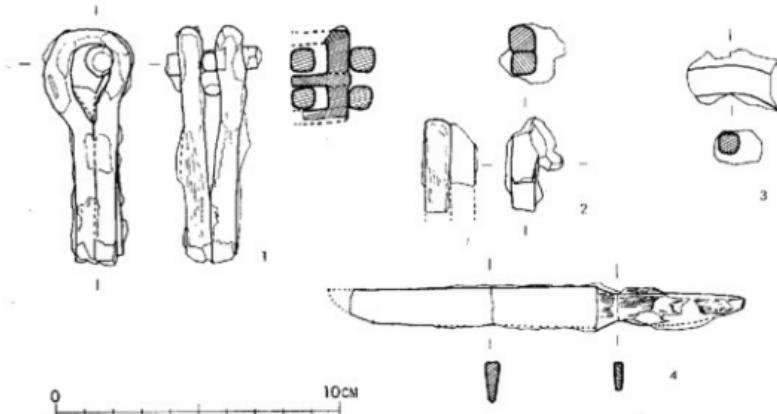


Fig.16 神松寺古墳遺物実測図IV

## 馬具 (Fig. 16)

(1)は、鉢輪としての3連からなる鉄製兵庫鎖の一部であり、取付金具である鞍具が付されている。鎖は、直径0.8cm弱の棒を曲げて作ったもので、断面は円に近い隅丸方形を呈する。残存長8.2cm、鞍具の形状は不明、推定巾3.0cm。

(2)は、兵庫鎖の一部分である。断面は隅丸方形を呈する。

(3)は、轡の鏡板の部分である。断面は隅丸方形を呈する。断面巾0.7cm。

## 工具 (Fig. 16・17)

刀子 玄室の奥壁近くのやや東側により、4点がひとまとまりとなって出土した。4点のうち2点は鹿角装の刀子である。また第二次調査で玄室左壁玄門部近くに1点が出土した。

Fig. 16の4は平造りで刀身の切先部を一部欠損する。現存長14cm、最大幅1.4cm、棟の厚さ0.5cmを計る。茎には木質の付着がみられる。

Fig. 17・1は鹿角装の刀子である。平造りで、刀身は切先部を一部欠損するが、切出しお釘状を呈している。現存長5.6cm、最大幅2cm、棟の厚さ0.4を計る。柄部には鹿角が着装されるが保存状態はよくない。柄の先端はややそり返り、断面は長軸2.4cm、短軸1.8cmの横円形を呈する。茎は長さ6.8cm、最大幅1cm、最大厚0.5cmの断面長方形を呈し先端にいくにしたがい小さくなる。現存長は14.4cmを計る。

2は刀身部のみの破片である。平造りで切先は鋭い。現存長5.6cm、幅1.4cm、棟の厚さ0.3cmを計る。

3は鹿角装の刀子で、切先部の一部を欠損する。刀身は平造りで、現存長5.1cm、幅1.1cm、棟の厚さ0.3cmを計る。茎は幅0.5cm、厚さ0.3cmの断面長方形を呈するが長さは不明。柄部は鹿角が着装され、長軸1.4cm、短軸1.1cmの断面横円形を呈する。現存全長8.4cm。

4は木製柄を有する刀子で、刀身は切先部を欠損し、柄部も関付近を残すのみである。刀身は柄部に対して内ぞりになる。現存長3.6cm、幅1.3cm、棟の厚さ0.4を計る。茎は幅1.3cm、厚さ0.4cmの断面台を形なす。茎には木質が残存し着装の状態がわかる。

## 不明鉄器 (Fig. 17-5)

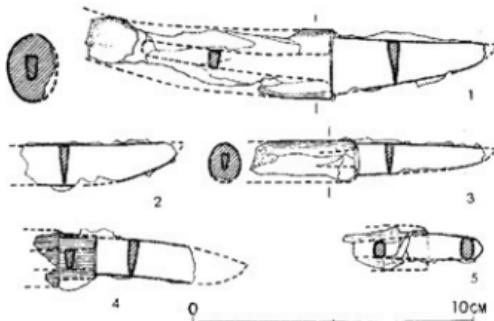


Fig. 17 神松寺御陵古墳遺物実測図V

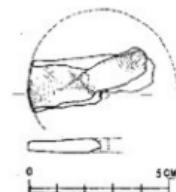


Fig. 18 神松寺御陵古墳遺物実測図VI

鹿角の柄部を有す鉄器で、現存長5.1cmを計る。身は幅0.9cm、厚さ0.5cmの断面楕円形を呈する棒状のもので、長さ2cmを計る。基は幅0.6cm、厚さ0.5cmの断面楕円形を呈する。鹿角装の柄は保存状態が悪く、その形状を知ることはできない。

#### 祭祀具 (Fig. 18)

前室體体の上の攪乱部より出土した有孔円盤である。本来は前室にあったものと思われる。孔の一部と外周の一部を残す滑石製の小破片である。復原径5.3cm、復原孔径0.3cm、厚さ0.3～0.5cmで中央部がやや厚い、表面には製作時の研磨痕が残る。

#### 須恵器 (Fig. 19, 20)

杯蓋 (Fig. 19—1～12) 12個体出土した。石室（玄室、前室）および墳丘墓道よりの出土である。成形技法、形状により2類に大別する。I類は天井部と体部に沈線をめぐらすか、わずかな段を有し、口縁端部に段ないし沈線を施す。つまみを有するものもある。細部の違いで3種に細分する。II類は平らな天井部から丸みをもちながら口縁端に至るもので、体部と天井部の境は不明瞭。

I類a (Fig. 19—1) 天井部に扁平な宝珠形のつまみを有する。天井部と体部の境に沈線をめぐらす。天井部へラ削りの範囲は $\frac{1}{2}$ 程度で、その上にカキ目を施す。口縁端部には段を有する。内面はナデによって調整されるが粘土組の痕跡を残している。口径14.5cm、器高6.2cm、つまみは径4.1cm、高1.4mmを計る。高环の蓋である可能性が強い。

I類b, (Fig. 19—2) 天井部と体部の境に鋭い沈線をめぐらす。口縁端部に細い沈線をめぐらす。小破片で全形は不明。

I類c (Fig. 19—3) やや扁平な天井部から丸みをもって体部へ移行する。天井部と体部の境にわずかな段を有する。天井部へラ削りの範囲は $\frac{1}{2}$ 程度である。口縁端部に段を有する。天井部内面はナデによる調整である。口径14.1cm、器高4.7cmを計る。

II類a, (Fig. 19—5) やや扁平な天井部から体部へ移行し、口縁部は垂直に屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。天井部へラ削りの範囲は $\frac{1}{2}$ 程度である。内面はナデによる調査がみられる。天井部に $\times$ のヘラ記号がある。口径13.7cm、器高3.8cmを計る。

II類d (Fig. 19—4, 6～12) 扁平な天井部からやや丸みをもって広がり天井部と体部の境は不明瞭である。口縁部は垂直に屈曲し端部は内傾する。端部は丸くおさめる。天井部へラ削りの範囲は $\frac{1}{2}$ 程度である。内面はナデによる調整が施される。口径13.7～16.2cm、器高3.8～5.0cmを計る。整形技法、焼成が類似し同一窯産の可能性が強い。

杯 (Fig. 19—13～23) 11個体出土した。前室、墳丘、墓道からの出土である。成形技法、形状よりIV類に分ける。

I類 (Fig. 19—18) 復原口径14.3cm、受部径16.5cm、立ち上り高1.4cm、器高は不明であるが深くない。立ち上がり端部、受部端部は丸くおさめる。底部へラ削りの範囲は $\frac{1}{2}$ 程度で底部には灰かぶりがみられる。内面はナデによる調整が施される。

II類 (Fig. 19—13, 14, 17～23) 口径10.2～12.8cm、受部径13.6～15.6cm、立ち上り高0.9～1.3cm、器高14.8～5.3cmで深さを有している。口縁端、受部端は丸くおさめる。底部には狭

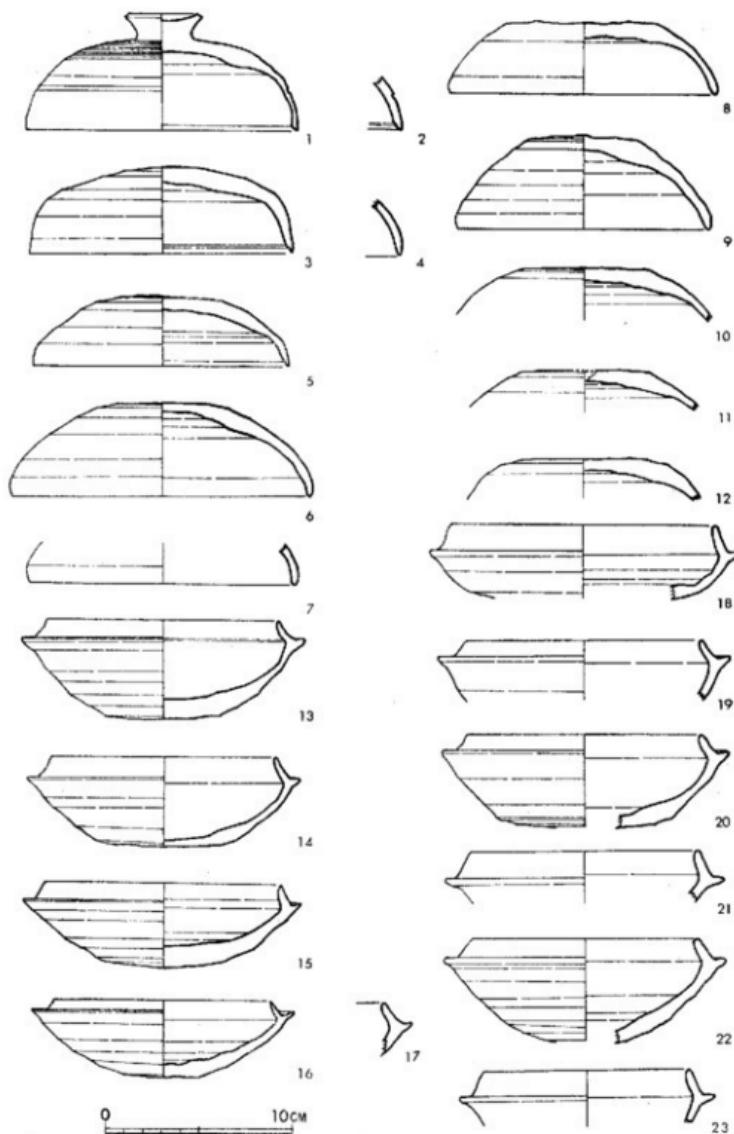


Fig. 19 神松寺御陵古墳遺物実測図

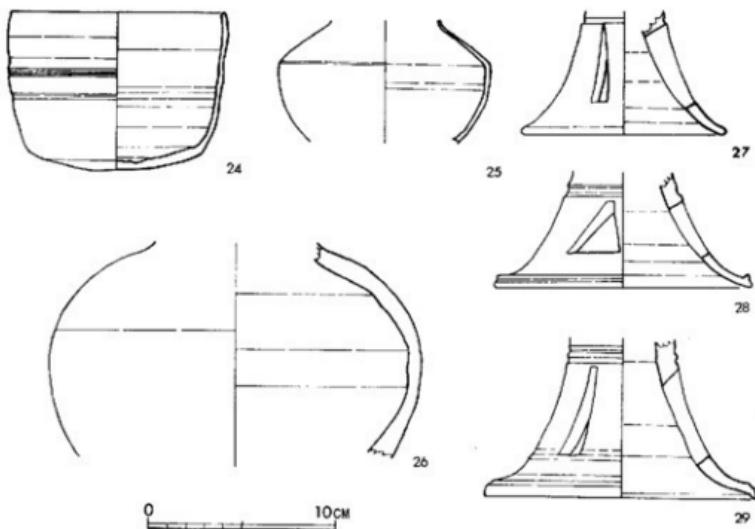


Fig. 20 神松寺御陵古墳遺物実測図IV

い平坦面を有する。底部ヘラ削りの範囲は殆程度である。内面にはナデ調整が施される。成形技法から同一窯産の可能性が高い。蓋Ⅱ類bとセット関係にある。

**皿類 (Fig. 19-15)** 口径12.7cm, 受部径14.8cm, 立ち上がり高1.1cm, 器高4.5cmを計る。受部に沈線をめぐらす。口縁端, 受部端は丸くおさめる。底部ヘラ削りの範囲は殆程度である。内面にはナデ調整がある。蓋Ⅰ類cとセットになろう。

**皿類 (Fig. 19-16)** 口径11.6cm, 受部径14.0cm, 器高4.1cm, 立ち上がり高0.7cmを計る。蓋受けの立ち上がりは低く内傾する。底部は丸くなりヘラ削りの範囲は殆程度である。内面はナデ調整、底面に灰かぶりがみられる。

**碗 (Fig. 20-24)** 口径11.4cm, 器高8.4cmを計る。体部中位に2本, それよりやや下って1本の沈線をめぐる。器形は焼けひずみでいびつである。底面は丸底に近い平底で荒いヘラおこしのままである。

**短頸壺 (Fig. 20-25)** 胴部の破片である。肩部復原径11.4cm, 肩部は強く屈曲し稜線がある。器壁はナデ調整が施される。

**壺 (Fig. 20-26)** 胴部破片である。胴の最大径20cmを計る。胴部上半はカキ目調整が、下半部はヘラ削り後、カキ目調整が施される。内面は横ナデの調整、保存状態が悪く器壁が凹凸状に剥落する部分がある。

**脚 (Fig. 20-27~29)** 27, 29は高坏の脚部破片、28は脚付壺等の脚と考える。27, 29は脚筒部中央に2条の沈線をめぐらし、上、下二段に長方形の透しを入れたものである。27には灰

## 第2章 神松寺御陵古墳出土玉類計測表(単位mm)

第2表 神松寺御陵古墳出土玉類計測表(単位mm)  
I(東) グループ

No.	径	長	孔径	色 彩	材 質	No.	径	長	孔径	色 彩	材 質
1	10.0	7.4	1.4	コバルトブルー	ガラス	40	7.4	6.2	2.6	■	ガラス
2	9.2	6.2	1.9	■	ガラス	41	6.4	5.4	1.2	■	ガラス
3	11.1	8.0	1.4	■	ガラス	42	8.6	6.0	1.4	■	ガラス
4	9.4	6.2	1.2	■	ガラス	43	8.0	6.1	1.2	■	ガラス
5	9.6	7.2	1.3	■	ガラス	44	7.8	5.0	2.1	■	ガラス
6	8.4	6.8	1.4	■	ガラス	45	10.5	6.1	1.2	■	ガラス
7	7.1	5.4	1.8	■	ガラス	46	11.0	10.2	2.2	グリーン スカイブルー	碧玉 ガラス
8	8.4	6.4	1.7	■	ガラス	47	3.6	1.8	1.4	■	ガラス
9	8.4	6.2	1.6	■	ガラス	48	3.5	2.8	1.2	■	ガラス
10	8.2	5.6	1.4	■	ガラス	49	4.2	3.2	1.2	■	ガラス
11	8.2	8.3	1.2	■	ガラス	50	4.8	3.1	1.2	■	ガラス
12	8.8	8.2	1.2	■	ガラス	51	2.8	2.8	1.4	■	ガラス
13	6.6	7.9	1.4	■	ガラス	52	3.6	3.1	1.1	■	ガラス
14	7.4	5.9	1.4	■	ガラス	53	4.4	2.0	1.2	■	ガラス
15	7.2	6.4	1.8	■	ガラス	54	4.8	2.8	1.2	■	ガラス
16	10.8	6.7	1.9	■	ガラス	55	4.3	3.1	1.0	■	ガラス
17	9.8	7.6	3.6	■	ガラス	56	3.6	2.4	1.1	■	ガラス
18	9.6	6.8	1.2	■	ガラス	57	3.6	2.8	1.3	■	ガラス
19	8.2	8.5	1.6	■	ガラス	58	4.1	3.1	1.2	■	ガラス
20	9.2	6.2	1.4	■	ガラス	59	4.1	2.2	1.1	■	ガラス
21	8.6	6.4	1.4	■	ガラス	60	4.3	2.2	1.0	■	ガラス
22	8.1	6.7	1.2	■	ガラス	61	3.9	2.3	0.9	■	ガラス
23	7.2	6.6	1.6	■	ガラス	62	4.0	2.2	1.4	■	ガラス
24	8.6	5.2	1.4	■	ガラス	63	4.2	2.4	1.1	■	ガラス
25	8.4	5.8	1.6	■	ガラス	64	3.5	2.2	1.1	■	ガラス
26	7.1	6.9	1.2	■	ガラス	65	4.1	2.2	1.4	■	ガラス
27	8.8	6.2	1.8	■	ガラス	66	4.1	2.4	1.2	■	ガラス
28	8.1	5.8	1.8	■	ガラス	67	3.6	1.7	1.2	■	ガラス
29	7.2	5.8	1.4	■	ガラス	68	3.4	2.2	0.6	■	ガラス
30	7.2	5.1	1.4	■	ガラス	69	3.8	2.0	1.1	■	ガラス
31	8.1	6.2	1.2	■	ガラス	70	3.2	2.6	0.6	■	ガラス
32	8.0	5.3	1.8	■	ガラス	71	3.8	2.4	1.2	■	ガラス
33	7.2	4.6	2.6	■	ガラス	72	3.6	1.6	1.1	■	ガラス
34	7.1	7.3	1.4	■	ガラス	73	2.9	1.7	0.6	■	ガラス
35	7.8	5.0	1.6	■	ガラス	74	4.0	2.2	1.0	タリーン 青色	石
36	7.8	5.0	1.8	■	ガラス	75	3.8	3.6	1.0	タリーン 青色	石
37	7.8	6.1	1.2	■	ガラス	76	2.4	1.6	0.9	タリーン 青色	石
38	6.8	5.4	1.6	■	ガラス						
39	7.8	6.2	1.8	■	ガラス						

II(西) グループ

No.	径	長	孔径	色 彩	材 質	No.	径	長	孔径	色 彩	材 質
1	8.6	7.0	1.6	紫褐色	土玉	36	8.2	5.6	1.2	■	ガラス
2	8.6	7.6	1.7	■	ガラス	37	7.4	5.4	1.9	■	ガラス
3	9.0	7.6	1.6	■	ガラス	38	7.9	4.6	1.9	■	ガラス
4	9.3	7.0	1.4	■	ガラス	39	7.2	5.4	1.9	■	ガラス
5	9.0	6.8	1.0	■	ガラス	40	7.6	5.6	2.9	■	ガラス
6	8.6	7.6	1.2	■	ガラス	41	7.4	6.0	2.2	■	ガラス
7	8.6	6.7	1.8	■	ガラス	42	7.1	5.4	1.4	■	ガラス
8	8.6	7.4	1.6	■	ガラス	43	4.3	3.1	1.2	■	ガラス
9	8.6	6.7	1.5	■	ガラス	44	3.6	3.1	0.9	■	ガラス
10	8.0	6.5	1.6	■	ガラス	45	4.3	2.9	1.0	■	ガラス
11	8.4	6.0	1.7	■	ガラス	46	3.6	2.0	1.0	■	ガラス
12	8.0	6.4	1.3	■	ガラス	47	4.8	2.4	1.2	■	ガラス
13	7.6	7.0	1.7	■	ガラス	48	4.2	2.2	1.3	■	ガラス
14	8.6	7.6	1.9	■	ガラス	49	3.8	2.2	1.4	■	ガラス
15	8.1	7.0	1.3	■	ガラス	50	3.9	2.1	1.1	■	ガラス
16	8.7	7.1	1.9	■	ガラス	51	4.0	2.9	1.3	■	ガラス
17	8.0	6.4	1.6	■	ガラス	52	4.1	2.4	1.0	■	ガラス
18	9.0	7.1	1.6	■	ガラス	53	4.1	2.1	1.1	■	ガラス
19	8.0	6.1	1.8	■	ガラス	54	4.2	2.6	1.2	■	ガラス
20	8.4	6.4	1.6	■	ガラス	55	3.4	2.9	0.9	■	ガラス
21	8.2	6.4	1.9	■	ガラス	56	3.0	1.5	0.6	■	ガラス
22	9.1	7.3	2.2	コバルトブルー	ガラス	57	4.1	2.6	1.0	■	ガラス
23	8.6	6.9	1.4	■	ガラス	58	3.6	2.5	0.9	■	ガラス
24	9.3	6.4	1.2	■	ガラス	59	3.9	2.4	0.9	■	ガラス
25	9.4	5.2	2.0	■	ガラス	60	3.4	2.2	1.1	■	ガラス
26	8.6	6.1	2.2	■	ガラス	61	3.6	2.2	1.1	■	ガラス
27	8.2	8.4	1.4	■	ガラス	62	3.9	1.2	0.9	■	ガラス
28	8.6	6.4	1.6	■	ガラス	63	3.6	2	1.2	■	ガラス
29	2.9	5.1	1.3	■	ガラス	64	4.2	1	0.9	■	ガラス
30	8.1	5.4	1.8	■	ガラス	65	3.8	1	1.2	■	ガラス
31	8.1	6.0	1.9	■	ガラス	66	3.2	2.6	1.1	■	ガラス
32	8.1	6.2	1.6	■	ガラス	67	3.6	2.4	1.1	■	ガラス
33	8.4	4.8	1.6	■	ガラス	68	3.8	1.1	1.2	■	ガラス
34	7.6	5.4	1.4	■	ガラス	69	3.8	1.6	1.0	■	ガラス
35	8.1	6.4	1.8	■	ガラス	70	3.6	1.8	1.0	■	ガラス

## 4 漆器

第3表 神松寺御陵古墳出土土器計測表(須恵器)

(単位:cm)

類	版	口径	器高	つまみ高	巾	胎	上	焼成	ロ	クロ	ヘラ	直土地点
									回転方向	記号		
环盖 I	1	14.6	6.2	1.4	4.2	精良	良	黒灰色	?		玄室內	
	2	—	—	—	—	精良	堅硬	淡青灰色	—		墳丘	
	3	14.1	4.7	—	—	砂粒を含む良質	やや軟質	赤褐色	時計	○	前室	
	4			—	—	細砂粒	やや軟	淡青色	時計		前室	
	5	13.7	3.8	—	—	砂粒	やや軟	青灰色	時計		墓道	
	6	16.2	5.0	—	—	細砂粒	良	青灰色	時計		前室	
	7	14.5		—	—	細砂粒	良	青色			"	
	8	14.5	3.9	—	—	細砂粒	やや不良	青灰	時計		"	
	9	13.7	5.0	—	—	細砂粒	やや不良	暗青灰	時計		"	
杯 II	10						"	"	"		"	
	11						"	"	"		"	
	12					細砂粒	良	青灰	時計		"	
	13	12.4	5.3	受部幅	打ちあがり高							
	14	12.2	4.8	14.6	1.1							
	15	12.7	4.5	14.8	1.1	砂粒混	不良	淡青灰				
	16	11.6	4.1	14.0	0.7	精良	良	"	時計		墳丘	
	17					細砂粒	良	青灰色			墓道	
	18	14.3		16.5	1.4	細砂粒	堅	淡青灰			前室	
	19	12.7		15.6	0.9	細砂粒	良	淡青灰			前室	
	20	12.8		15.5	0.9	細砂粒	良	淡青灰			前室	
	21	12.3		15.0	1.0	細砂粒	良	青灰			"	
瓶	22	12.3		15.2	1.0	細砂粒	やや不良	青灰	時計			
	23	10.2		13.6	1.3	細砂粒	良	青灰				
	24	11.4	8.4			精良	堅	暗青灰			墓道	
蓋	25			脚径	くび 11.4 5.8	細砂精良	堅	青灰			墳丘	
	26				19.8						前室	
脚	27			底径	11.0	細砂粒	堅	暗青灰			墳丘	
	28				13.9	細砂粒	堅	暗青灰			"	
	29				14.5	細砂粒	堅	青灰			"	

かぶりがみられる。29は表面にカキ目調整がある。27は脚端部は丸くおさめる。29は脚端部が下方に屈曲し段をつくりその上に沈線を施す。28は脚筒部中央に一条の沈線をめぐらす。沈線の下には三角透しがある。沈線下より脚端にかけて上下二段に櫛目波状文を描く。脚端に突帯をめぐらす。

(山崎)

## 第3章 住居址の調査

### 1. 住居址の分布と構造 (Fig. 21)

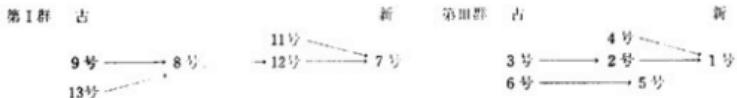
神松寺御陵古墳丘下およびそれに続く丘陵尾根上に20軒以上の重複した堅穴住居址を検出した。遺跡北側の造成地には土器類等の散布がみられ、この地域まで遺跡が拡大していたことが知られる。ここでは調査によって検出した住居址の分布について説明する。住居址は第1～14号住居址が古墳丘下で検出され、古墳築造時の地山整形作業などによって削平され遺存状態は不良である。第15～20号住居址は発掘調査時に土壤が著しい乾燥状態にあったため遺構の検出が困難で住居址相互の切り合い観察によって完全な新旧関係を把握することはできなかった。

住居址群は平面的分布の上でいくつかの群単位に分けることができる。調査区の北側からそ



Fig.21 神松寺遺跡の住居址分布図

の群を示せば第Ⅰ群は第7～13号住居址、第Ⅱ群は第14号住居址、第Ⅲ群は第1～6号住居址、第Ⅳ群は第15号～19号住居址、第Ⅴ群は第20号住居址となる。各々の群は数軒（6～7軒）の切り合いかなる。そして、その周囲には遺構がみられない空間が存在する。一群としたものは一軒の住居址の連続的建て替えによって生じた結果とみなすことも可能である。切り合いかねによる住居址の新旧関係は次の如くである。



住居址の変遷は時間的に新しくなるに従って住居址の占地が北側に移動する傾向が把握される。調査した住居址の中でその構造を知りうる住居址は少ないが、第Ⅰ群（第7、9号住居址）、第Ⅲ群（第1号住居址）、第Ⅳ群（第15号住居址）の住居址からその構造をみれば平面プランは方形或いは長方形を呈し、床面中央に不整形な切を切る。主柱穴はこの切をはさみ2本で、また主柱穴の柱通りに平行或いは直交する壁面に割り出し或いは貼床のベッド状遺構を付設し、これと対峙する壁寄りに主柱穴よりやや大きい堅穴（貯藏穴か）をもつものが一般的なものである。更に北側の第Ⅰ～Ⅲ群の住居址が同様の構造をもしながら主柱穴の軸をほぼ東西に向けるのに対して第Ⅳ、Ⅴ群は逆に軸をほぼ南北に向け、対照的に分布している点は注目される。

第Ⅰ～Ⅴ群に分けた住居址群の中で第Ⅱ・Ⅴ群は1軒の住居址のみであるが、これは削平消滅あるいは未発掘区にはいっているためありその元来の状態は他群と同様と考えられる。今回調査した区域の中で一時期に存在した住居址は5軒前後となろう。

(横山)

## 2. 住居址

### 第1号住居址 (Fig. 22)

東側を古墳墓域に切られているが比較的残りの良い住居址である。南北4.5m、東西は東南コーナーよりみて4.5mを越えず、方形に近いプランをもつ。北側に床面からの高さ10cm内外のベッド状遺構がある。幅は西側で55cm、東側に向かって徐々に広がり最大幅70cmをはかる。このベッド状遺構の西壁部に若干の掘り込みがあり、あるいはしきりの可能性を示すものかもしれない。西壁北半に接しても一段低いベット状遺構があり、幅70cm、ゆるやかな立ち上がりをもち、床面からの高さ6～10cmである。床面はしっかりしており、南西コーナー付近と中央西側寄りに幅10～15cm、深さ3～5cmの小溝が存在する。中央部には炉跡がある。直径60cmの浅い掘り込みで、周囲には灰が堆積していた。ピットは何ヶ所か存在するが柱穴と思われるものは東西の2個である。南壁中央に接して長径70cm、短径50cm、深さ22cmのピットがあり、中から2個の白粘土塊が出土している。

遺物はミニチュア土器や土器片の他に北側ベット上から石砲丁1点、床面から鉄斧、鉄鎌各

第3章 住居址の調査

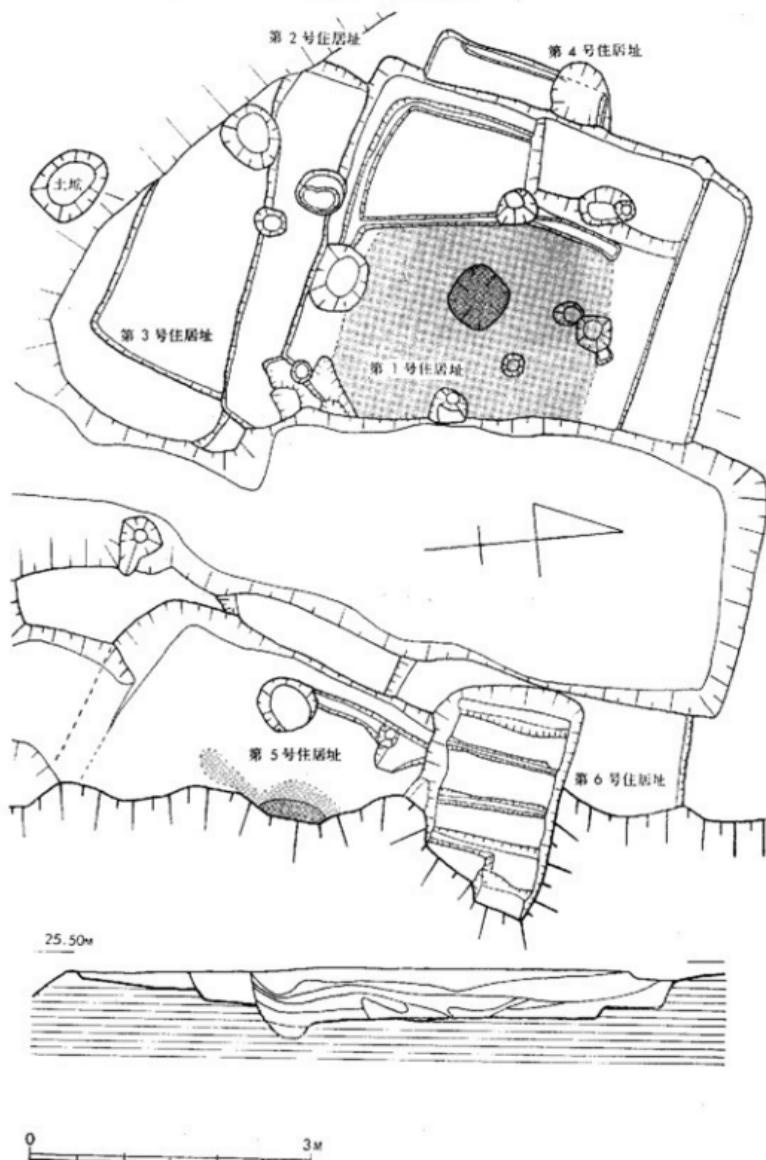


Fig.22 第3群住居址

1点、西南側の小溝付近から砾石1点が出土しているが砾石1点は盗難にあい紛失した。本住居址は第2号住居址、第4号住居址を切っている。

#### 第2号住居址 (Fig. 22)

第1号住居址の南側に存するが、その大部分を第1号住居址によって切られている。また南側の第3号住居址を切って作られている。残存する南壁は約3.7mで、方形か長方形プランをなすものであろう。ビットは存在するが柱穴と考えられるものはみつからなかった。土器片の他に東南コーナー付近から石庖丁1点、西南コーナー付近からのみ状鉄製品が出土している。

#### 第3号住居址 (Fig. 22)

北半を第2号住居址、西側を古墳の地山整形によって切られている。東南コーナーのみが残存しており、方形か長方形プランをなすものと思われる。西側に貯蔵穴と考えられる直径65cmの円形ビットが存在する。柱穴と思われるものは第2号堅穴に切られた1個が考えられ、他は第1号住居址によって消失したと推定される。

#### 第4号住居址 (Fig. 22)

第1号住居址にその大部分を切られており、西側壁のみ残存しているが、その北側も一部後世の盗掘によって攪乱されている。西壁は約1.9mをはかり、小型のものである。西南コーナーや北寄りのところから壁に接して小溝が巡る。現存壁高約13cm。

#### 第5号住居址 (Fig. 22)

東側の大半を老松神社建立の為の土取りによって、また北側を江戸時代と思われる小祀跡によって切られ、それぞれ西壁と南壁の一部が残存する。方形あるいは長方形プランをなすと思われ、壁高約50cm。西壁中央近くに柱穴と思われるビットがあり、それから北へ向かって小溝が存在する。覆土上部に弥生時代中期前葉と思われる土器底部が出土していたが、盗難にあい紛失した。土器片の他に砾石1点が出土している。

#### 第6号住居址 (Fig. 22)

東側を老松神社境内、南側を江戸時代小祀、西側を古墳墓壙によって切られ、北壁一部のみが残存する。壁が直線的であるため、方形か長方形プランをなすものと考えられる。現存壁高約7cm。  
(沢)

#### 第7号住居址 (Fig. 23)

第7号住居址は中央部分を古墳の地山整形溝によって切られているが、東側壁で両コーナーが確認され、1辺4.7mをはかる方形ないしは長方形プランとなる。壁は東側で約20cmを残している。主柱穴は東西側に2個検出された。N-54°-Wに軸をとっている。柱穴間は約2.6mをはかる。東側の柱穴は古墳の地山整形溝の床面に残り、直径30cm、深さ28cmの円形である。西側の柱穴は残りが悪いが、直径30cm、深さ36cmの円形である。

#### 第8号住居址 (Fig. 23)

第8号住居址は第9、12、13号住居址と重複しており、切り合いかから第12号住居址より古い時期のものと考えられる。本住居址は南側壁の長さ5.3mをはかり、両コーナーも完全であって、平面プランは方形ないしは長方形となる。壁は南側で高さ20cmである。主柱穴については

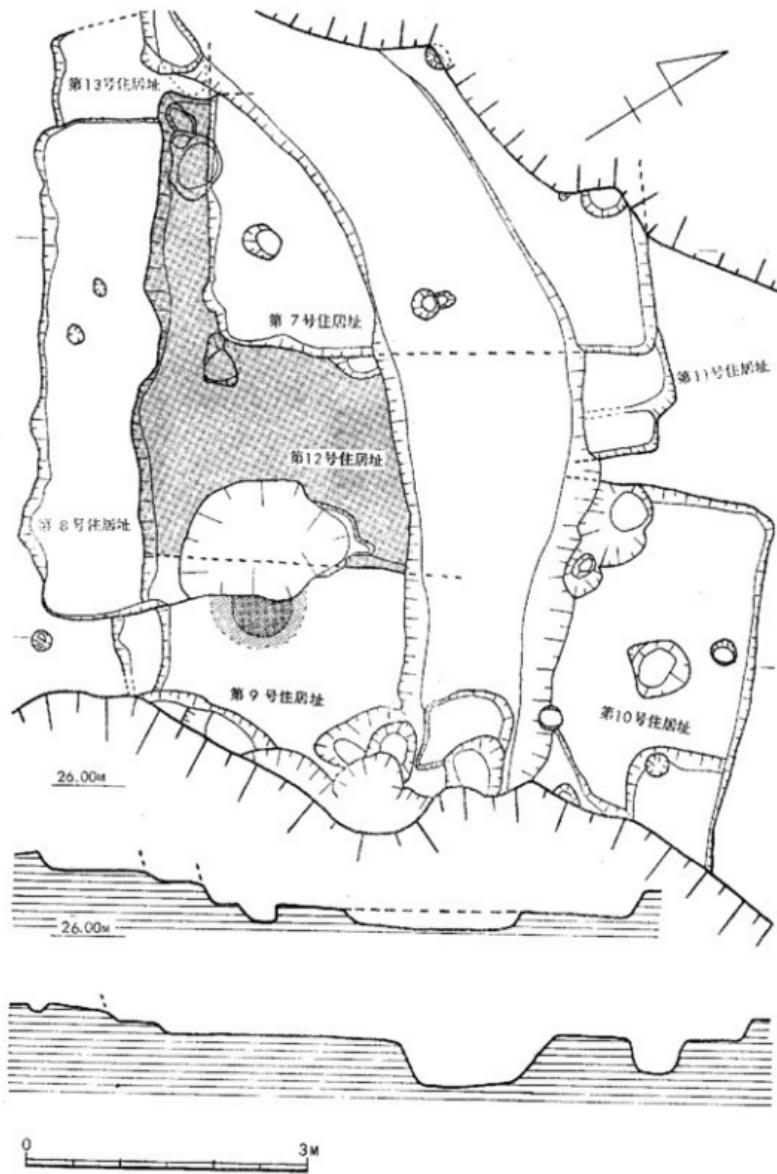


Fig.23 第1群住居址

## 2 住居址

第12号住居址の床面で第7号住居址の東南コーナー部分に位置するビットがそれらの1個にあると考えられる。ビットは $160 \times 34\text{cm}$ 程度の長円形で深さ33cmをはかるものであるが柱穴の位置の上で主柱穴の袖は第7号住居址と同一の可能性がつよい。なお西壁中央部で鉄斧が出土している。  
(横山)

### 第9号住居址 (Fig. 23)

西側を第8号住居址によって、北側を古墳の地山整形溝によって切られている。また堅穴住居掘り込み面も古墳の地山整形によって削平されており、床面が残っているのみの方形住居址である。南側に床面から10cmで幅50cmのベッド状の屋内施設が付設されており、炉は径60cmで掘り込みではなく、ベッド状遺構よりに位置している。出土遺物としては擦り切り技法をもちいた砥石 (Fig. 33) 土器の細片がある。  
(山口)

### 第10号住居址 (Fig. 23)

古墳の地山整形と、神社の建立で削られているが、方形ないしは長方形プランの住居址である。住居本来の大きさは不明である。柱穴は、周溝との切り合い部分に1個を認める。中央の約40cmの深さのビットは、貯蔵穴の可能性がある。  
(原)

### 第11号住居址 (Fig. 23)

南側を第12号住居址に、西側を第7号住居址に切られており、さらに古墳の地山整形溝によって南側を切られて、北東隅のみが残っている。出土遺物は土器の細片のみで、東側にベッド状の施設が付設されていた痕跡がみられる。

### 第12号住居址 (Fig. 23)

第8~10・13号住居址を切っているが、西側を第7号住居址に、北側を古墳の地山整形溝によって切られている。東西辺約5mで、南北辺は約4.3mと考えられる方形住居址で、二木柱と考えられる。柱穴は南側が径40cm、床面から深さ33cmで、北側のは溝中央に痕跡が残っている。南西隅に、平面形稍円 ( $70\text{cm} \times 40\text{cm}$ ) で床面から深さ56cmの貯蔵穴 (?) が付設されている。また、この住居址の床面は、炭化層におおわれ、出土遺物も、甕・壺・器台等の土器 (Fig. 28) や石斧 (Fig. 32-10) とほかの住居址に比べて多く、火災にあったか、意図的に焼かれたものと思われる。

### 第13号住居址 (Fig. 23)

第7・8・12号住居址によって切られ、さらに古墳の地山整形によって削平され、床面まで約15cm、北西隅が残っているのみである。出土遺物としては、砂岩製砥石がある。

### 第14号住居址

古墳の地山整形によって大部分が壊わされ、北東隅か床面まで約15cm残ったのみである。出土遺物がなく時期は分らないが、第1号住居址を最新とする切り合い関係にある群、第7号住居址を最新とする切り合い関係にある群とも離れており、住居地が西部へも拡がっていたことが、この住居址の確認から予測できる。  
(山口)

### 第15号住居址 (Fig. 24)

住居址は平面形が東西3.56m × 南北4.20mの長方形プランをなし、南側において幅1.2m、

第3章 住居址の調査

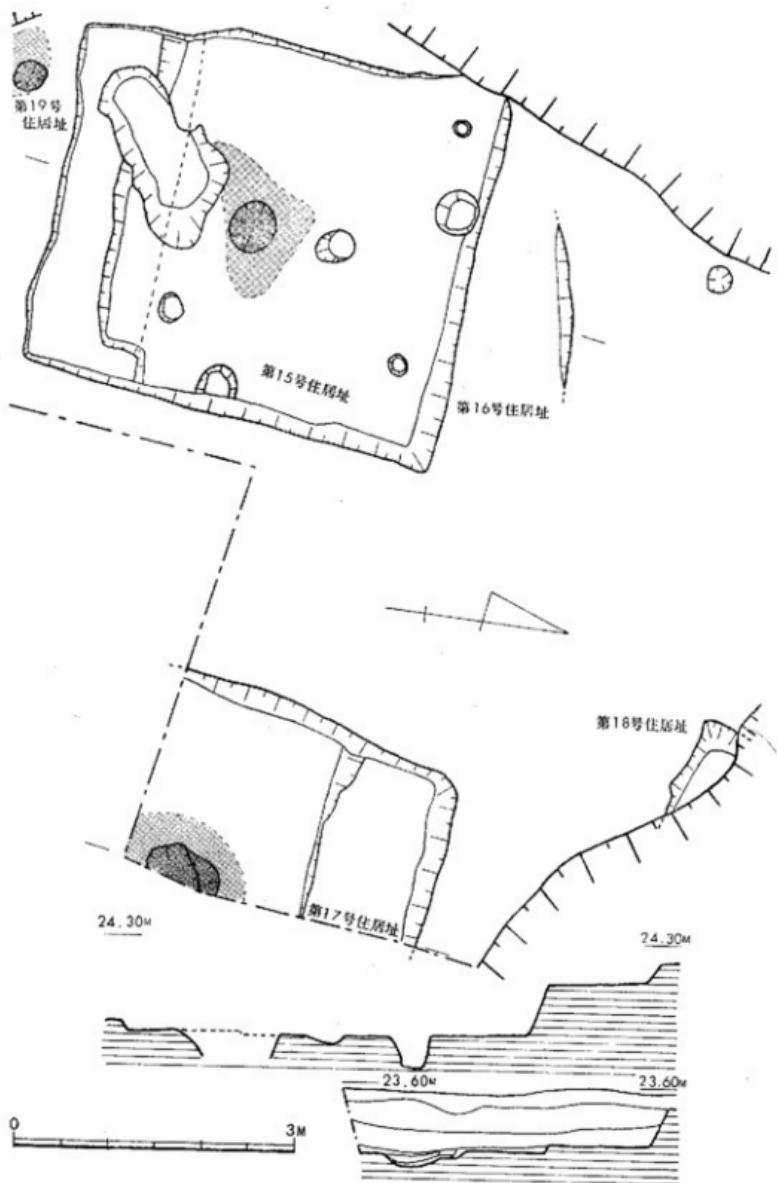


Fig.24 第4号住居址

## 2 住居址

高さ0.1mの地山削り出しによるベッド状遺構を有する。壁高は、北壁0.58m、南壁0.16m、東壁0.4m、西壁0.1mを計る。住居址の床面に4個のピットを検出したが、炉の北側0.6mで検出した直径0.26m、深さ0.36mのピットは主柱穴と考える。本ピットと対峙する主柱穴は、後世の（須恵器出土）搅乱土壌により消失している。

炉は住居址のはば中央に掘り込まれ、平面は東西0.6m、南北0.5mの梢円形を呈し、深さは、中央部で0.12mを計り浅い。炉内は炭化物の混入した赤褐色粘質土の下に、厚さ数cmの黒色灰層が堆積し、その下部に赤褐色砂質土が全体的に認められる。炉壁は全般的に赤く焼けている。炉内の黒色灰層の堆積状態は、住居施設の最終段階では人為的な灰のかき出しが行なわれなかつたことを示している。炉を中心として1.6m、南北0.6mの範囲に炭化物の混入した焼土が厚く広がっていた。この地点よりサンブルとして持ち帰えた炭、焼土を含む淡赤褐色粘質土を洗浄中にガラス玉1個を検出した。

北壁西側において、貯蔵穴と考える東西0.48m、南北0.46m、深さ0.48mの円形ピットを検出した。ピット内は、堅くしまった黄褐色砂質土の埋土が認められ、内より器台形土器1、甕形土器破片若干が出土している。

住居址床面より、弥生式土器と炭化物、粘土塊が検出されている。弥生式土器は熱を受け、赤変し、もろくなつた土器とそうでないものがある。熱をうけたものは、炉の東側0.6mより出土した甕形土器と、西側1.2m出土した甕形土器片がある。赤変しない土器は、東壁北寄りにおいて、内面を上にむけて検出された椀形土器と、横位で出土した甕形土器がある。青灰色の粘土塊は、炉の北西1mで検出されたもので、平面は東西18cm、南北32cmの厚さ6cmの不整形梢円を呈する。床面に置かれた粘土塊が土圧で押しつぶされた状況を呈していた。炭化物（穀類（未同定））は、西壁中央部付近で検出したもので、分布範囲は壁面にそって長さ80cm、半径40cmの半円形に厚く出土する。

（前田）

### 第16号住居址 (Fig. 24)

北側壁を一部残すのみで、壁高約20cmを計る。15号住居址との切り合いが考えられる。遺物は、床面にはば完形の高杯と甕が出土した。

（原）

### 第17号住居址 (Fig. 24)

第17号住居址は第15・16号住居址から約3mの距離をおいた東側傾斜面に位置する。遺構は調査区外に延びており完掘し得なかつたが、西側にあたる約1/4を調査した。平面プランは方形ないしは長方形と考える。壁は西側で高さ80cmを計る。また床面の中央部と考えられる部分に長径90cm、短径45cm以上、床面よりの深さ13cmの不整形円形の炉を有し、北側壁に沿って幅約1m、高さ6cmの低い地山削り出しのベッド状遺構が付設されていた。炉の周囲には幅約1mにわたつて黒色炭化物の竑がりを認めた。住居址の覆土は赤褐色粘土塊、焼土、炭化物の細片を混じる暗褐～黄褐色砂質土（花崗岩バイアン土）である。遺物は覆土中より土器破片が少數出土した。住居址床面に密着するものは殆どなかつた。また北側約2mに近接する第18号住居址とともに東側傾斜面には数軒の住居址の壁らしいものを認めたが、土壌の著しい乾燥状態の為に確かなものと出来なかつた。何れも本住居址と重複する可能性が大きい。

（横山）

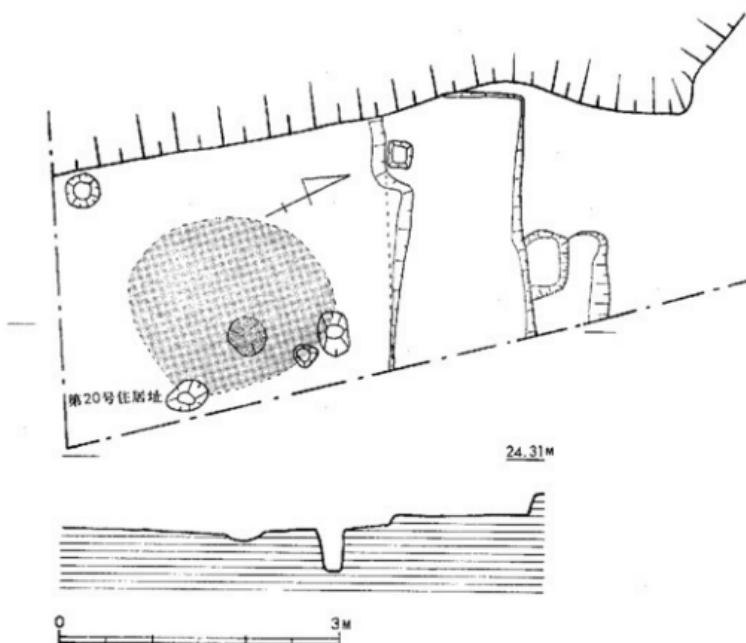


Fig.25 第5群住居址

## 第18号住居址 (Fig. 24)

西側のコーナーのみを残している。方形ないしは長方形プランの住居址である。現存する。壁高は約40cmを計る。遺物は、覆土内より、土器片数点が出土している。

## 第19号住居址 (Fig. 24)

炉とそれに伴なう炭化物層を確認するのみである。15号住居址との切り合いが考えられる。

## 第20号住居址 (Fig. 25)

西側を削られているが、北側にベッド状遺構がある。方形ないしは長方形の住居址である。住居本来の大きさはわからない。北側壁から、小さい階段状遺構が2段続くが、この住居址に伴うものかは不明。炉は深さ10cm程の浅いすり鉢状で、炉のまわり、半径1m程の範囲に、焼上を含む炭の広がりを認める。柱穴は、炉の北側に深さ45cm、径30cmのものを1個確認する。炉をはさんで、対方向にもう1基の柱穴をもつ2本柱の住居址を想定し得る。遺物は、ベッド状遺構の北東側の墻際で高壙を出土している。

(原)

## 土壤

第3号住居址の南側に長径82cm、短径55cm、現存の深さ約38cmの土壠が存在する。これは上

部を古墳の地山整形によって切られており、あるいは住居址に付属する貯蔵穴の可能性も考えられる。

(沢)

### 3. 遺 物

#### (1) 土 器

##### 第1号住居址の土器 (Fig. 26—1~19)

1はいわゆる複合口縁の壺である。わずかに外反しながら内傾する口縁は端部でつまみ出しによって外側に突起状の隆起がつけられる。屈曲部は棱が強くつけられる。口縁外面は縦刷毛目調整を行い、その後口縁全体を横なで調整。2も同様の壺の口縁であるが、1に比べて内傾度が小さい。内面は斜めの刷毛目調整。外面は横なで調整。1・2とも胎土に砂を含み焼成良好。黄褐色。3~6は壺の口縁部でいずれも「く」の字状に折れるが、3のように棱のつかないものもある。4~6は口縁端が肥厚し、口唇部が沈線状に凹む。いずれも横なで調整で石英粒砂、砂粒を含み、焼成は6を除き良好。5の外面には媒の付着がある。7~11も「く」の字状口縁の壺であるが、7~9は内面屈曲部に棱がつく。7は外面は粗い刷毛目調整。内面も胴部には刷毛目調整。口縁内面から外面上部にかけて横なで調整。内面口縁直下はなで調整が強く凹む。胎土に砂、金雲母を含み暗褐色を呈する。焼成はもろい。8は若干口縁部が長い。口縁外面は刷毛目調整の後、横なでして一部消している。内面は横なで調整。胎土は砂粒を含み、暗黄褐色を呈し、焼成良好。9は7より胴部の張りが強い。外面は刷毛目調整の後、口縁部を横なで調整し一部刷毛目を消している。内面は口縁部横なで、胴部斜刷毛目調整。口唇部は沈線状に凹む。口唇から口縁内面にかけて丹塗りの痕跡がある。胎土に砂を含み、焼成はよくない。暗黄褐色。11は口縁を欠く。胎土に砂粒を混じ、胴部内外面とも刷毛目調整。外面屈曲部より上は横なで調整。焼成は不良。12も複合口縁の壺であろう。1・2と違い内窓気味に内傾する。胎土に石英粒砂を含み、黄褐色を呈するが焼成はわるい。13はいわゆるミニチャアの鉢である。口縁部を欠くが、推定高3.6cm、口径4.4cmを計る。胎土は砂粒混を含み、暗黄褐色を呈する。焼成は良くない。内面底部は指の押圧調整。14は壺の肩部である。頸部へ移行する位置に一条の低い三角突帯を巡らし、その部位は横なで調整。以下の胴部は縦刷毛目、胴部内面も横刷毛目調整。15~18は底部である。15・16・18は平底、17は丸底に近い。18は底面に焼成前の穿孔があり、瓶として利用されたものであろう。16は内面に刷毛目調整で、指の押圧調整痕も認められる。いずれも胎土に砂粒を含むが17以外は焼成はよい。16に褐色、他は暗褐色を呈する。19は器台の裾部で斜めに叩き調整痕がみられる。胎土に砂を含み、焼成良好。暗黄褐色を呈する。

##### 第2号住居址の土器 (Fig. 25—20~22)

20は複合口縁の壺である。口縁外端のつまみ出しなどは認められない。横なで調整を行い、焼成は良い。胎土に石英粒砂を含み、黒褐色を呈する。21は壺の口縁で横なで調整。内面口縁下が強いながら若干凹んでいる。胎土に砂粒を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。22は

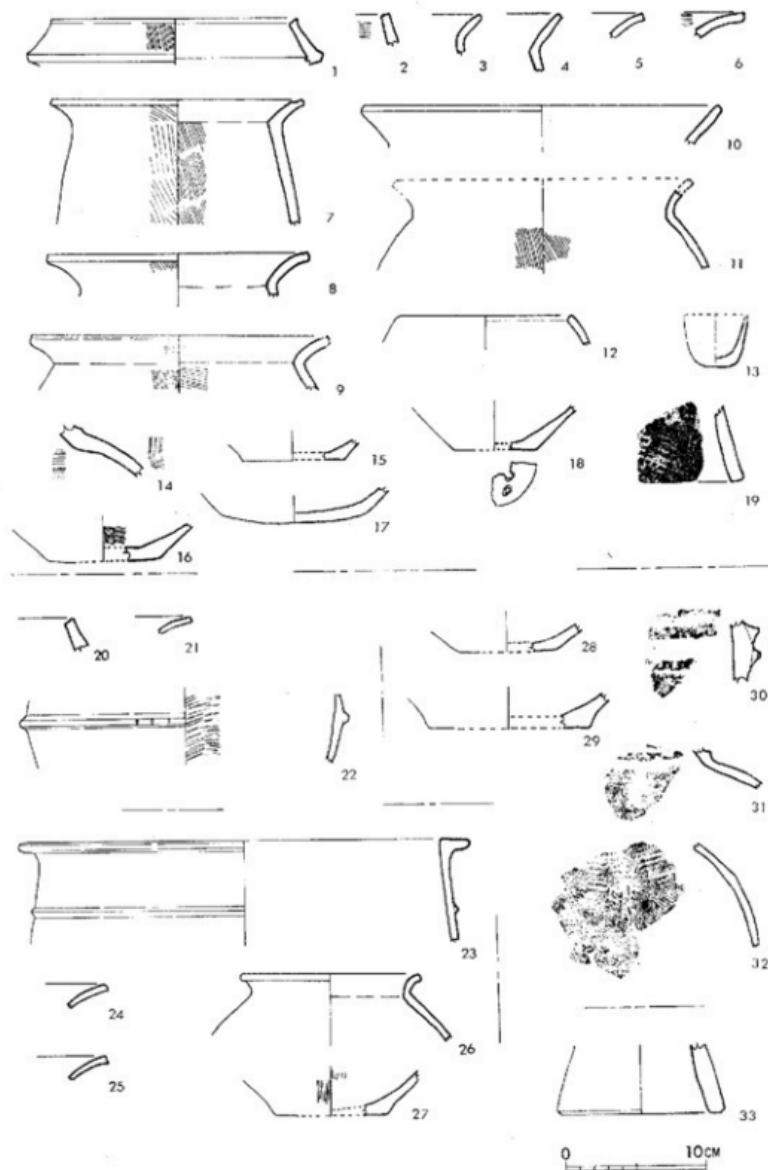


Fig.26 岩出式土器窯跡 I

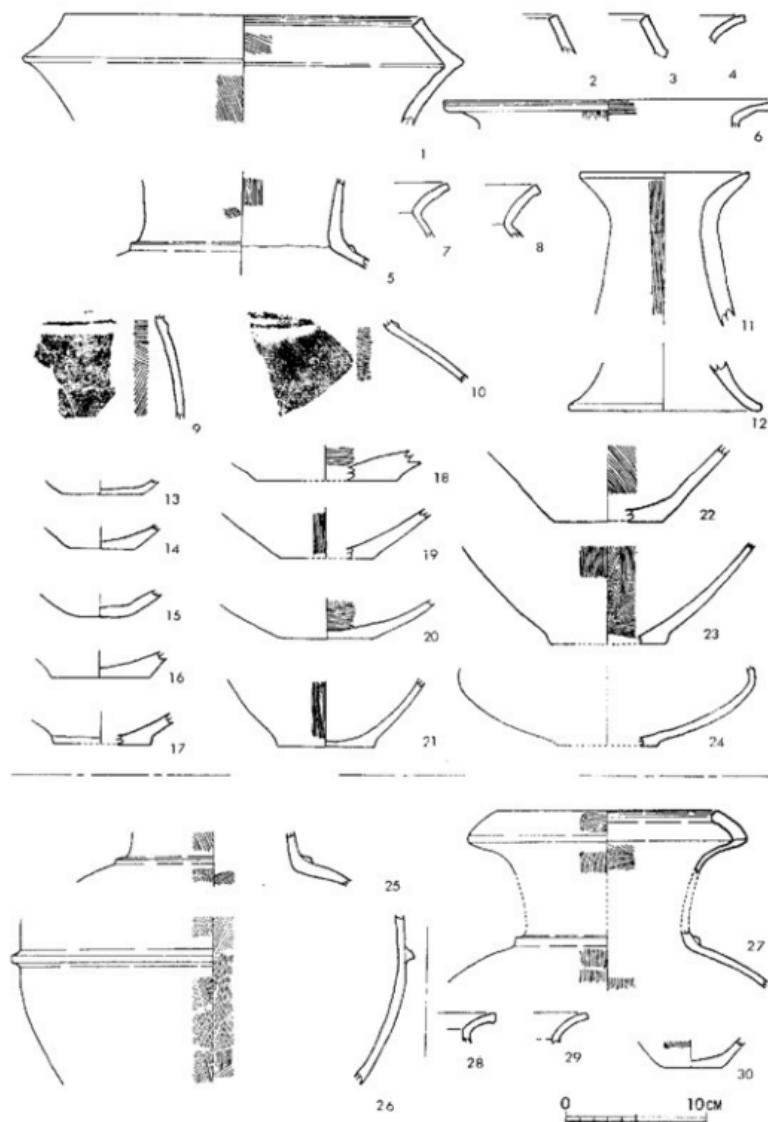


Fig.27 异生式土器実測図II

壺の胴部で一条の断面台形の突帯を、胴部最大径部に巡らす。突帯上には縦の刻目が施される。外面は器面があれいるため調整は不明だが、内面は条痕が残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。

#### 第3号住居址の土器 (Fig. 26-23~27)

23は口縁上部が水平で、口縁内端の張り出しあはない。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。外面は口縁から突帯貼付部まで横なで調整。器面があれいるため他の調整は不明。胎土に石英粒砂を混じ、赤褐色を呈する。焼成は不良。24・25も壺の口縁で、「く」の字状を呈す。いずれも口縁端が肥厚するが25は口唇部が凹む。横なで調整を行うが25は外面に刷毛目調整の痕跡がある。ともに外面に煤が付着。胎土に砂を混じ、焼成はもろい。暗褐色を呈する。26は胎土に砂・金雲母を混じ、「く」の字状に屈接する口縁部をもつ。口縁は外湾氣味に立ち上がる。焼成はもろく、暗褐色を呈する。27は底部で外面とも刷毛目調整。外面下部は横なで調整を行い、刷毛目を消している。胎土に砂、金雲母を含み、焼成は良くない。暗褐色を呈する。

#### 第5号住居址の土器 (Fig. 26-28~32)

30は大型の壺の胴部破片で二条の断面台形の突帯が巡る。上段の突帯には刻目はつかないが、下段には刻目が施される。突帯の下部には刷毛目調整。胎土に砂粒を混じ、焼成良好黄褐色を呈する。31は壺の肩部で一条の三角突帯が巡る。胴部内面は刷毛目調整。外面は丹塗り。胎土に砂粒を混じ、焼成良好。赤褐色。32は球形の胴部をもつ壺で、胴部上面に横の叩き痕が残り、その後に刷毛目調整。内面も刷毛目調整で、胎土に石英粒砂を含み、焼成は良くない。黄褐色を呈する。28・29は底部で器面があれいるため調整は不明。いずれも平底で、胎土に石英粒砂を含み焼成はもろい。28は赤褐色。29は暗褐色を呈する。

#### 第6号住居址の土器 (Fig. 26-33)

器台の裾部である。器面があれいるために調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成は不良。黄褐色を呈する。

#### 第7号住居址の土器 (Fig. 27-1~24)

1~3・5・10は壺である。1~3はいわゆる複合口縁をなす。いずれも口縁は若干外湾しながら内傾し、口縁外端部をつまみ出して肥厚される。1は口縁周接部以下に斜刷毛目調整。口縁内面は斜刷毛目調整の後、横なで調整。胎土に砂粒や金雲母を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。2・3はともに横なで調整を行い、2は胎土に砂を含み、黄褐色。3は石英粒砂を混じ、黒褐色。ともに焼成は良好。5は頸部から肩部の移行点に低い一条の三角突帯を巡らす。外面は刷毛目調整がなで消され、一部残る。突帯貼付部は横なで調整。内面は縦刷毛目調整で、頸部下半は横なで調整で消している。胎土に砂粒を含み焼成良好、黄褐色を呈する。10も頸部と肩部の移行点に一条の三角突帯を巡らしその部位は横なで調整。外面縦、内面横の刷毛目調整で、外面には丹塗りの痕跡がある。胎土に砂や金雲母を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。4・6~8・9は甕である。いずれも「く」の字状の口縁をもつが、9は口縁を欠く。6はいわゆる跳ね上がり口縁をなし、口唇部は沈線状に凹む。口縁外面は縦刷毛目調整の後、横なで調整。内面は横刷毛目調整で、突帯貼付部は横なで調整。外面に煤付着。4は横なで調整。

7・8は器面があれでいるため調整不明。4・7～9は胎土に石英粒砂を含み、6は砂、金雲母を混じ、焼成は8を除き良好。4は淡赤褐色、6は赤褐色、7・8は黄褐色、9は暗褐色を呈する。11は器台で器部を欠く。外面は紙刷毛目調整。内面は器面があれでいるため調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。12は脚部である。器面があれでいるため調整痕は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色。13～24は底部である。いずれも平底。ただ15はやや丸底に近い。外面刷毛目調整(19・21・23)、内面刷毛目調整(18・20・22・23)がある。胎土には、砂や金雲母混入(13・15・19・21・24)、砂粒を含むもの(14・22)、石英粒砂を含むもの(16・17～20・23)があり、焼成は14・15・18以外は良好。褐色(13・15)、黄褐色(14・18・20)、赤褐色(16・22)、暗赤褐色(17)、暗褐色(19)茶褐色(21・24)、黒褐色(23)を呈する。

#### 第8号住居址の土器 (Fig. 28-18～26)

18・20は「く」の字状口縁の壺である。18は口縁端が若干肥厚し、口唇部が沈線状に凹む。全体的に横なで調整だが、外面には粗い刷毛目調整痕が残る。胎土に石粒を含み焼成良好、淡い灰褐色を呈する。20も横なで調整だが、外面に媒付着。砂粒や金雲母を胎土に含み、焼成良好。暗褐色。19は口縁端を欠くが、いわゆる複合口縁の壺である。内、外面ともに刷毛目調整痕が残る。胎土に砂、金雲母を含み、焼成は良くない。黄褐色を呈する。24は脚部である。内、外面も綻、あるいは横の刷毛目調整。胎土に砂や金雲母を含み、焼成良好。黄褐色。21～23・25・26は底部である。21が上げ底、22・25が若干丸味を帯びるが、ほとんど平底である。外面(22・23・26)、内面(21・23・25)刷毛目調整。21以外は底面にも刷毛目調整。26は内面に媒付着。23が胎土に石英粒砂を含む以外はいずれも砂を混じ、焼成は良好。赤褐色(21)黄褐色(22・23)、淡黒褐色(25)、暗褐色(26)を呈する。

#### 第9号住居址の土器 (Fig. 27-25・26)

いずれも壺の破片で同一個体と思われる頸部から肩部へと移行する位置に一条の低い三角突帯、胸部最大径付近に一一条の断面台形の突帯を巡らす。突帯貼付部は外面横なで、内面は指の指圧調整。内・外面とも他は刷毛目調整を行うが、頸部内面はなでて消されている。胎土に砂や金雲母を含み、赤褐色を呈するが、焼成は良くない。

#### 第10号住居址の土器 (Fig. 27-27～30)

27はいわゆる複合口縁の壺だが、口縁屈折部の稜は弱く、口縁は内湾しながら内傾する。口縁端は肥厚し、内部口唇は若干凹む。頸部から肩部へ移行する位置に一条の三角突帯が巡る。口縁部に比較して頸部の器壁は薄く作られる。外面とも刷毛目調整だが、口縁屈折の接合外面と、突帯貼付部は横なで調整。口縁外面上部も同様で刷毛目を消している。口縁内面は指の押圧調整痕が残る。外面に一部丹の痕跡が残る。胎土に砂や金雲母を含み、黄褐色を呈するが焼成は良くない。28・29は「く」の字状を呈する壺である。28は口縁端が肥厚する。いずれも横なで調整。胎土に砂粒(28)、砂、金雲母(29)を含み、焼成はともに良くない。暗褐色(28)、黄褐色(29)を呈する。30は底部で外面刷毛目調整だが底部近くは消されている。胎土に砂、金雲母を混じ、赤褐色。焼成はもろい。

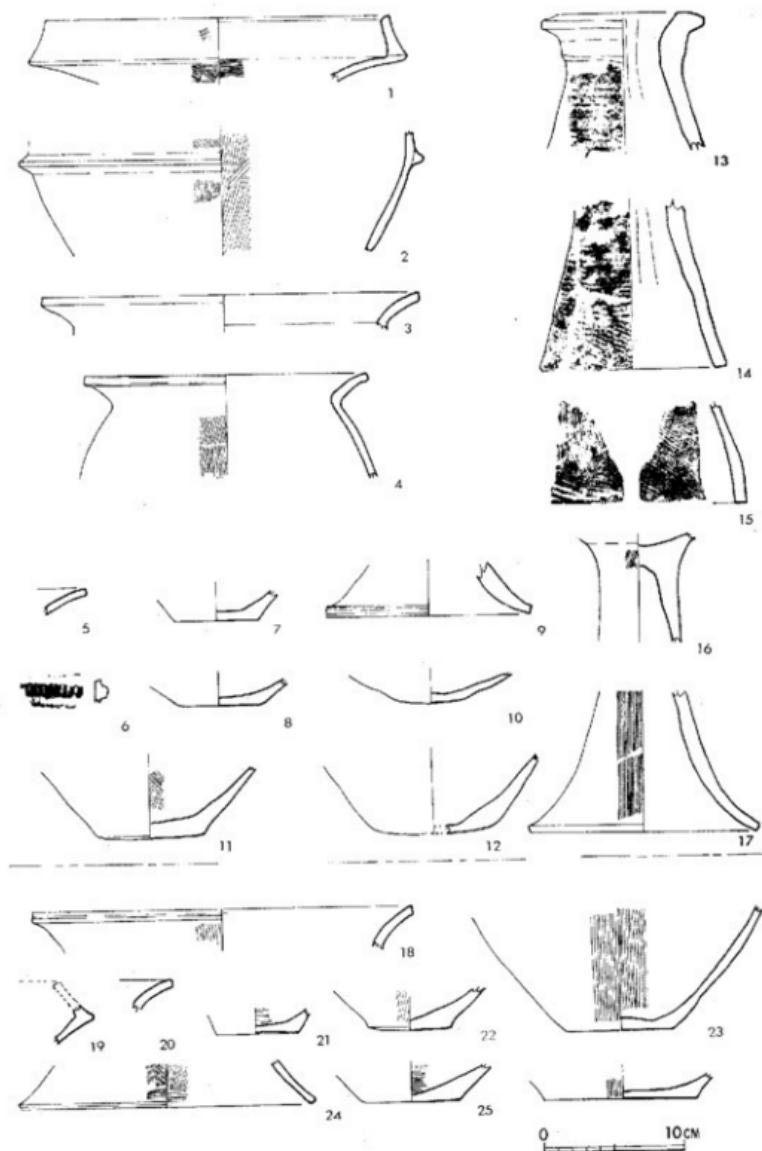


Fig.28 弥生式土器実測図面

## 第12号住居址の土器 (Fig. 28—1~17)

1・2・6は壺である。1は口縁の立ち上がりが強く、わずかに内傾する。口縁内唇は若干の丸味をもち、口縁部全体は横なで調整だが、外面に一部斜刷毛目調整を残す。屈折接合部は外面に横なで、内面は指の押圧調整痕が残る。それ以下は刷毛目調整。胎土に砂を混じ、焼成良好。黄褐色を呈する。2は胴部で、最大径の若干下部に断面台形の突帯一条を巡らす。外面は細い刷毛目調整で一部突帯上部まで施されるが、その後横なで調整で消している。また胴下部も窓のなで調整で消している。胎土に石英砂、金雲母を混入し、焼成良好。外面暗茶褐色、内面黒色を呈する。6は胴部の突帯貼付部のみで、突帯は断面台形を呈し縦の刻目をつける。胴一部から突帯の上部にかけて斜刷毛目調整。器壁は薄い。胎土に砂を混じ、焼成良好。黒褐色を呈する。3~5は、「く」の字状口縁をもつ。胴部まで残存する4では胴部最大径は口縁径より大きい。3・4は口縁端が肥厚し、口唇部は凹む。口縁部はいずれも横なで調整で4は胴部外面に刷毛目調整。3は口縁内面、4は外面全体に赤い化粧粘土の痕跡が認められる。3・4は胎土に砂や小雲母、5は砂を含み、焼成は4を除き良好。3・5は黄褐色、4は褐色を呈する。13~15は器台である。13は口縁に近いくびれ部で肥厚して段を有し、口縁部は外部に開きながら、外側に張り出す。胴部外面には叩き目調整痕が残り、内面にはしづり痕や、指の指圧調整痕も認められる。14は口縁部を欠くが胴部外面には横、斜めの叩き目調整痕が残り、内面にはしづり痕や指の調整痕がある。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好、赤褐色を呈する。15は脚部のみで微近くでゆるい稜をもつ。脚端は水平となる。外面縦、内面斜めの粗い刷毛目調整だが、外面摆部近くには叩き目調整痕も残る。胎土には石英粒砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色を呈する。9は脚部である。脚裾部は肥厚する器面があれるために調整痕は不明。胎土に砂を混じ、焼成良好。黄褐色を呈する。16は高坏の脚部である。器面があれるために調整は大部分が不明だが、外面一部に縦刷毛目調整、坏下部には横なで調整、坏内面にはなで調整の痕跡が残る。胎土は砂や金雲母が混じ、焼成はもろく、暗褐色。17は高坏の脚部であろう。外面には縦刷毛目調整。内面はしづり痕がみられるが他の調整は器面のあれのため不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗赤褐色。7・8・10~12はわずかに丸味がかった平底である。8は内面と底面に、11は、内外面と底面にそれぞれ刷毛目調整。10の内部底面には指の押圧調整、11の内部底面には初痕が残っている。11の内面は赤い化粧粘土らしき痕跡も残る。胎土は石英粒砂(7・10・12)、砂(8・11)を含み、焼成は10を除き良好。赤褐色(7・11)、暗赤褐色(8)、黄褐色(10・12)を呈する。

## 第15号住居の土器 (Fig. 29—1~14)

1~4は壺である。1~4はいわゆる複合口縁をもつ。いずれも若干外溝しながら内傾し、口縁外端はつまみ出しにより肥厚している。屈曲部は4は尖った稜をもつが、1は屈曲部が外に強く張り出す。屈曲部以下は内外面ともに横刷毛目調整。それ以上は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。4も口縁部全体を横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成はもろい。外面黒褐色、内面褐色を呈する。2は口縁部を欠くが、立ち上がりは直立に近いと考えられ、あるいは壺ではなく高坏の可能性もある。屈曲部以下の外面は斜めある

いは横刷毛目調整。内面も一部粗い斜めの刷毛目調整。屈曲部は内外面とも横なで調整。胎土に砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。3はあるいは1と同一個体かもしれない。頭部から肩部の移行点に一条の低い三角突帯を巡らす。内面には接合痕が明瞭につけられる。突帯貼付部は横なで調整。胴部外面および頸部内面はなで調整。肩部以下の内面は刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成はもろい。暗褐色。5は大型の壺か。器面があれていますため調整は不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黄褐色を呈する。6は大型鉢で、口縁部はゆるく外へ折れ、その部分から肥厚する。器面があれていますために調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色。内面黒褐色。7・8は甕である。7は口縁部は横なで調整のため凹凸がはげしい。口縁部は沈線状に凹む。外面は屈曲部と胴部に内面は口縁下の一部に刷毛目調整が残る。8は口縁部を欠くが、屈曲部では棗をもたない。屈曲部より上は横なで調整。胴部内面は指の押圧調整の後刷毛目調整。ともに胎土に石英粒砂を含み、焼成はもろく、暗褐色を呈する。9・10は鉢である。9は完形品で口径11.8cm、器高4.1cm。底面が凹み、内面が一部盛り上がっている。外面はなで調整。内面は横あるいは斜めの刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成はもろい。暗褐色を呈するが外面底部近くは一部黒変。10は9に比べて器高が高い。内外面とも刷毛目調整だが外面は一部器面があれています消えているところもある。石英粒砂を胎土に含め、焼成良好。外面黄褐色で一部に黒斑がある。内面は黄褐色。11～14は底部である。11は小さい上げ底、12は平底、13・14は丸味を帯びている。12は底面に刷毛目調整。14は胴部外面に斜めの叩き目がみられ、その下に底部にかかる粗い刷毛目調整。内面も刷毛目調整。胎土はいずれも石英粒砂を含み、焼成はもろい。暗褐色。

#### 第16号住居址の土器 (Fig. 29-15・16)

15は高壺である。口縁部はいわゆる複合口縁の壺と同じ形態をもつ。屈曲部から立ち上がる口縁部は若干外反しながら内傾し、口縁外端をつまみ出して肥厚させる。壺部の内外面および脚部外面とも刷毛目調整だが、口縁部外面、内面上部屈曲部内面と壺下部および脚部の大半は横なで調整のため刷毛目が消されている。脚部内面にはしばり痕がみられる。胎土には石英粒砂や金雲母が含まれ、焼成はあまり良くない。暗褐色。16は球形の胴部をもつ壺であろう。底部は平底と思われる。外側は叩き目調整の後刷毛目調整。脚下半部はなでて消されている。内面は斜刷毛目調整だが脚下半部は器面あれのため不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成はもろく外面暗褐色、内面黒褐色を呈する。

#### 第17号住居址の土器 (Fig. 30-1～17)

1は大型の壺であろう。外面は器面があれていますが内面は横なで調整。胎土は砂を含み、焼成はもろく、黄褐色を呈する。2～4は甕である。3は立ち上がりが強いいざれも「く」の字状を呈するものであろう。2は外面横なで内面刷毛目調整。3は横なで調整。4は口縁部横なで調整。胴部外面には刷毛目調整。内面には指の押圧調整痕がみられる。2、3は胎土に砂、4は石英粒砂を含み、褐色は4を除き良好。赤褐色(2)、黒褐色(3)、暗茶褐色(4)を呈する。5は壺で頸部と肩部の移行部に一条の低い三角突帯を巡らす。胴部内面に指の押圧調整痕を残す。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、黄褐色。6～9は鉢である。6は内外面と

3 遺 物

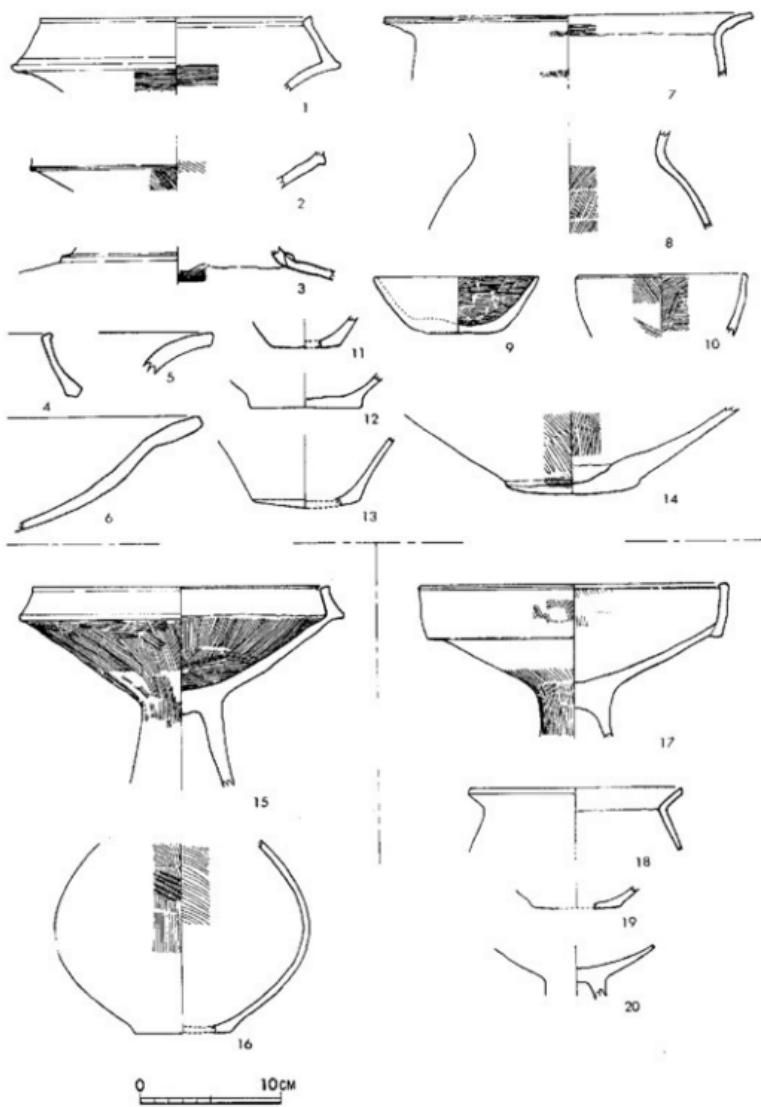


Fig.29 生生式土器尖測圖IV

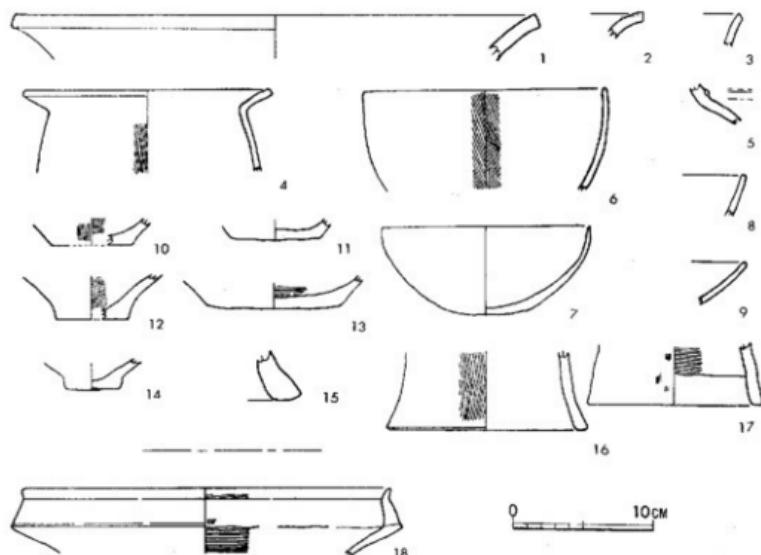


Fig.30 弥生式土器実測図V

も刷毛目調整。7～9は全体的になで調整。7の推定口径13cm、器高6.3cm。9が胎土に砂を含む他は石英粒砂を混じ、焼成はともにものい。5、9は黄褐色、7、8は赤褐色を呈する。15～17は器台の裾部である。15は器壁が厚い。16は外反気味、17は内反気味の裾部をもち段がついて若干肥厚する。16は外面刷毛目調整。17は外面に一部刷毛目調整が残り、内面に段上部に横刷毛目調整。いずれも胎土に石英粒砂を混じ、焼成良好、暗褐色。10～14は底部である。14が若干の上げ底、11・13はわずかに丸底気味である。刷毛目調整は外面(10・12)、内面(10・12・13)、底面(10・11・13)に施される。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成は12・13以外は良好。暗黄褐色(10・11)、赤褐色(12・13)、暗褐色(14)を呈する。

#### 第18号住居址の土器 (Fig. 30-18)

壺かあるいは高杯の外縁である。外に開く頸部から口縁部が内湾気味に内傾しながら立ち上がり、上端は外側上部につまみ出している。口縁部外面は横なで調整。内面は横刷毛目調整の後口縁内面は横なで調整で消している。胎土に石英粒砂を含み、焼成はもろく、内部は一部黒変があるが暗褐色。内面は黄褐色。

#### 第20号住居址の土器 (Fig. 29-17～20)

17・20は高杯である。17は口縁部が内湾しながら外傾し、口縁端は内外面ともつまみ出されて肥厚する。口縁内外面は刷毛目調整の後、外面は横なで、内面は窓のなで調整で刷毛目を消すが、一部残る。窓部内外面は窓のなで調整。外面杯下部から脚部にかけては縦刷毛目調整。

脚部内面は指で調整。胎土に砂や金雲母を含み、焼成は良好。暗褐色。20は脚付鉢かもしれない。坏部の内面はなで調整。外面は器面あれのため器面調整は不明。胎土に砂を含み焼成は良くない。暗黄褐色。18は「く」の字状口縁をもつ壺で、全体的に器面があれいるため器面調整不明。胎土は砂を含み、焼成はもろく、暗赤褐色。19は若干丸底気味の底部で内部なで調整。胎土に砂を含み、焼成良好。暗黄褐色。

#### その他の土器 (Fig. 31—1～27)

1は頸部から肩部への移行点に低い山形突帯を一条巡らした壺である。内面に指の押圧調整痕。胎土に砂、金雲母を含み、焼成を良くない。黄褐色。2・3は小型の鉢である。ともに内面に指の押圧調整痕がつけられる。外面は器面があれいるため調整不明。ともに胎土には石英粒砂を含むが、焼成は2は良くなく、3は良好。2は暗黄褐色、3は黒褐色。4・5は高坏

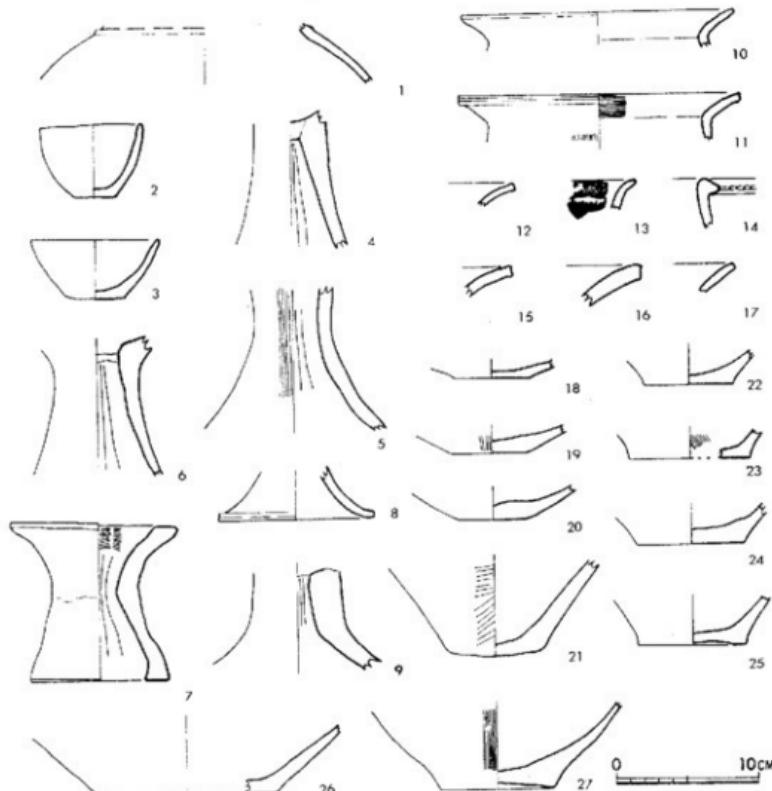


Fig.31 弥生式土器実測図II

の脚部である。4の外面は縦の窓調整、5は外面縦刷毛目調整。内面はともにしづらり痕がみられる。4は石英粒砂を胎土に混じ、焼成良好。黒褐色。5は外面縦刷毛目調整。内面はともにしづらり痕がみられる。4は石英粒砂を胎土に混じ、焼成良好。黒褐色。5は胎土に砂粒を含み、焼成はもろい。黄褐色。8は脚部である。器面があれでいるため調整不明。胎土に砂粒を含み、焼成はよくない。暗黄褐色。6・7・9は器台、6は最もくびれ部位が上部にあり、そこから急に外へ向かって開く。外面は調整不明だが、内面にはしづらり痕がみられる。7は器高11~11.4cmの若干ゆがんだ器形をもつ。口径11.6cm、脚幅径9.8cm、胴中位が最もくびれ、上部は外彫気味に、下部は内彫気味に外に開く外面は指の押圧調整痕が全面につけられ、内面は口縁部に横刷毛目調整。胴部にはしづらり痕がみられる。口縁上端と脚幅端はともに水平に作られる。また、胴中位のくびれ部には擦合痕が認められる。9の外面は調整不明。内面にはしづらり痕。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。10~15・17は臺である。10~12・15・17は「く」の字口縁をもつ。10は口縁部横なで調整。胴部には刷毛目調整がみられる。11は口唇部が沈線状に凹む。口縁外面と胴部内面は横なで調整。口縁内面と胴部外縁は刷毛目調整。12は口縁端が肥厚し口唇は凹む。口縁部横なで調整。15も同様である。17も横なで調整、胎土にはそれぞれ砂、金雲母(10)、石英粒砂(11・15)、砂粒(12・17)を含み、焼成は10以外は良くない。黄褐色(10・17)、暗黄褐色(11)、褐色(12)、赤褐色(15)を呈する。13は如意状口縁をもち、口唇部に刻目を施したもので、胴部外面に刷毛目調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。黒褐色。弥生時代前期のものである。14は内傾する口縁部に高い刻目突帯を貼り付けたもので、外面は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。茶褐色を呈する。弥生時代中期初頭のものであろう。16は大型臺の口縁部か、口唇部は凹む。胎土に石英粒砂を混じ、焼成良好。黄褐色。18~27は底部である。25・27は上げ底、21が丸底気味の他は平底である。外面刷毛目調整(19・21・27)、内面刷毛目調整(23)、底面刷毛目調整(18・23)があり、25の外面部底近くは竪状のもので調整している。胎土は、砂、金雲母(18)、石英粒砂(19・20・22・24・26・27)、砂粒(21・24・25)を含み、焼成は20・22・25・27以外は良くない。褐色(18)、赤褐色(19・22・24・26)、暗褐色(20・23・25・27)、黄褐色(21)を呈する。

(四)

## (2) 石 器 (Fig. 32, 33)

## 石庖丁 (石製穂摘み具) (Fig. 32-1~8)

1は濃灰岩質の石材を素材として、敲打、整形後入念に研磨している。刃部は両刃で背部とともに直線的であるが、左右両端で大きく外彫している。穿孔は表裏から行なわれており、表面の右、裏面の右穿孔部から背部にかけて紐ずれがみられる。なお穿孔部は第4表でみるよう体面の中央部より右上にかたよっており、最大厚は刃部つくり出し部にある。第1号住居址出土。

2は砂岩質の扁平疊に研磨を加えて直線的な両刃の刃部をつくり出している。穿孔は表裏から行なわれ、穿孔部は体面の右上部にかたよっている。また左右両端は刃部と直交しており、

3 造 物

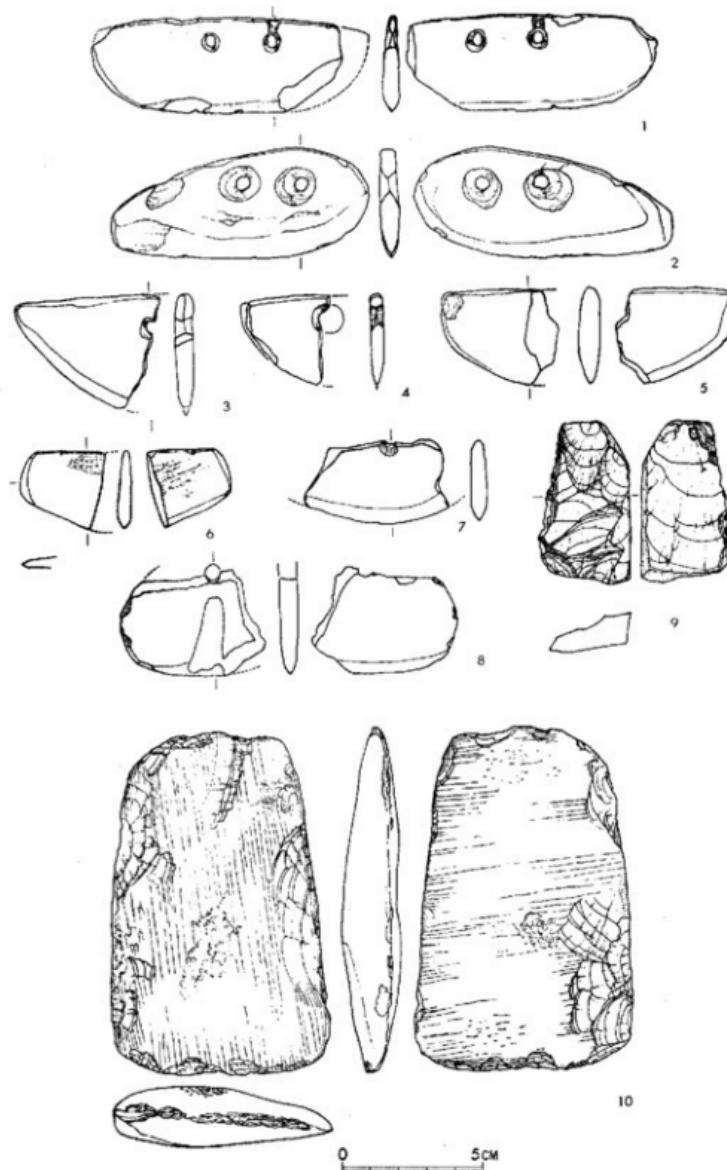


Fig.32 石器大綱圖 I

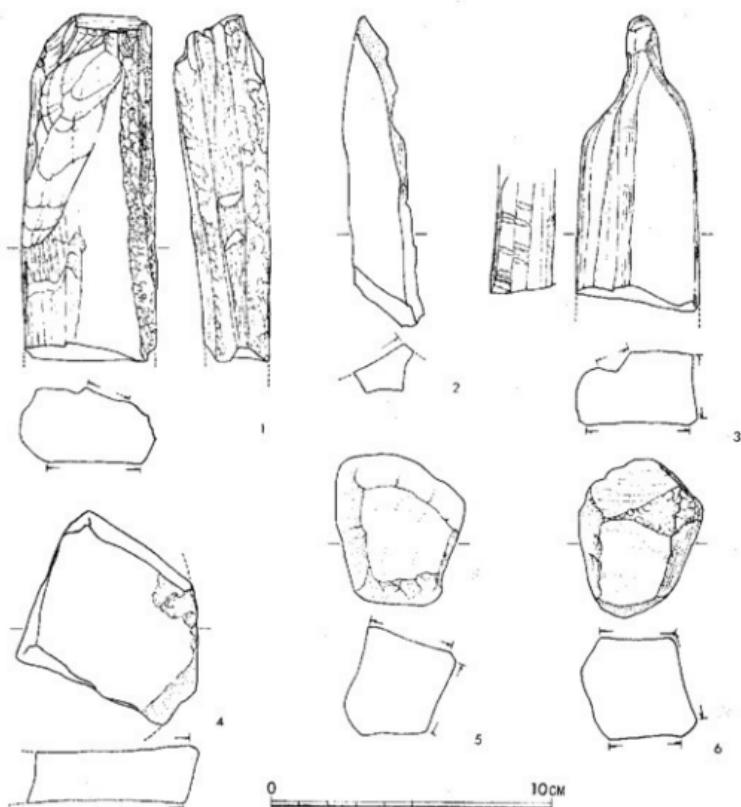


Fig.33 石器実測図Ⅲ

表裏から角度のある研磨によって両刃となっている。第2号住居址出土。

3～8は、いずれも凝灰岩質の石材を素材として敲打、整形後入念に研磨を加えている。3～5は直線的な背部をもち、6の肩部は外彎している。刃部はすべて両刃であるが、5～6が1、2と同じように左右端が刃部、背部とほぼ直交する形になるのに比べて、3、4は外彎した刃部が背部へとつながっている。穿孔は3、4、7が表裏から行なわれており、8が片面からのみ行なわれている。3～8は古墳盛土中出土。

## 3 通 務

第4表 神松寺遺跡出土の石施丁計測値

(単位cm)

系	a	b	c	d	e	f	g	h	i	系	a	b	c	d	e	f	g	h	i
1	9.9	3.4	0.2	0.6	4.25	2.2	3.45	0.8	0.8	5	3.4	0.30	0.75						
2	9.2	3.9	0.55	0.7	4.7	2.1	2.4	0.9	1.3	6		0.2	0.5						
3	4.3	0.5	0.6	4.8			1.1		7			0.6							
4	3.4	0.4	0.45	3.2			0.85		8			0.65	3.35						

◆は推定値を示す

## 削器、石斧 (Fig. 32—9, 10)

9は古銅輝石安山岩製の縦長剣片の左縁辺に表裏から二次加工を加えて鋭い刃部をつくり出している。古墳盛土中出土で繩文時代、または弥生時代前期頃のものと考えられる。

10は硬砂岩に敲打を加えて整形し、表面には長軸方向の、裏面には横方向の研磨を加えている。刃部は両刃で入念に研磨されているが、使用によると思われる打漕痕がみられる。また両側縁の一部には敲打痕が残っている。第12号住居址床面出土。

砾石 (Fig. 33-1~6) 1は凝灰岩質の石材を用いた仕上砾石で、表裏面が砥面となっている。右側面中央部に凸面があり、表裏から溝をつくって折りとるという擦り切り技法が用いられている。なほ左側面は研磨されている。第9号住居址出土。2は凝灰岩質の石材を用いた仕上砾石で、砾面は1面である。第5号住居址出土。3も凝灰岩質の石材を用いた手持の仕上げ砾石で、表面に溝状の砥面がある。また右側面と下面も砥面となっており、左側面には、二段のノミによる整形痕がみられる。第15号住居址出土。4は砂岩製の荒砾で、表裏面が砥面となっている。第13号住居址出土。5, 6とも砂岩製手持の荒砾で、5は表面と右側面が、6は表面、右側面、裏面、上側面が砥面となっている。5, 6は古墳地山整形による溝から出土したもので、第7~13号住居址の切り合い関係にあるグルーブに伴出するものと考えられる。

(山口)

## (3) 鉄 器 (Fig. 34)

鉄鎌 (1) 無茎で基部の抉りは浅い。先端と脚の一部を欠損し、現存長5.1cmを計るが、推定全長は5.4cmとなる。最大幅は3.2cmで断面は扁平で鍔はない。厚さは0.4cmを計る。1号住居址床面出土。

鉄鎌 (2) 鎔化が著しいが、形状より刈鎌を考える。折り返し部と刃部の一部を残す。現存長4.0cm、基部幅2.9cm、刃部幅2.3cm、厚さ0.4cmを計る。直刃の鎌で背部は直線的である。折り返しは正面を向き、柄は刃部に直角よりやや開きめに着装されている。12号住居址覆土よりの出土である。

鉄ノミ (3) 鎔化が著しい。方柱形を呈し、長さ8.7cm、断面は0.9cm×1.0cmの正方形に近い方形をなす。刃部先端幅0.7cm、刃部は柱状片刃石斧に似ている。

鉄斧 (手斧) (4~6) 鍛造の鉄製手斧である。基部両端を折り曲げて袋部(着柄部)をつくっている。

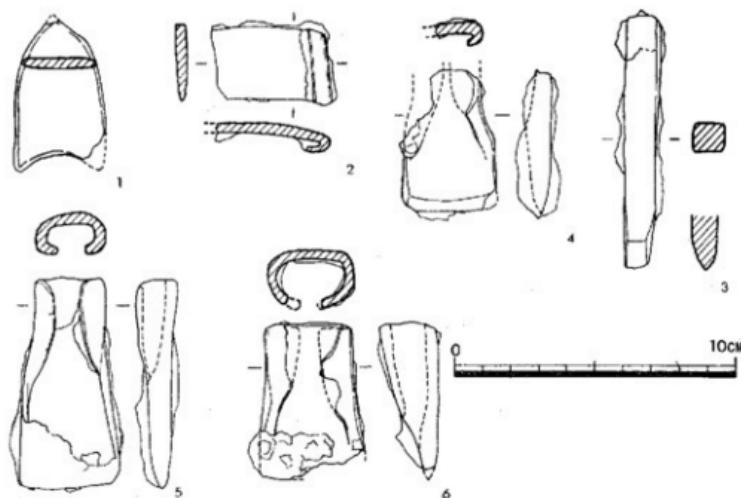


Fig.34 銅器実測図

4は15号住居址覆土よりの出土である。鈍化が著しく、左側基部と右刃部を欠損している。全長5.0cmの小形品である。推定刃部幅3.1cm、推定袋部外径2.3cm、厚さ0.8cm。

5は8号住居址西壁床面出土。完形である。全長7.2cmを計る。刃部はわずかに弧状をなす。各部の法量は、袋部基部外径2.3cm、内径1.7cm、刃部幅3.1cm、厚さ0.9cm、折り返し部と身の間隔は0.8cmである。

6は1号住居址床面よりの出土である。4、5に比べてひと回り大きい。刃部は使用により本来の位置より後退している。袋部に木質の付着が認められる。現存長5.0cm、厚さ0.6cm、袋部基部外径3.0cm、内径2.2cm、折り返し部と身の間隔1.1cm、推定刃部幅3.7cmを計る。

(前出)

## 第4章 まとめ

### 1. 神松寺御陵古墳

#### (1) 神松寺御陵古墳の平面図形の検討

古墳の築造は一定の尺度を使用し、厳密な設計のもとに行なわれていることはすでに先学の指摘されたところである。北部九州においてこの種の研究はたちおくれていたが、最近、柳沢一男氏によって石室平面企画の研究が意欲的に押し進められ、その大要をつかめるまでになった。柳沢氏によると石室の平面企画に使用された尺度は、晋尺系の尺度（1尺 $\approx$ 24cm）、長尺系の高麗尺（1尺 $\approx$ 35cm）、唐尺（1尺 $\approx$ 30cm）の三種類で、時代的には晋尺→高麗尺→唐尺と変遷し、また、これらの尺度で企画された石室には、多くの類型が指摘されるという。石室平面形の企画の検討は、古墳築造の背景を考えていく場合にきわめて有意義な試みであり、今後の古墳研究において一つの指針を与えるものである。今後の資料の増加によって解き明かされる問題が多い。

今回調査した古墳はわずか1基であったが、基礎資料の一端として石室および墳形についての原企画を復元しておく。

本墳の外形は前方後円墳で内部主体に複室構造をもつ横穴式石室を有する。立地的には桶井川を眼下におさめる丘陵頂部にあり、油山山麓の群集墳とは隔離された状態にある。

資料の検討と操作については柳沢氏に従う。つまり、「石室各部のデータにおける一定の近似関係と構成比を検討し、それを基礎にした数値によって使用尺度を推定する。第2段階として、推定した尺度の方眼上に同一スケールの石室平面図をのせ、方眼と各部の適合関係を検討する。そして、石室構造における各種要素を勘案しつつ石室構成法を求め、原企画を復元する方法を用いる。」

本石室は長方形の玄室に小さい前室を付設した複室構造をもつ横穴式石室である。天井部、右側壁の礎石の大部分は失うが石室平面形は完全に知ることができる。玄室はやや胴張りの平面形をとっている。各部データは次のとおりである。

玄室長	左 230cm 右 236cm	玄室幅	奥 152cm 中央 178cm 前 150cm	石室全長	右 440cm 左 470cm
-----	--------------------	-----	--------------------------------	------	--------------------

以上のデータから使用尺度を推定すれば、高麗尺（約35cm）では玄室長が7～7.5尺に、玄室幅が4.5～5尺に、石室全長が12.5～13.5尺に換算できる。また、晋尺系（約24～26cm）で

(1) 柳沢一男「石室の平面図形の構成について」『片江古墳群発掘調査報告書』所収、1973年「横穴式石室平面図形の検討」「相原古墳群」所収、1974年「北朝九州における初期横穴式石室の展開」「九州考古学の諸問題」所収、1975年「横穴式石室の平面図形について」「広石古墳群」所収、1977年

(2) 柳沢一男「横穴式石室の平面図形について」「広石古墳群」所収、1977年

は、玄室長が9.5  
～10尺に、玄室幅  
6～7尺に、石室  
全長が17～18尺に  
換算でき、より後  
者の音尺系尺の使  
用が妥当性をもつ。  
この点は先の  
報告においても指  
摘しておいた。  
註30

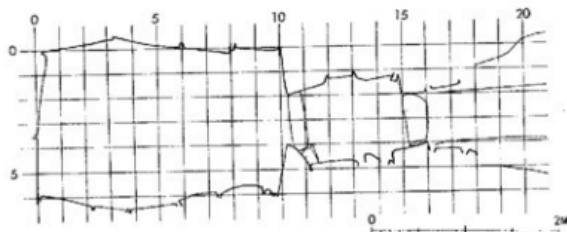


Fig.35 神松寺跡古墳石室の方尺による操作図 (1/100)

(方尺1コマは26cm)

次に音尺系尺の方尺上に石室プランを重ね合せ、使用尺度方尺との適合関係の操作によって得られた結果は Fig. 35の如くである。

尺度方尺と石室プランがよく適合することが判明する。すなわち、玄室長は左右共に10コマにあたり、奥壁、前壁共に6コマにあたるが、玄室中央部はやや広がる。玄室の袖幅は左右共に2コマずつの出である。玄門幅は2コマをとる。前室幅は玄室玄門幅を0.5コマずつ広くし3コマをとり、前室長は玄室玄門の長さに違いがありはっきりとはしないが、右壁では3コマをとる。前室玄門袖幅は0.5コマずつの出で、前室玄門幅2コマをとる。羨道幅はやや広がるが、長さは右側壁で尺度と一致しないが壁体全体からみれば2コマをとり、左右共に2コマをとることがわかる。前室玄門前面は絶縁16に一致する。主軸を中心にシンメトリーの平面图形がもとめられる。その基準となつたのは、奥壁、玄室前壁、前室玄門の前面の三ヶ所であったと思われる。以上の点よりこの石室の原企画は次のように復元される。使用尺度は約26cmを1尺とする音尺系尺度と推定する。

石室長	18尺	玄門幅	2尺	前室玄門幅	2尺	玄室長	10尺	前室長	3尺
羨道長	2尺	玄室幅	6尺	前室幅		3尺	奥壁～第1粗石		16尺

袖幅玄室	{	右2尺	前室	{	右 0.5尺
		左2尺			左 0.5尺

立体图形の検討は玄室の天井部がないので行えないが、参考までに、玄室玄門の樋石から天井部までが4尺と一致することを付記しておく。

前節において、石室平面图形に約26cmを1尺とする音尺系尺度を使用した企画があることを推測した。当然のことながら、墳丘にもその尺度を使用した平面企画があったことは容易に推測される。

本墳の場合、後円部の約1/3と前方部の約半分を失い、墳丘の遺存状態もたび重なる盗掘や土砂の流失によって変形し、墳丘裾も葺石等はなく明確にしがたく、また、発掘調査の方法においても問題点があり、かならずしもその原企画を求めるには好資料ではない。

註30) 山崎純男「神松寺古墳『辰ノ嶺遺跡』所収、1976年

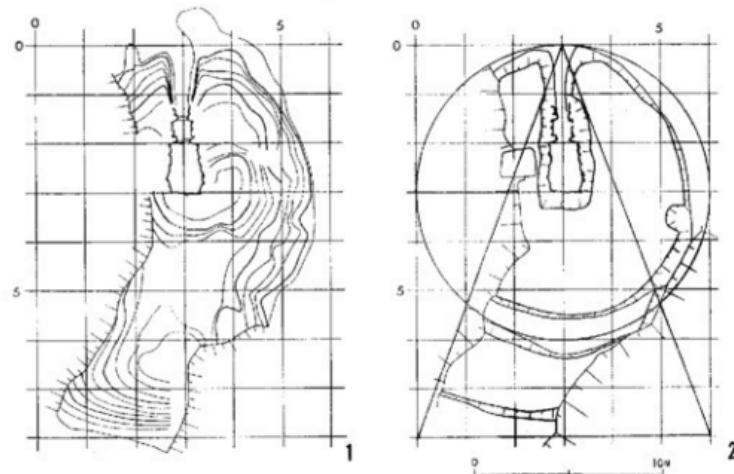


Fig. 36 神松寺古墳墳丘の方眼による操作結果（方眼は10尺（260cm））

しかし、本墳の地山整形は一見して厳密な企画性のもとに行なわれたことがわかる。地山整形時に掘削されたと考えられる後円部と前方部の間の溝はその事情を堆弁に物語っている。また、墳丘と石室の位置関係にもその企画性は充分に反映していると想像することができる。以上の点より石室平面図形の企画から求めた石室主軸を基準として尺度方眼と墳形プラン（墳丘遺存図と地山整形平面図）の適合関係を操作して最もよく適合する状態は Fig. 36-1 に示した如くである。

墳丘遺存状態の適合関係からみてみると墳丘全長は 8 コマをとり、後円部半径は 3 コマをとると考えられ玄室奥壁がその中心点となるが、墳丘裾との適合関係に若干のずれを生じている。この誤差は単に発掘時における掘り過ぎの誤差ではない。

次に、墳丘底面をなす地山整形との適合関係についてみると、ほぼ墳丘遺存状態と同様の適合関係 (Fig. 36-2) を示しているが、古墳地山整形によって生じた溝の中心が、石室奥壁（後円部中心点）より 3 コマとっていることが判明する。そこで、後円部中心点を中心に半径 3 コマで円を描くと、地山整形上端の円弧と約 0.5 コマの差をもった同心円が描かれ、その円弧は後円部と前方部の間に存在する地山整形溝の中央を同心円状に走ることがわかる。溝幅は 1 コマをとる。このことは先に指摘したように、地山整形段階に平面企画の実施にあたって半径 3 コマの円を中心に溝の掘削が行なわれたと考えができる。前方部幅は不明であるが遺存状態から 0.5 コマ分をとると推定される。推定前方部コーナーとくびれ部を結んだ線は、ほぼ古墳主軸上の後円部端で合う。以上の諸点よりこの墳丘の原企画を求めるとき、墳丘全長 80 尺 後円部径 30

尺 前方部幅 60尺 くびれ部幅 40尺となる。玄室長 10尺を基本単位としていることが知られる。しかし、地山整形において実際の墳丘は原企画よりやや小さいものとなっていると想定する。

本項と極めて類似した墳丘（平面形）を有する古墳に熊本県上益城郡御船町所在の久保長塚古墳がある。この古墳は九州縦貫自動車道の建設に伴い熊本県教育委員会文化課によって調査された。<sup>註41)</sup> 墳丘を完全に失い古墳の周溝のみが残存していた。調査は現状をもとにして測定し、その使用尺度として秦、前漢尺（1尺=23.1cm）が最もよく適合するとして尺度方眼の操作を行っている。しかし、基準点のとり方において認意的であり、周溝についてはその尺度方眼との適合関係がうまくいっていない。この古墳の築造年代は周溝内出土の須恵器より5世紀後半乃至6世紀前半としている。この時期において北部九州の石室企画の使用尺度は主に晋尺系尺度が用いられており、神松寺御陵古墳の墳丘も晋尺系尺度によっていると考えられ、長塚古墳の場合も使用尺度は秦、前漢尺より晋尺系尺度蓋然性が強い。ちなみに、長塚古墳に晋尺系尺度の方眼操作を行ってその適合関係をみたのが Fig. 37である。

この結果では、秦、前漢尺の適合関係より以上の適合関係を認めることができた。その原企画は、古墳全長200尺 後円部径150尺 前方部幅100尺 周溝幅25尺でその単位尺度は25尺と推定される。

神松寺御陵古墳と久保長塚古墳との間には前方部幅において相違があるが、他の部分についてほぼ同様の企画によっていることが推定され、久保長塚古墳は神松寺御陵古墳の2.5倍の規模を有している。

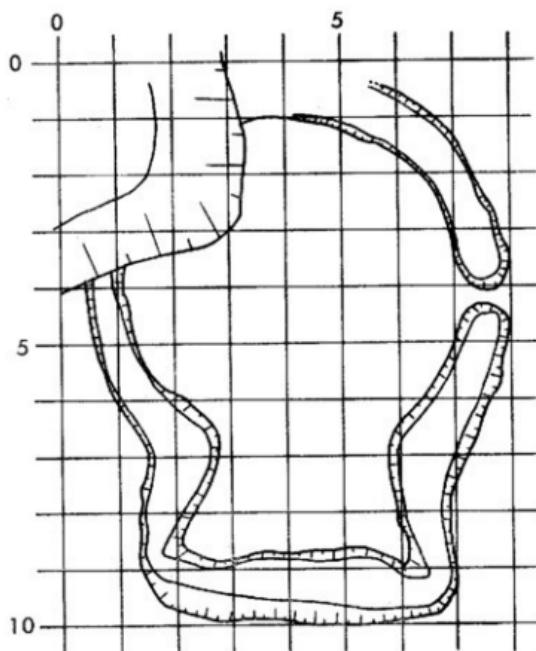


Fig. 37 熊本県長塚古墳の方眼操作結果（1コマ25尺）1尺=24cm

註41) 緒方勉、田中義和、「長塚古墳」「久保遺跡」熊本県文化財調査報告第18集所収、1975年。

以上、みてきたように古墳築造において平面形は緻密な企画のもとにおこなわれていることが推測され、その企画性は石室と填丘の間に密接に認めることができる。

今後の精度の高い資料の増加、検討が要求されるが、それはとりもなおさず発掘精度の高さが要求されることはいうまでもない。

## (2) 被葬者の性格と年代

本墳は外形を前方後円にとり内部主体に複室構造の横穴式石室を有する。全長20mと小規模な古墳であるが、その意味するところは大きい。古墳の構造、出土遺物より被葬者の性格とその年代を考えてみたい。

本墳は地域的には樋井川流域（福岡市に合併前の早良郡樋井川村に相当する）に位置する。この地域は古代において早良郡毗伊郷に比定され、弥生時代以来地形的にも一つの歴史的完結性を有した地域であった。以下同地域の古墳の分布について見てみよう。

樋井川流域には現在、消滅し、その位置関係が不明などを除いても約100基におよぶ古墳が確認されている。古墳の分布は油山山麓とそれ以外に大別される。油山山麓には東から大牟田古墳群、柏原古墳群、四十塚古墳群、荒谷古墳群、大平寺古墳群、旗ヶ原古墳群、井手古墳群、瀬戸口古墳群、片江古墳群、倉瀬戸古墳群、七隈古墳群と多くの古墳群がならび古墳数は約100基を数える。福岡市における一大群集墳を形成している。これらの古墳群で発掘調査を実施して内容が明らかなものに、大牟田古墳群、瀬戸口古墳群、片江古墳群、倉瀬戸古墳群、七隈古墳群がある。そのうち報告書が刊行されたものでその内容をみてみる。

瀬戸口古墳群では3基が調査された。<sup>200</sup> いずれも径10mの小円墳で内部主体に单室の両袖型横穴式石室をもつ。盗掘によりその遺存状態は良好でない。遺物には須恵器、玉類、刀子、鉄刀、鐵鎌、金環等がある。6世紀末～7世紀代の古墳群である。

片江古墳群では6基が調査された。<sup>201</sup> いずれも径10～13mの小円墳で、内部主体に单室の両袖型横穴式石室をもつ。出土遺物には須恵器、土師器、鉄鎌、刀子、馬具、鉄製鋤先、金環、玉類等がある。報告者はこれらの古墳の被葬者の性格を「直刀を典型とする実用武具の副葬は当初からなかったと考えると、鉄鎌を除けば工具、馬具、農具に限られており、そこに被葬者の性格を農業生産に基く集団の突出した部分を想定し、あわせて地方軍事機構の一端を示すものとはできないであろうか」としている。6世紀後半～7世紀代の古墳群である。

倉瀬戸古墳群では8基が調査された。<sup>202</sup> いずれも径10m前後の小円墳で、内部主体に单室ないしは複室の両袖型横穴式石室をもつ。出土遺物には須恵器、土師器、玉類、耳環、鉄製鋤先、鉄刀、鉄鎌、刀子、馬具、鉄鎌がある。6世紀後半～7世紀代にかけての古墳群である。

注(1) 福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財地名表(総集編)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集、1971年

(2) 折尾学、田坂美代子『瀬戸口古墳群』株式会社リコー、1975年

(3) 柳田純孝、柳沢一男『片江古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集、1973年

(4) 倉瀬戸古墳群調査団『倉瀬戸古墳群』、1973年

以上、内容の明らかな油山山麓の古墳をみたが、これを概説的にまとめれば、いざれもが、径10~15m前後的小円墳であり、内部主体には単室ないし複室構造の両袖型横穴式石室をもつ。出土品は武具、工具、馬具、農具装身具、容器類をもつが、鐵鎌を除いた武具(直刀等)、あるいは馬具類は極めて少いことが指摘できる。以上より油山山麓の古墳群は古墳時代後期的一般的な群集墳とみることができる。

一方、油山山麓と対峙した関係にある鴻ノ巣山南麓と樋井川流域の出口近くの低丘陵頂部に古墳がある。鴻ノ巣山南麓には百塚とよばれた古墳群があったというが、福岡城築城の際、その石材が使用され古墳は消滅したといふ。現在、高宮(寺塚穴観音)古墳<sup>2005</sup>一基を残すのみで古墳群の実態を明らかにすることはできない。油山山麓の古墳と同様に後期群集墳と考える。

樋井川流域の出口近くの丘陵頂部に単独で立地する古墳は、現在、京ノ隈古墳と本報告の神松寺御陵古墳の2基を知るのみである。<sup>2006</sup>

京ノ隈古墳は前方後方墳で前方部の大部分を失うが、推定全長約40mを計る。後方部のほぼ中央に割竹式木棺を内蔵した粘土椁1基、前方部に1基以上の箱式石棺をもつ。粘土椁からは、鐵劍、鍔、鍔先各1点が出土した。築造年代は4世紀末と考える。

神松寺御陵古墳は本報告のとうりである。築造年代は出土須恵器からすれば6世紀後半にもとめられるが、石空構造や追葬時における事情を考慮した場合、6世紀中葉までさかのぼらせることができる。

以上、樋井川流域において内容が明らかな古墳について概観した。以上のことより京ノ隈、神松寺御陵の両古墳と油山山麓の古墳との間に著しい相違点が存在することが判明する。京ノ隈、神松寺御陵の両古墳は立地的には丘陵頂部に単独で位置し、油山山麓の古墳が群集するのと対照的である。古墳外形は前方後方ないしは前方後円形をとり規模的には油山山麓の古墳(円墳)より大きい。副葬遺物は神松寺御陵古墳では、武器(直刀二振以上、鐵鎌)馬具類がセットをなし、油山の古墳の遺物の組み合せより優越していることが指摘できる。築造年代からすれば、両古墳は油山山麓の古墳群より先行する。京ノ隈、神松寺御陵古墳は油山山麓の古墳群とは隔離され、その被葬者の性格は樋井川流域を代表する首長層とみることができる。先に指摘したように京ノ隈古墳が大和政權が北部九州を統屬する過程の中で生じたものとすれば、その後裔と考えられる神松寺御陵古墳の性格は早良部の中にあっては重要な意味をもつてくる。<sup>2007</sup>

(5) 「高宮古墳」「福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書」第1編、1924年

(6) 周辺地域は屯地造成が著しく、同様の古墳が存在した可能性の強い所があるが、すでに消滅している。京ノ隈古墳と神松寺御陵古墳の向に時刻的懸続性をもたせるにはその間になお数基の古墳の存在が必要である。その一つの可能性があるところとして淨泉寺遺跡の北側丘陵が考えられる。過去に発見ないしは脚注とみられる須恵器が出土している。参考資料として卷末に紹介しておく。

(7) 山崎謙介『京ノ隈古墳』段谷地所株式会社、1976年

(8) 言引に同じ。

(9) 早良郡には京ノ隈、神松寺御陵古墳を除いて前方後方、前方後円墳の存在は確認されていない。樋井川流域は早良郡の中では油山地帯は狭く最も農業生産力の低い所である。早良の平野部において五島古墳以来、頗る古墳は出現しない。今後その比較検討が必要である。

樋井川流域の古墳は最近の調査によって序々に明らかになりつつある。今後の資料の増加とその分析により古墳時代の地域像が明らかになるのはそう遠い話ではない。(山崎)

## 2. 神松寺遺跡(第2地区)

### (1) 住居址

今回の調査で検出した住居址は20軒で、その大部分は重複し完全なプランを示すものは少なかった。前述したように、その切り合い関係には一定のまとまりがあり、6～7軒の重複を見る。住居址間には一定の空間を有し、住居址の重複は一軒の住居址の連続的建て替えとみるところが可能である。住居址は大別して5群にわけられ、同時存在は5軒前後と考える。宅地造成によって破壊された部分や未発掘区を入れると、かなりの住居址の存在が想定できる。

住居址の平均的なものを示せば、方形プランで、中央に凹状に掘りこんだ円形の炉をもち、炉をはさんで二本の主柱穴がある。住居址の一方の壁に地山の削り出し、ないしは張り床のベッドを状造構付設する。それと対峙した方に貯蔵穴(用途は不明であるが、明らかに柱穴とはみられないものである。)が掘り込まれる。

早良において最近の調査においてかなりの住居址が発掘され、住居址の変遷の概略をつかむことができるようになった。以下それを示すと次のようになる。

弥生時代中期中葉、宝台遺跡にその典型例とみる。円形プランで、中央に方形の掘り込みがみられ、それを中心として6～12本の柱穴が存在する。<sup>註(1)</sup>

弥生時代中期後半 宝台遺跡にその例をみる。小形の方形プランを有し、2本の主柱穴がある。炉はない。一方にかたより方形の掘り込みがある。ベッド状造構の付設はみられない。<sup>註(2)</sup>

弥生時代後期前半～中葉、本遺跡にみるとおりである。

弥生時代後期～4世紀代、野方遺跡、有田遺跡にその典型例をみる。方形ないしは長方形プランを有し、中央に炉がある。炉をはさんで2本の主柱穴がみられる。前代と比較しベット遺構が顕著で四方の壁に付設する例もある。

5世紀代、有田遺跡にその例をみる。方形ないしは長方形プランを有し、4本の主柱穴がみられる。炉は中央をややはずれ一方にかたよる。ベット状造構の付設はない。<sup>註(3)</sup>

6世紀代、片江辻遺跡にその典型例をみる。方形プランを有し、4本の主柱穴がある。一方の壁にカマドが付設される。ベット遺構はない。<sup>註(4)</sup>

この住居址の変遷は概略的なものであって今後さらに検討される必要性がある。今後の基礎的資料として神松寺遺跡の住居址の一覧表を提示しておく。(山崎・横山)

註(1)・(2) 高倉洋彰編『宝台遺跡』日本住宅公團、1970年

(3) 柳田純孝、『野方中原遺跡調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集、1974年

(4)・(5) 福岡市教育委員会の第4次調査による所見。

(6) 塩屋勝利、力武卓治『片江辻遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集、1977年

第5表 神松寺遺跡住居址一覧

編 號	規模 (m)	主柱穴数 (直後cm)	主柱穴 の方向	炉 址	ベッド 状造物 の位置	貯藏穴 (cm)	出土 遺物			備 考
							土器	石器	鐵器	
1	$4.3 \times (3.5 + \alpha)$	2 (40)	N-68°-W	円形 (60)	北側	横円形 (50×70×20)	○	石庖丁	鉄斧, 鉄鎌	2号より新しい
2	$(3.8 + \alpha) \times$						○	石庖丁	タガネ	1号より古く 3号より新しい
3	$(1.6 + \alpha) \times$						○			弥生時代中期 の土器を混入。 2号より古い
4										1号より古い
5	$(3.8 + \alpha) \times$						○	石		弥生時代中期 の土器を混入。 6号より新しい
6										5号より古い
7	$4.7 \times (3.6 + \alpha)$	2				円形 (50×12)	○			11・12・13号 より新しい
8	$5.3 \times (2.7 + \alpha)$						○		鉄斧	12号より古く 9・13号より 新しい
9					円形 (60)	円形 (56×47)	○			8号より古い
10	$(3.8 + \alpha) \times (1.8 + \alpha)$	2 (?)				円形 (60×35)				7号より古い
11							○		鉄鎌	床全面に炭化物 7号より古く 8・13号より 新しい
12	$4.9 \times (3.31 + \alpha)$	2				円形 (70×50×55)	○	石斧	鉄鎌	7・8・12号 より古い
13									砥石	
14										
15	$4.5 \times (3.7 + \alpha)$	2 (1) (30)	N-8° E	円形 (60)	南側	円形 (50×)	○	鉄斧	ガラス 小土器 花瓶	後世上層によ つて擾乱され ている
16							○			
17	$(3.1 + \alpha) \times (1.8 + \alpha)$				不整形 (80×40+α×8)	北側		○		1号を調査
18	$(1 + \alpha) \times$							○		
19										
20	$(2 + \alpha) \times 2 (1)$	N-24.5°-E?		円形 (40)	北側		○			か土のみ残る

## (2) 神松寺遺跡出土の石器をめぐって

## ——弥生時代後期の石庖丁——

今回の調査で、石庖丁8点・石斧1点・削器1点・砥石8点と先土器時代の三棱尖頭器・古銅鋤石安山岩製削片各1点が出土した。前述したように石庖丁2点・石斧1点・砥石3点は、弥生時代後期（以下後期とする）の住居址床面から出土し、ほかの石庖丁・砥石も古墳盛土内出土の土器から後期のものといえる。第1・2号住居址では、鉄器と石庖丁が共伴している。この時代は、金属器も福岡平野をはじめ、県内各地で出土している。最後の石製利器・石庖丁

の形及び製作地についてふれてみたい。

器形的特徴をつかむため、石庖丁の背部を上にし、穿孔部が水平になるようにして置き、各部位の計測を行なった。cは背部の厚さ、dは最大厚を示している。fは左右穿孔部間の長さであるが、穿孔部は大小があるため二孔の中心間を計測した。したがってe・fもそれぞれ左右穿孔部の中心まで計測した。h・iは穿孔部中心からそれぞれ真上の背まで計測した。このようにして各遺跡出土の石庖丁を計測し、結果を各時期別にみていくことにする。

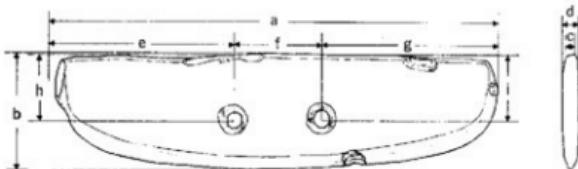


Fig.38 石庖丁の計測位置

#### 弥生時代前期

この時期のものを出土している遺跡としては、市内で長浜貝塚・今宿松原・有田・淨泉寺・板付遺跡があり、筑後地区では、小郡市の津古内畑・横隈山・牛田ヶ遺跡等がある。また、飯塚市の立岩遺跡、北九州の原遺跡等でも出土している。この時期のものは、福岡平野・筑後平野では、硬砂岩・頁岩・粘板岩等を素材としており、筑豊地方では輝緑巖灰岩・珪質シルト岩等を素材としている。また板付・津古内畑・原遺跡等では未製品も出土している。各部位の計測値は以下のようにまとめることができた。

aは平均15cm前後で、bは5cmをこえるものが多い（研ぎ直したものも含む）。

c・dは同値を示している（最大厚は背部にある）ものが多い。

fは福岡・筑後平野出土のものは3cm前後、筑豊地方出土のものは2.2cm前後が多い。しかし、3.4cmや2.4～2.8cmのものもある。

e・gはほぼ同じである（穿孔部は中心にある）。

h・iは同じで、2cm前後のものが多い。

#### 弥生時代中期

この時期の石庖丁の出土例が最も多く、県内各遺跡で出土しており、福岡平野をはじめ筑後平野においても、筑豊地方を原産とする輝緑巖灰岩製石庖丁が出土している。ほかに粘板岩・砂岩・ホルンフェルス等の石材も用いられている。

aは12cm前後で、bは4.5cm前後のものが多い。

c・dは同じか、または穿孔部近くに最大厚がある。

fは2.2cm前後のものがほとんどである。

e・gはほぼ同じである。

h・iはほぼ同じで、1.8cm前後である。

## 弥生時代後期

本遺跡をはじめ、福岡平野では、淨泉寺・小笠・野方中原・門田遺跡等で、筑後平野では、西中ノ沢遺跡等で出土している。また筑紫地方では、柳ヶ谷・小原・向山・立屋敷遺跡等で出土している。素材としては凝灰岩質のものが多いが、雲母片岩・粘板岩・硬砂岩も使われている。

aは12cm以下のものが、bは4cm前後のものが多い。最大厚は、刃部つくり出し部から穿孔部間にある。

fは2.2cm前後のものが多いが、2cm以下のものあり一定していない。また2ヶ所以上の穿孔部をもつものもある。

e・gは前時期に比べて差が大きくなっている（穿孔部は左右にかたよっている）ものが多い。

h・iはほぼ同じもの、0.3cm前後の差があるものがある。なおそれぞれの間は1cmないものが多くなっている。

以上各時期の計測値をみてきた。まとめると、石庖丁の長さ及び器長は、前期から後期になるにしたがって短くなる。<sup>註(1)</sup>最大厚は、前期のものが背部にあり、中期のものが背部から穿孔部<sup>註(2)</sup>ふきんにあり、後期のものは、刃部つくり出し部にあるものが多い。穿孔部間は前・後期のものは、一定していないが、中期のものは、県内ほぼ同じである。また穿孔部と背部の関係は、新しくなるにしたがって短くなっている。

石庖丁製作地については、中山平次郎氏が立岩塚ノ正遺跡出土で、輝緑凝灰岩製石庖丁について報告し、今山産出玄武岩製太形蛤刃石斧出現期と同時期であることを指摘されたのが最初である。<sup>註(3)</sup>森貞次郎氏・下條信行氏は、立塔製石庖丁が、前期末から中期初頭に立岩遺跡及び立岩遺跡周辺地で、製作され、中期前半に県内及び佐賀平野・大分県日田地方まで拡がっていることを論求している。<sup>註(4)</sup>また、下條氏は弥生前中期の段階では各遺跡で出土している未製品に注目し、各集落内部で製作されたとしている。<sup>註(5)</sup>

前期の石庖丁を計測結果を加味して製作地を考えてみることにする。各地出土のものともほかの時期のものに比べて大型であるが、穿孔部間隔をみていくと、板付遺跡出土のものは3.0cmであり、原遺跡出土のものは2.2cmである。また、穿孔部間外の部位も遺跡ごとにほぼ同じで、遺跡ごとに規格性があり、未製品も出土している。下條氏がいいうように各集落内部で製作されたといえよう。また、小郡市の周辺遺跡等では、同一規格と思われるものがあり、近い範囲にある集落間では供給関係にあったとも考えられる。

(1) 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性九州」『日本の考古学』Ⅷ 1966年

(2) 中山平次郎「飯塚市附近の遺跡より出土させる石鍬並びにその系統の遺物に就いて」『考古学』5-4 1934年 中山平次郎「石庖丁製造所跡」『考古学』5-5 1934年

(3) 註(1)と同じ。下條信行「九州考古学の諸問題・弥生時代」『考古学研究』19-1 1972年

(4) 下條信行「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』22-1 1975年 下條信行「未製石器よりみた弥生時代商店の生産体制」『九州考古学の諸問題』1975年

中期前半ごろになると、福岡平野各地では、輝緑凝灰岩製で、穿孔部間が2.2cmで規格性に富んだものが各遺跡で出土しており、前期末から中期初頭に、立岩遺跡及び立岩遺跡周辺地域で製作され始まったものが、中山・森・下条氏が論述されたよに普及したといえる。しかし、この時期のもので凝灰岩質・頁岩質等の石材をもちいたものも、輝緑凝灰岩製のものと同値を示しているものが多い。さらに、板付遺跡出土の石庖丁の素材は、ほとんど筑豊地方に分布する下関層群中の脇野並層群中に求めている。輝緑凝灰岩製だけでなく、ほとんどの石庖丁が筑豊地方でつくられた可能性があると同時に、板付遺跡では未製品も含まれているところから、石材も持ち帰ったといえるかも知れない。また、立岩製石庖丁を模倣したとも考えられよう。

後期になると、穿孔部と背側が短くなり、小形化しているという傾向はあるが、遺跡ごとにみていっても規格性がない。また、神松寺遺跡出土のものも含めて、凝灰岩質の石材を素材とするものが多いが、2 (Fig. 32) のように砂岩等の河原砾をもちいたもの等がある。また、神松寺遺跡の住居群が存在した時期には、福岡平野及び県内各地で、鉄製鎌も使用されていたと考えられ、鉄製鎌の出土例もあり、収穫具の過渡期にあたっていると思われる。石製農耕具はじょじょにではあるが、鉄製農耕具に変って使用されるようになったといえる。（山口）

## 主な引用・参考文献

- |   |                          |
|---|--------------------------|
| 小田富士雄『総括』『原遺跡』1973年                       | 小田富士雄・中村整身編『原遺跡』1976年    |
| 木村幾多郎「石器」『鹿部山』1973年                       | 兒島隆人・藤田等編『嘉穂地方史先史編』1973年 |
| 酒井仁夫編『福岡県八女市室間所在遺跡群調査概報』1972年             |                          |
| 酒井龍一「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究21-2』1974年 |                          |
| 沢山臣・山口謙治・原俊一『板付周辺遺跡調査報告書』[4]1977年         |                          |
| 下条信行・佐田茂・高倉洋勝「工人集団とその生活」『奴国史』1972年        |                          |
| 西谷正・柳田康延・副島邦弘『古内畠遺跡』1970年                 |                          |
| 村岡和雄・松村道博『淨宗寺遺跡』1974年                     |                          |
| 森貞次郎・岡崎敬『福岡県板付遺跡』『日本農耕文化の生成』1961年         |                          |
| 柳田康雄編『山易翁詩集』『文化財調査概報』1975年                |                          |

## 付　淨泉寺出土の須恵器

本資料は昭和47年、当時、福岡大学の学生であった原 俊一氏等数人によって採集されたものである。採集地は淨泉寺遺跡の北側の丘陵斜面である。発見時は20数個に割れており、付近にはこの須恵器以外に遺物はなく、また、特別の構造等の存在は認められなかったという。丘陵頂部より転落した可能性が強い。

須恵器は脚部は完形であるが上部を欠いている。器台ないしは脚付壺と考えるが上部の整形技法からすれば脚付壺の可能性が強い。脚部は脚端部にむかって広がり安定感がある。脚端部よりやや上に2本の突帯をめぐらし、筒部2ヶ所に2条の沈線をめぐらし4段に分割する。最下段を除いてそれぞれに透しがある。下二段は三角形透しで、最上段は長方形透しをそれぞれ4ヶ所に配する。上部二段にはカキ目調整後に各段2段にわたって櫛目波状文がめぐらされるが、一部重複して3段になる部位もある。波状文は下から描き順次上へ移っている。透しは波状文を描いた後にあけられる。上部は内面に同心円状のタタキがみられ、外面は平行条線タタキ目である。脚端部は平らで、外面に一部平行条線タタキ目が残る。脚内面はナヂによる調整、胎土は精良、焼成はややあまい。青灰色を呈する。

古式の須恵器である。現在、この資料は福岡大学歴史研究部の保管に帰している。（山崎）

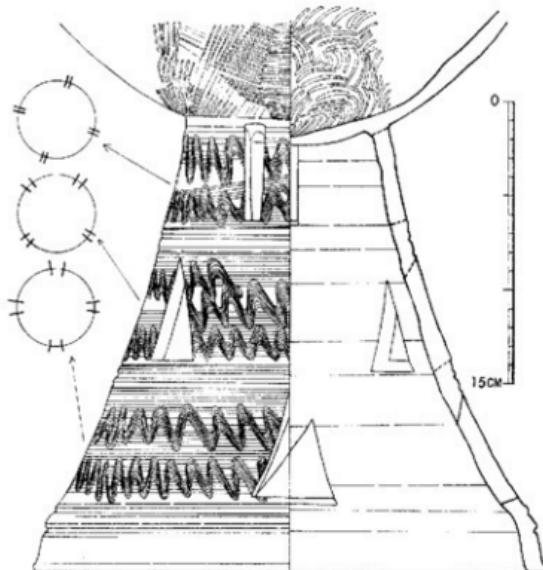


Fig.39 淨泉寺出土の須恵器実測図

# 図 版





(1) 遺跡遠景（西南より）



(2) 神松寺御陵古墳の現状



(1) 神松寺御陵古墳 Bトレンチ断面



(2) 神松寺御陵古墳 Aトレンチ断面



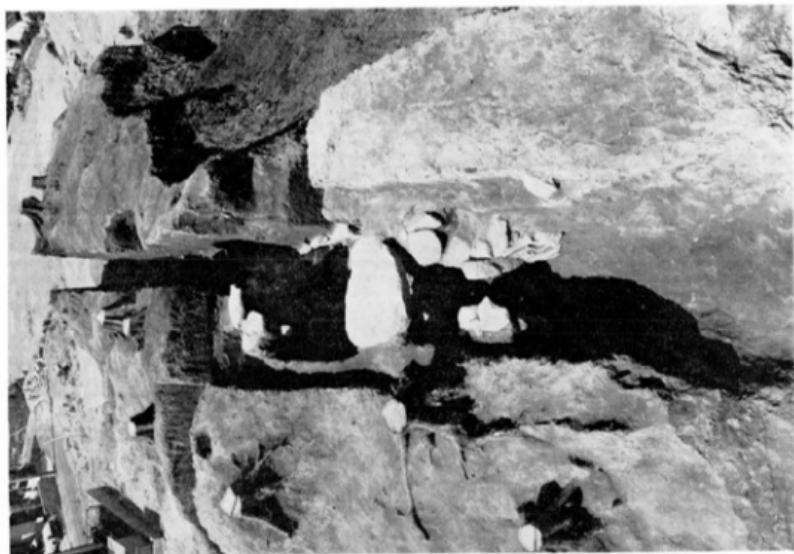
(3) 神松寺御陵古墳に対する祭壇状遺構



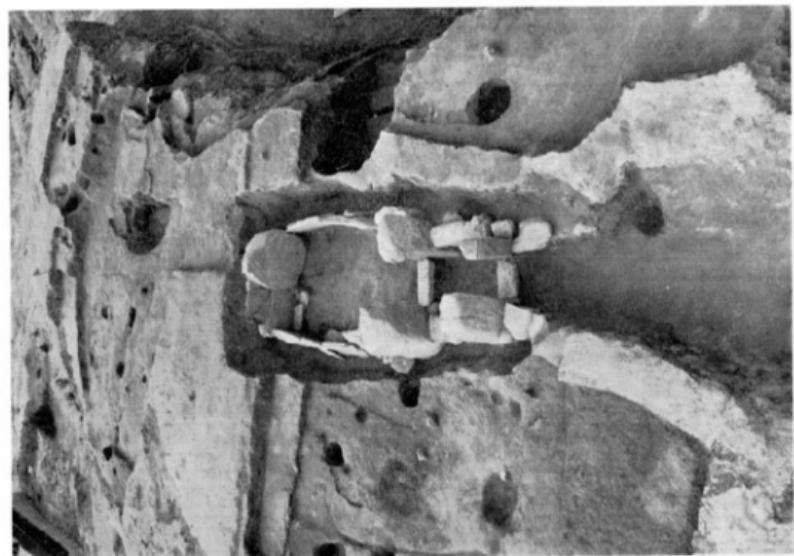
(1) 神松寺御陵古墳の石室と地山整形



(2) 神松寺御陵古墳の地山整形溝



(1) 神松寺御陵古墳の石室と墳丘遺存状況



(2) 神松寺御陵古墳の墓頭と石室



(1) 神松寺御陵古墳の石室と供献土器



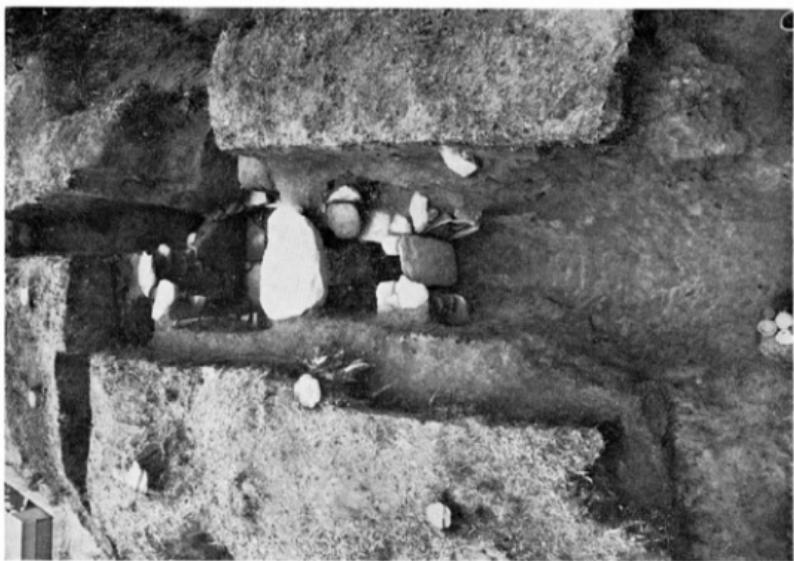
(2) 神松寺御陵古墳石室閉塞状況



(1) 神松寺御陵古墳 石室（玄室より前室を見る）



(2) 神松寺御陵古墳石室（渓道より）



(1) 神仏寺御陵古墳石室（南上口）



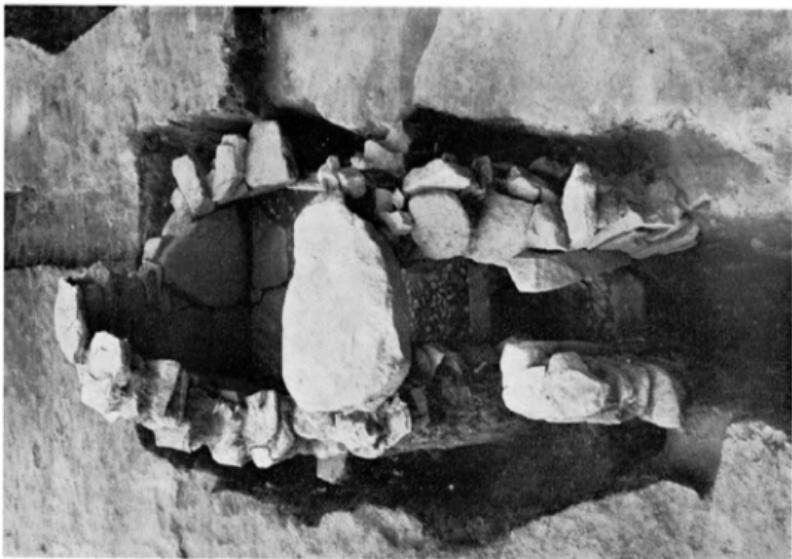
(2) 神仏寺御陵古墳石室（北上口）



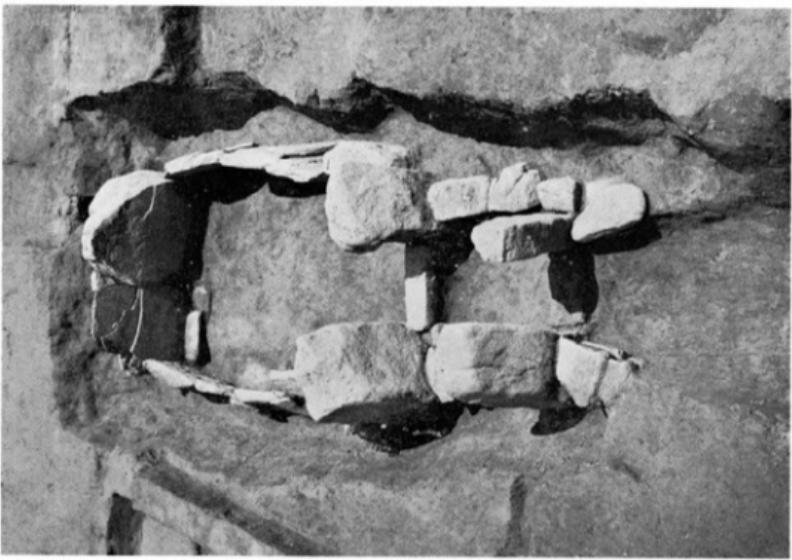
(1) 神松寺御陵古墳石室裏壁



(2) 神松寺御陵古墳石室の壁体



(1) 神松寺跡古墳の石室と墓磚



(2) 神松寺跡古墳の石室壁石と墓磚



(1) 神松寺遺跡 第1群住居址



(2) 神松寺遺跡 10号住居址



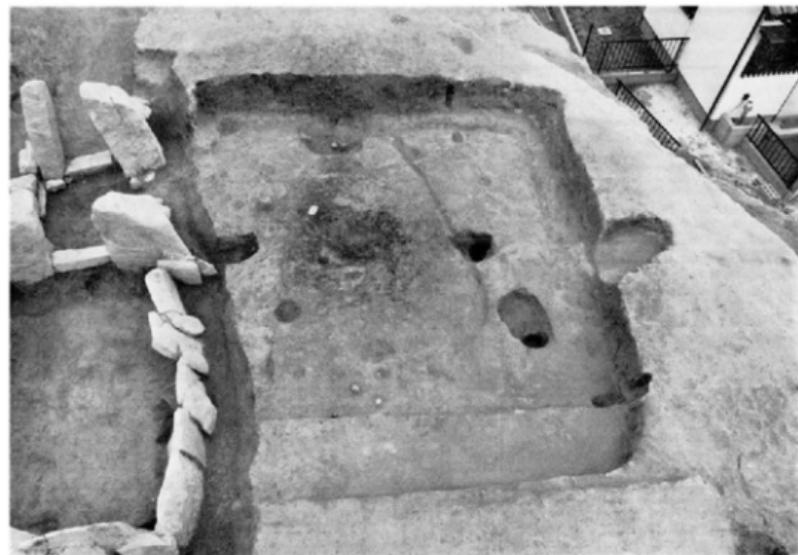
(1) 神松寺遺跡住居址全景



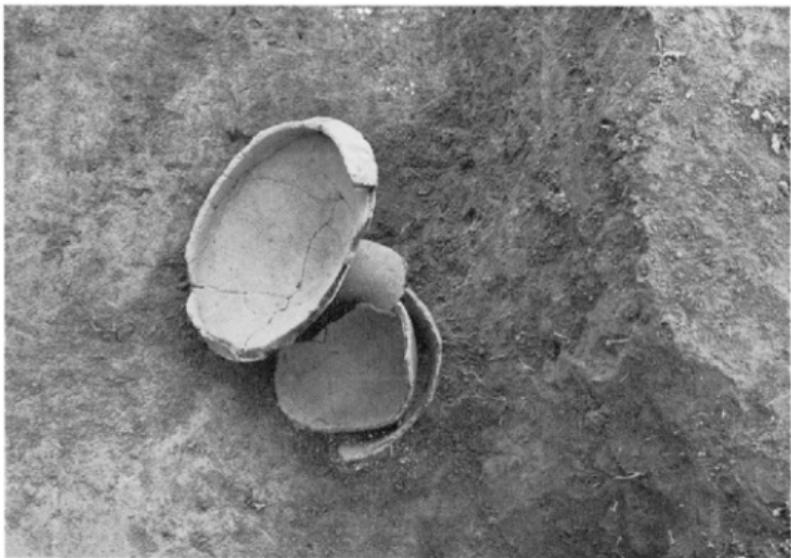
(2) 神松寺遺跡 第3群住居址



(1) 神松寺遺跡 1号住居址（南より）



(2) 神松寺遺跡 1号住居址（北より）



(1) 神松寺遺跡 16号住居址遺物出土状況



(2) 神松寺遺跡 20号住居址遺物出土状況

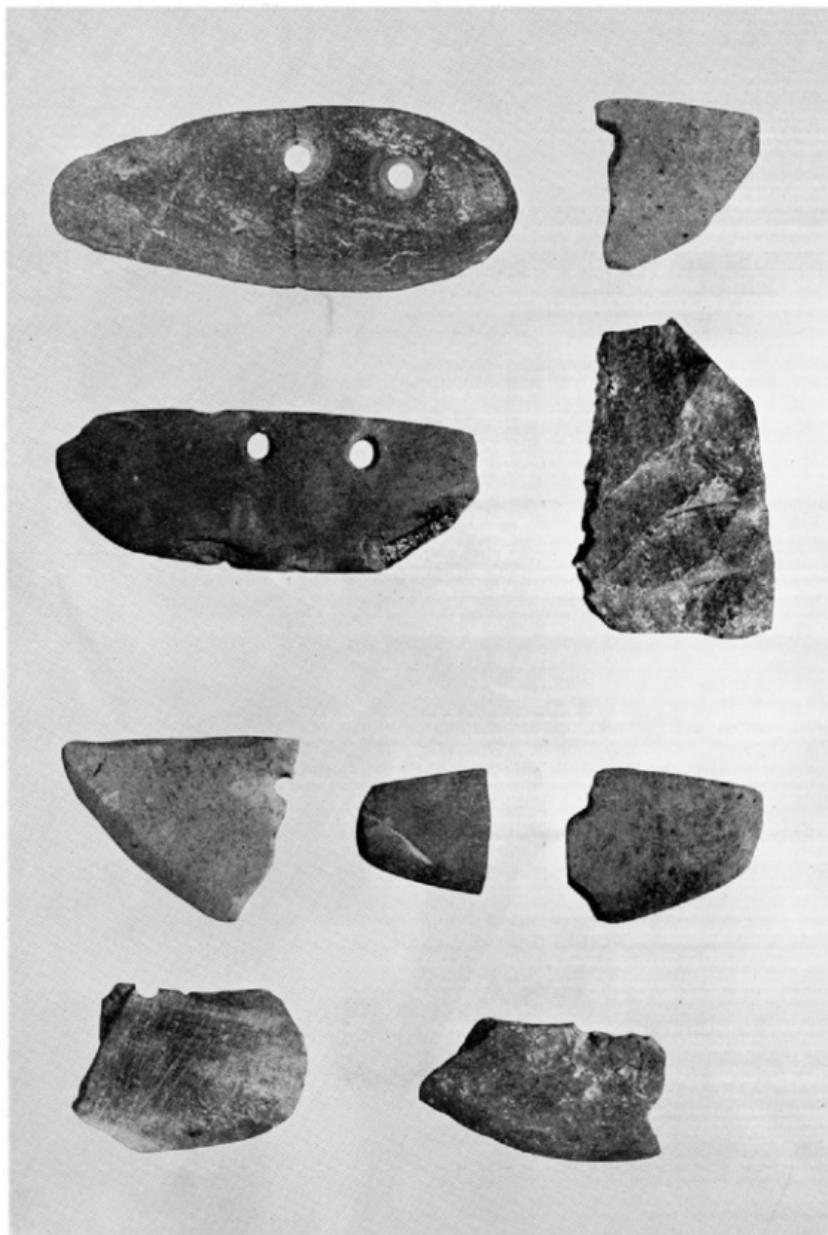


3

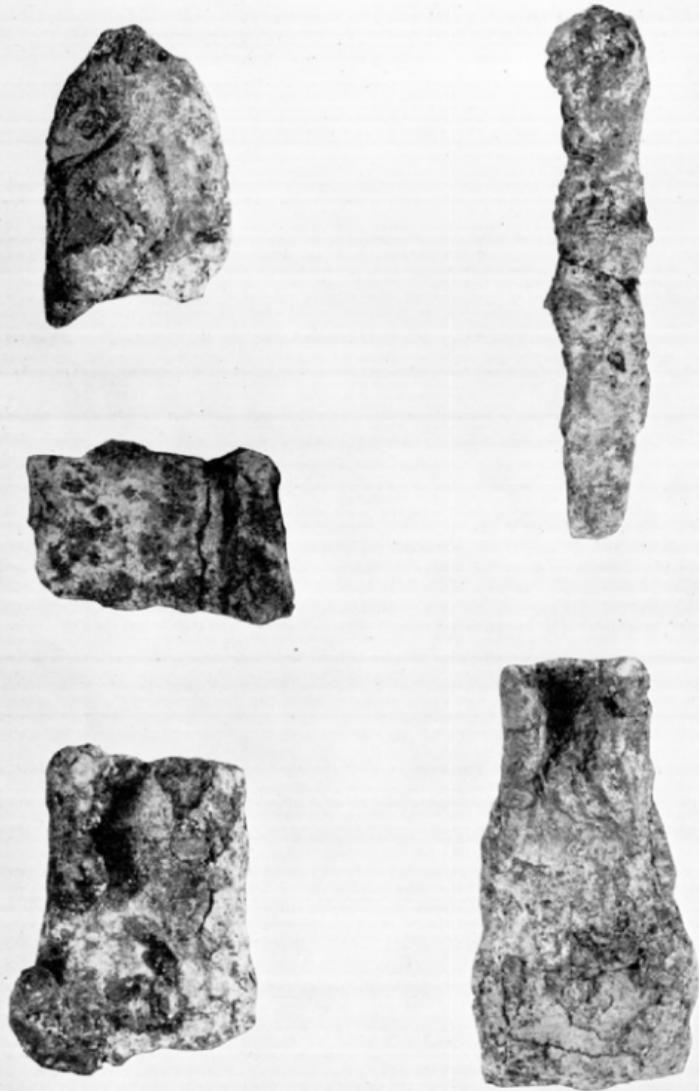


2

神松寺遺跡出土遺物（石器）①③神松寺遺跡 ②カルメル修道院内遺跡



神松寺遺跡出土遺物（石庖丁）



神松寺遺跡出土遺物（鐵器）



神松寺御陵古墳・神松寺遺跡出土遺物 ①②弥生式土器 ③～⑤須恵器 ⑥⑦鐵器 ⑧砥石

福岡市西区片江

## 神松寺遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集

1978年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1—8—1

印刷 株式会社 チューエツ

福岡市博多区東比恵2丁目9番1号

神松寺遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集

福岡市教育委員会